

長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡

長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡

2010 年

財団法人 京都市埋藏文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路建設工事に伴う長岡京跡・上里遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

平成 22 年 2 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

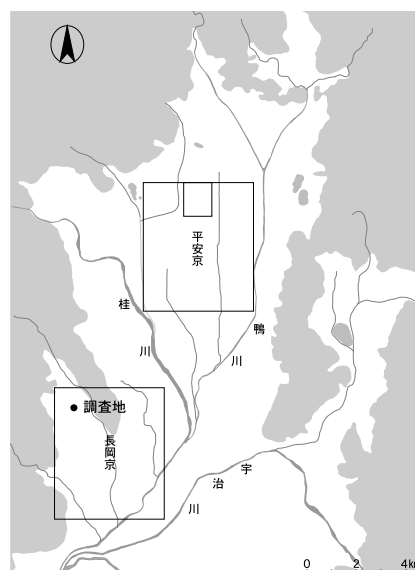
例 言

- 1 遺 跡 名 長岡京右京二条三坊一・八町、上里遺跡
長岡京右京第 965 次調査（7 ANUNK-3・UNI-1 地区）
- 2 調査所在地 京都市西京区大原野上里南ノ町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2009 年 3 月 18 日～2009 年 11 月 5 日
- 5 調査面積 2,323 m²
- 6 調査担当者 高橋 潔・近藤奈央・津々池惣一・南出俊彦・大立目 一・南 孝雄
- 7 使用地図 国土地理院発行の 1：50,000 地形図「京都西南部」、京都市発行の都市計画基本図（縮尺 1：2,500）「石見」・「寺戸」・「粟生」・「向日町」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系 VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 便宜上 I・II 区は 1 番から、III 区は 3000 番からそれぞれ通し番号で示し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 遺構規模 特に断りのない限り、遺構検出面での規模を示し、深さも検出面からの深度を示す。
- 14 本書作成 高橋 潔・近藤奈央・大立目 一・津々池惣一
- 15 執 筆 高橋・近藤（分担は目次に記した）
- 16 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

- 17 発掘調査および整理作業・本書作成作業において次の方々にご指導・ご助言・ご協力を頂いた。記して謝意を表します。（敬称略）

泉 拓良・千葉 豊・富井 眞・奥村香子・妹尾祐介・長廻友貴（京都大学）、矢野健一・河角龍典・富田昌太郎（立命館大学）、小野映介（新潟大学）、西本豊弘・住田雅和（国立歴史民俗博物館）、松田順一郎（史跡鴻池新田会所管理事務所）、中塚 良（財団法人向日市埋蔵文化財センター）、安富匠彦・面 将道（奈良大学）

（調査地点図）



目 次

1. 調査経過	（高橋）	1
(1) 調査に至る経緯		1
(2) 調査経過		2
2. 遺 跡	（近藤）	5
(1) 遺跡の位置と環境		5
(2) 既往の調査		7
3. 遺 構		15
(1) 層序と遺構の概要	（高橋）	15
(2) 長岡京期以降の遺構	（高橋）	21
(3) 長岡京期の遺構	（高橋）	22
(4) 奈良時代以前の遺構	（高橋）	23
(5) 弥生時代前期の遺構	（高橋）	23
(6) 縄文時代晩期の遺構	（近藤）	30
4. 遺 物		40
(1) 遺物の概要	（高橋）	40
(2) 長岡京期の遺物	（高橋）	40
(3) 弥生時代前期の遺物		42
1) 土器類	（高橋）	42
2) 石類器	（近藤）	46
(4) 縄文時代晩期の遺物	（近藤）	47
1) 土器類		47
2) 石器類		58
5. ま と め	（高橋）	64
(1) 本年度調査の成果		64
(2) 自然科学分析について		67
付章 上里遺跡の自然科学分析結果の概要	（パリノ・サーヴェイ株式会社）	69

図 版 目 次

図版1	遺構	I区	平面図1	（長岡京期以降、1：200）
図版2	遺構	I区	平面図2	（長岡京期、1：200）

- 図版 3 遺構 I 区 平面図 3 (弥生時代前期、1 : 200)
- 図版 4 遺構 I 区 平面図 4 (縄文時代晩期、1 : 200)
- 図版 5 遺構 II 区 平面図 (長岡京期以降、1 : 200)
- 図版 6 遺構 III 区 平面図 1・2 (長岡京期・奈良時代以前、1 : 200)
- 図版 7 遺構 III 区 平面図 3・4 (弥生時代前期・縄文時代晩期、1 : 200)
- 図版 8 遺構 1 I・II 区 長岡京期 全景 (西から)
 2 I 区 長岡京期 一条大路南側溝上層掘削状況 (西から)
 3 I 区 長岡京期 一条大路南側溝下層掘削状況 (西から)
- 図版 9 遺構 1 III 区 長岡京期 全景 (南西から)
 2 III 区 長岡京期 一条大路・西三坊坊間東小路交差点部 (西から)
- 図版 10 遺構 1 I 区 弥生時代前期 全景 (西から)
 2 III 区 弥生時代前期 全景 (南西から)
- 図版 11 遺構 1 III 区 弥生時代前期 竪穴住居 3171 (東から)
 2 I 区 弥生時代前期 竪穴住居 415 (西から)
 3 I 区 弥生時代前期 竪穴住居 580 (北西から)
 4 I 区 弥生時代前期 土器棺墓 290 (北から)
- 図版 12 遺構 1 I 区 縄文時代晩期 全景 (西から)
 2 III 区 縄文時代晩期 全景 (南西から)
- 図版 13 遺構 1 I 区 縄文時代晩期 土坑 848 (竪穴住居、西から)
 2 I 区 縄文時代晩期 配石遺構 1412 (北西から)
 3 I 区 縄文時代晩期 土器棺墓 740 (北から)
 4 I 区 縄文時代晩期 土器棺墓 1202 (南東から)
- 図版 14 遺構 1 I 区 縄文時代晩期 流路状遺構 1155 埋没状況 (北西から)
 2 I 区 縄文時代晩期 流路状遺構 1155 完掘状況 (北西から)
 3 I 区 縄文時代晩期 集石 1430 検出状況 (北西から)
- 図版 15 遺構 1 III 区 縄文時代晩期 土坑 3266 石器剥片調査状況 (西から)
 2 III 区 縄文時代晩期 土坑 3273 遺物検出状況 (東から)
 3 III 区 縄文時代晩期 流路状遺構 3263 下層 3274 遺物検出状況 (南東から)
 4 III 区 縄文時代晩期 流路状遺構 3263 下層 3274 完掘状況 (南東から)
- 図版 16 遺物 1 長岡京期および弥生時代前期 出土土器
 2 弥生時代前期 竪穴住居 580 出土土器
- 図版 17 遺物 1 弥生時代前期 石器 1 (石鏃・石錐)
 2 弥生時代前期 石器 2 (石庖丁・台石)
- 図版 18 遺物 1 縄文時代晩期 土坑 848 出土土器
 2 縄文時代晩期 流路状遺構 3274 上層出土土器

- 図版 19 遺物 1 縄文時代晩期 流路状遺構 3274 下層出土土器 1
 2 縄文時代晩期 流路状遺構 3274 下層出土土器 2
- 図版 20 遺物 縄文時代晩期 流路状遺構 1155 出土土器 1
- 図版 21 遺物 1 縄文時代晩期 流路状遺構 1155 出土土器 2
 2 縄文時代晩期 流路状遺構 1155 出土土器 3
- 図版 22 遺物 1 縄文時代晩期 土製品
 2 縄文時代晩期 石器 1 (石鏃・石錐)
- 図版 23 遺物 1 縄文時代晩期 石器 2 (削器・剥片・石核)
 2 縄文時代晩期 石器 3 (石核・黒曜石剥片・翡翠丸玉・石棒)
- 図版 24 遺物 1 縄文時代晩期 石器 4 (石刀)
 2 縄文時代晩期 石器 5 (石錘・石斧)
- 図版 25 遺物 1 縄文時代晩期 石器 6 (磨石・凹石・敲石)
 2 縄文時代晩期 石器 7 (石皿・台石)

挿 図 目 次

図 1	調査地点図 (1 : 50,000)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 2,000)	2
図 3	I・II区 調査前全景 (北東から)	3
図 4	III区 調査前全景 (南西から)	3
図 5	I区 作業風景 (北東から)	3
図 6	III区 作業風景 (西から)	3
図 7	I区 レーザー測量作業風景 (西から)	4
図 8	周辺の遺跡分布図 (1 : 25,000)	6
図 9	上里遺跡既往調査位置図 (1 : 5,000)	8
図 10	I区 X=-116,944 ライン断面図 1 (1 : 50)	16
図 11	I・II区 X=-116,944 ライン断面図 2 (1 : 50)	17
図 12	II区 X=-116,944 ライン断面図 3 (1 : 50)	18
図 13	III区 調査区北壁断面図 1 (1 : 50)	19
図 14	III区 調査区北壁断面図 2 (1 : 50)	20
図 15	I区 掘立柱建物 1 実測図 (1 : 100)	21
図 16	I区 竪穴住居 415 実測図 (1 : 50)	24

図 17	I 区	竪穴住居 580 実測図 (1 : 50)	25
図 18	Ⅲ区	竪穴住居 3171 実測図 (1 : 50)	26
図 19	Ⅲ区	竪穴住居 3289 実測図 (1 : 50)	26
図 20	I 区	掘立柱建物 2 実測図 (1 : 50)	27
図 21	I 区	土坑 298 実測図 (1 : 20)	27
図 22	I 区	土坑 331 実測図 (1 : 50)	27
図 23	I 区	土坑 340 実測図 (1 : 50)	28
図 24	I 区	土坑 344 実測図 (1 : 50)	28
図 25	I 区	土坑 393 実測図 (1 : 20)	28
図 26	I 区	土坑 664 実測図 (1 : 20)	29
図 27	Ⅲ区	土坑 3103 実測図 (1 : 50)	29
図 28	Ⅲ区	土坑 3140 実測図 (1 : 50)	30
図 29	I 区	土器棺墓 290 実測図 (1 : 20)	30
図 30	I 区	土坑 848 実測図 (1 : 50)	31
図 31	I 区	土器棺墓 740 実測図 (1 : 20)	32
図 32	I 区	土器棺墓 1202 実測図 (1 : 20)	32
図 33	I 区	土器棺墓 1358 実測図 (1 : 20)	32
図 34	I 区	配石遺構 1412 実測図 (1 : 20)	32
図 35	I 区	土坑 849 実測図 (1 : 40)	33
図 36	I 区	土坑 1033 実測図 (1 : 50)	33
図 37	I 区	土坑 1079 実測図 (1 : 40)	34
図 38	I 区	土坑 527 実測図 (1 : 20)	34
図 39	I 区	土坑 1433・1434 実測図 (1 : 40)	34
図 40	I 区	土坑 1429 実測図 (1 : 50)	34
図 41	I 区	流路状遺構 1155 断面図 1 (1 : 50)	35
図 42	I 区	流路状遺構 1155 断面図 2 (1 : 50)	35
図 43	I 区	流路状遺構 1155 断面図 3 (1 : 50)	36
図 44	I 区	集石 1430 平面図 (1 : 50)	37
図 45	I 区	流路状遺構 1155 (集石 1430 部分) 断面図 (1 : 50)	38
図 46		長岡京期遺物実測図 (1 : 4)	41
図 47		弥生時代前期出土土器実測図 1 (1 : 4)	42
図 48		弥生時代前期出土土器実測図 2 (1 : 4)	43
図 49		弥生時代前期出土土器実測図 3 (1 : 4)	44
図 50		弥生時代前期出土土器実測図 4 (1 : 4)	45
図 51		弥生時代前期出土土器実測図 5 (1 : 4)	45

図 52	縄文時代晩期出土土器実測図 1 (1 : 4)	48
図 53	縄文時代晩期出土土器実測図 2 (1 : 4)	50
図 54	縄文時代晩期出土土器実測図 3 (1 : 4)	51
図 55	縄文時代晩期出土土器実測図 4 (1 : 4)	52
図 56	縄文時代晩期出土土器実測図 5 (1 : 4)	54
図 57	縄文時代晩期出土土器実測図 6 (1 : 4)	56
図 58	縄文時代晩期出土土製品実測図 (1 : 4)	57
図 59	長岡京期・弥生時代前期・縄文時代晩期主要遺構分布図 (1 : 1,200)	65
図 60	調査地点の位置および分析層準	70
図 61	2 地点の試料およびX線写真	72
図 62	各地点の植物珪酸体含量密度	72

表 目 次

表 1	既往調査一覧表	10
表 2	遺構一覧表	15
表 3	遺物一覧表	40
表 4	放射性炭素年代測定および暦年較正結果 (その 1)	68
表 5	放射性炭素年代測定および暦年較正結果 (その 2)	71
表 6	花粉分析結果	72

長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は京都市建設局道路建設部道路建設課による、I・II・3伏見向日町線道路建設工事に先立って実施した発掘調査である。調査地は京都市西京区大原野上里南ノ町地内に所在し、対象となった遺跡は長岡京跡の右京二条三坊一・八町および上里遺跡であり、長岡京跡における調査では右京第965次調査(R965)にあたる¹⁾。

これまでに本道路の新設工事に先立って西より、2001年度に試掘調査、2003年・2005年・2006年・2007年の各年度に発掘調査を行っており、継続事業として本年度の発掘調査も(財)京都市埋蔵文化財研究所が担当した。本調査区の中央に南北に通る段丘崖による段差の東側は小

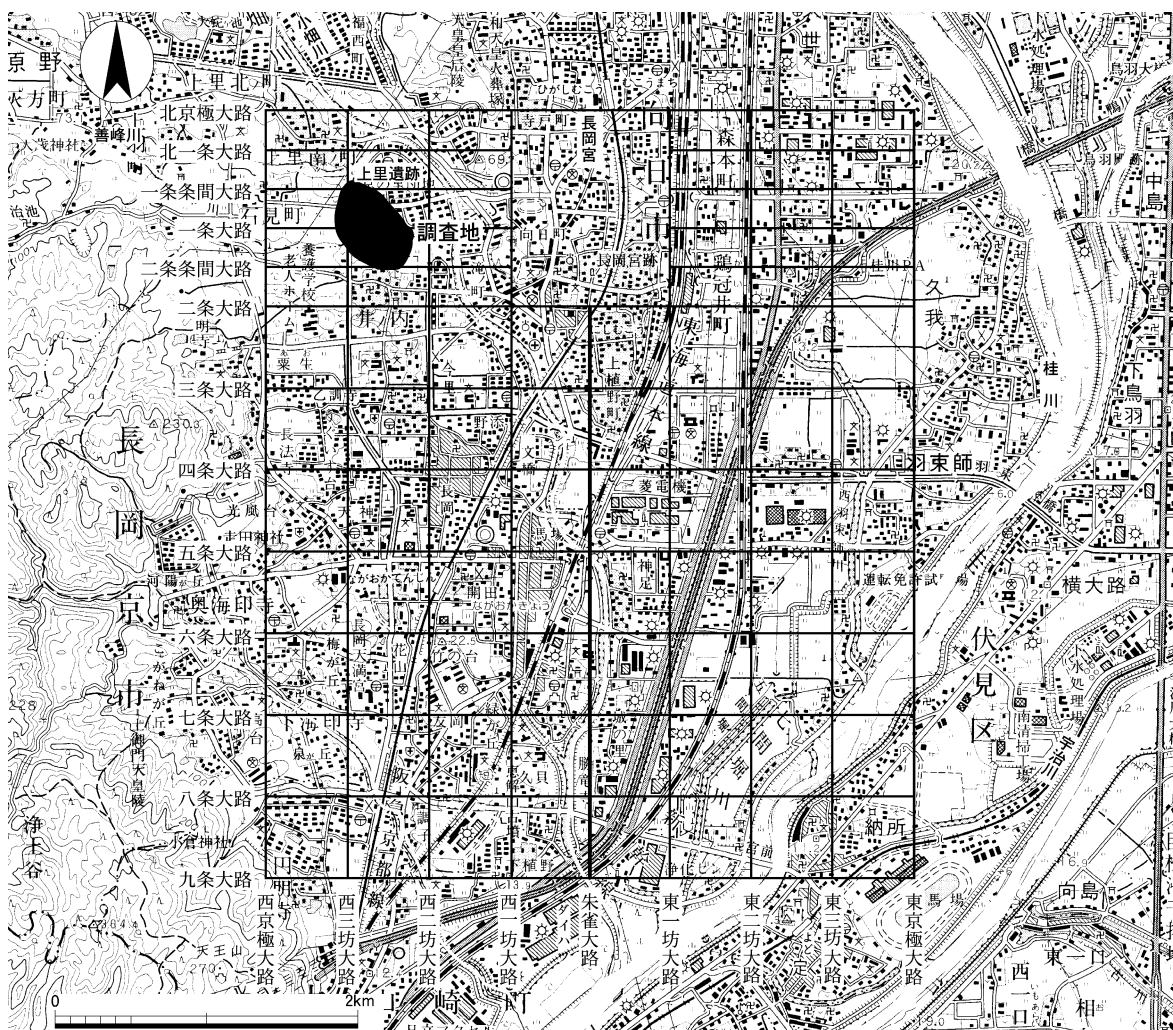


図1 調査地点図 (1 : 50,000)

畑川の氾濫原であることが想定されており、農道の東側では2006年度試掘調査によって長岡京期以前の遺構が残存しないことが確かめられている²⁾。このため、以東については発掘調査を行わず、本年度の調査を一連の調査の最終年度とすることとなった。

(2) 調査経過

調査区の設定(図2) 本年度調査対象地は2007年度調査区の東隣接地であり、2006年度試掘調査の結果によって調査対象外とされた農地の西側の農道との間である。当地のほぼ東西の中央には、小畑川(あるいは善峰川)によって形成されたと考える南北方向の段丘崖が存在しており、2~3mの段差をもって東側が低くなっている。調査の便宜上、この段丘の上(西側)をI区、段丘下(東側)をII区と呼ぶこととした。また、2007年度調査の未調査区も本年度の調査範囲とし、III区と呼称した。

調査の目的 本調査地は長岡京右京二条三坊一町・八町の北辺、一条大路南辺および、上里遺跡の推定範囲の中央東端にあっている。2007年度までの調査によって、当地には長岡京期、弥生時代前期、縄文時代晩期の各遺構がそれぞれ層位的に独立して良好に遺存していることが明らかになっており、本調査地においても同様の成果が期待された。

長岡京跡では、I・II区では長岡京期の一条大路南側溝および一町の宅地内の内溝・整地層さらに建物の有無・配置の状況、III区では一条大路南側溝および西三坊坊間東小路の東西両側溝の検出とその交差点部の状況の把握などを目的とした。

上里遺跡では、各調査区とも弥生時代前期、縄文時代晩期のそれぞれの遺構の拡がりや密度な

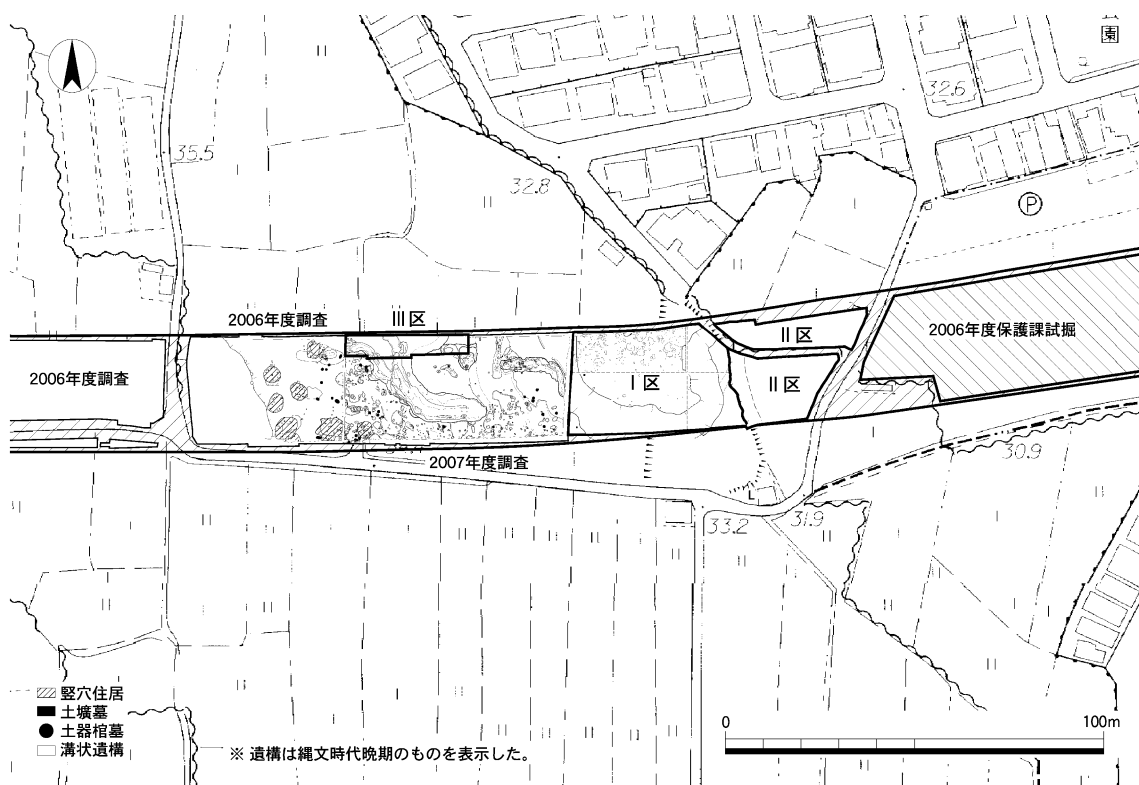


図2 調査区配置図(1:2,000)



図3 I・II区 調査前全景（北東から）



図4 III区 調査前全景（南西から）



図5 I区 作業風景（北東から）



図6 III区 作業風景（西から）

ど状況の把握と、両時期の層位的な関係の解明などを目的とした。

このほかに、当地周辺の地形形成の状況を把握するため、調査では最終面とした縄文時代晩期遺構面の下層や、I・II区間の段丘崖について本調査の課題とした。

調査経過 調査に先立って、周辺の農道・農地・給排水路の保全対策などを行い、大型車のための進入用の仮設道路の施工を行った。

調査は、昨年度同様、長岡京期1面、弥生時代前期2面、縄文時代晩期2面の大きく3時期・5面を対象とした。

現代耕作土の重機掘削より調査を開始し、長岡京期遺構面から順次進めて縄文時代晩期遺構面まで、遺構掘削・図面作成は基本的に人力で行った。各面への移行時に行った各層の掘削や流路状遺構1155上層の掘削、縄文時代晩期遺構面の下層の遺構・遺物の有無確認のための深掘りなどには適宜重機を使用した。調査中の排土はすべて場内に仮置きし、必要に応じて小運搬により移動させた。埋め戻しは前年度までと同様に縄文時代晩期の遺構面を現状保存するため、I区・III区の全面を厚さ30cmの保護砂で覆い、その上を排土で埋めた。保護の必要のないII区は排土のみで埋め戻した。なお、III区は北側農地の水田耕作の作業に合わせて、調査を田植後に開始し稲刈りまでの間に終えた。

縄文時代晩期遺構面については、その重要度から遺構面をレーザー測量によって3次元データとしての記録を行い、平面図もそのデータより図化を行った。また、とくに縄文時代晩期の遺跡



図7 I区 レーザー測量作業風景（西から）

註

- 1) 長岡京跡の調査に対する次数は、長岡京連絡協議会に拠る。
- 2) 試掘調査が、2007年3月京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課によって行われ、地表下25cm以下で河川堆積によると考えられる砂礫層を検出した。京都市文化市民局『京都市内遺跡試掘調査報告』平成19年度、2008年3月。図2参照。

の在り方を考える上で欠かすことのできない自然環境の復元研究のため、放射性炭素14年代測定、土壌分析（種実同定、花粉、プラントオパールなど）など各種自然科学分析を行った。昨年度と同様に流路状遺構1155・3263などを中心に多く炭化物を含む土壌の一部を土壌サンプルとして採取し、水洗選別および同定作業を行っている。

調査の間、それぞれ長岡京期は現場公開、弥生時代前期と縄文時代晩期については現地説明会を行って各時期の成果を一般に公開した。また、市立中学校のチャレンジ体験の一環としての発掘体験を双ヶ岡中学校・西賀茂中学校の2校、ほかに私立ノートルダム小学校の発掘体験を行った。一般向けに開催した「親と子の古代体験」では2007年度調査で検出した竪穴住居の2/3の大きさの住居を実験的に建てるなど、普及啓発活動にも努めた。

2. 遺 跡

(1) 遺跡の位置と環境 (図8)

地理的環境 調査地一帯は西山丘陵の東にひろがる谷底低地に位置する。丹波層群と呼ばれる硬い基盤岩に形成された西山山地の東裾野には、洪積世の堆積物からなる大阪層群の西山丘陵が南北方向に延びている。さらにその東に、低位河岸段丘と氾濫源である谷底低地が続く。この段丘と氾濫原は、小畑川とその支流である善峰川によって運ばれた砂礫が厚く堆積したことにより、沖積世に形成された。段丘は氾濫原との境目に高さ2～10mの高低差をもち、段丘崖を作り出している。

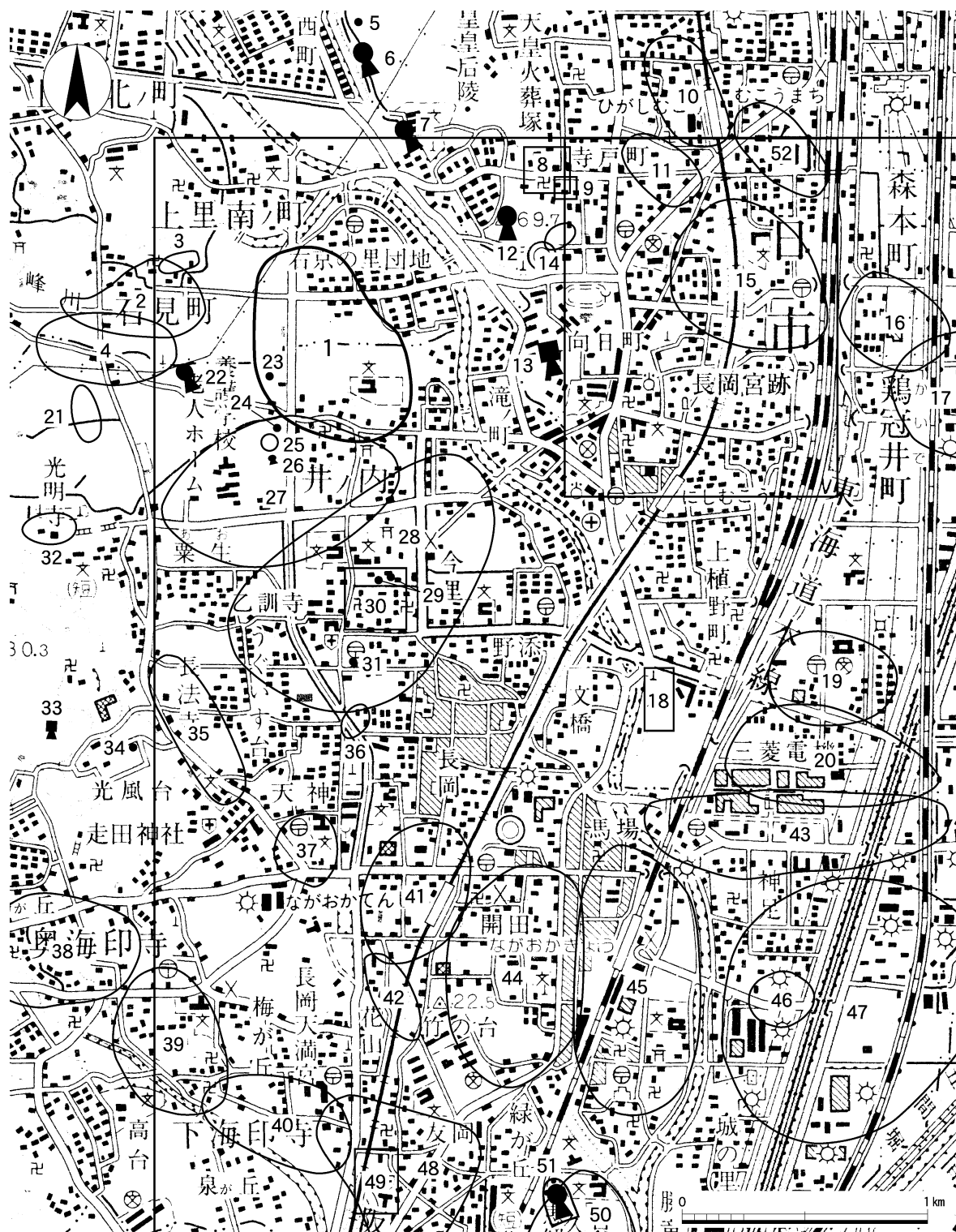
調査地は向日丘陵と西山丘陵のほぼ中間に立地し、周辺には水田がひろがる。北側には昭和40年代に宅地として開発された右京の里団地が隣接している。この団地の北端に小畑川と善峰川の合流点があり、調査地からは北へ約700m離れた地点である。小畑川は団地の東端を迂回し、調査区の東約200m付近を通って南流している。調査地内には高さ約2mの段丘崖が存在する。そのため、段丘面上での標高は33.0～35.0mで、西から東に向かって緩やかに傾斜しているが、段丘崖を挟んだ東側では標高31.2mとなり、標高差は全体で4mにも及ぶ。

歴史的環境 調査地は縄文時代から中世にかけての複合遺跡である上里遺跡(1)の東端に位置する。以下、調査地のある乙訓地域を中心に遺跡と遺物を概観する。

遺跡の西に位置する頭本遺跡(23)では、表面採集によって瀬戸内技法のナイフ形石器が発見されている。また、北西の西山山麓に有舌尖頭器が採集された大原野神社遺跡や、洛西ニュータウン建設時にナイフ形石器や石核などが出土した大枝遺跡、石器が採集された大原野石見町遺跡(2)や今里遺跡(28)などがあり、旧石器時代の生活痕跡を確認することができる。

縄文時代では、草創期の有茎尖頭器が下海印寺遺跡(39)や舞塚遺跡(36)、有舌尖頭器が殿長遺跡(11)などで確認されているが土器は発見されていない。早期は異形局部磨製石鏃が表面採集された上里遺跡の他に、押型文土器が出土した下海印寺遺跡などがある。前期の明確な遺構は南栗ヶ塚遺跡(50)で竪穴住居が検出されている。中期になると上里遺跡や友岡遺跡(48)、今里遺跡、十三遺跡(42)、鶏冠井遺跡(17)などで遺物が出土し、伊賀寺遺跡(40)では中期末の竪穴住居や土壇墓が検出された。伊賀寺遺跡では、後期中葉から後葉の竪穴住居や埋設土器なども検出され、集落の変遷が明らかになりつつある。下海印寺遺跡では後期前葉から中葉の土坑、井ノ内遺跡(27)では後期中葉の竪穴住居が確認されている。晩期になると、さらに遺跡が増加する。晩期前半では石田遺跡(16)で土器棺墓、中野遺跡(14)で竪穴住居、芝本遺跡(46)では土器が出土している。晩期後半では開田城ノ内遺跡(41)や今里遺跡で土器棺墓、雲宮遺跡(47)で晩期後半土器や土偶が出土した自然流路などがある。

弥生時代前期は、鴨田遺跡(20)や雲宮遺跡、竪穴住居を検出した上里遺跡がある。中期になると、竪穴住居や方形周溝墓が多数検出された神足遺跡(45)や鶏冠井遺跡、坂川の両岸に広がっていたとされる今里遺跡や井ノ内遺跡などの大規模集落が営まれた。神足遺跡では、玉造関係の



- | | | | | |
|------------|------------|------------|-----------|-----------|
| 1 上里遺跡 | 2 大原石見町遺跡 | 3 石見城跡 | 4 芝古墳群 | 5 恵比寿山古墳 |
| 6 寺戸大塚古墳 | 7 妙見山古墳 | 8 宝菩提院廃寺 | 9 寺戸城跡 | 10 笹谷遺跡 |
| 11 殿長遺跡 | 12 五塚原古墳 | 13 元稻荷古墳 | 14 中野遺跡 | 15 森本遺跡 |
| 16 石田遺跡 | 17 鶏冠井遺跡 | 18 吉備寺廃寺 | 19 中福知遺跡 | 20 嶋田遺跡 |
| 21 北平尾古墳群 | 22 井ノ内車塚古墳 | 23 頭本遺跡 | 24 井ノ内館跡 | 25 井ノ内古墳群 |
| 26 井内稻荷塚古墳 | 27 井ノ内遺跡 | 28 今里遺跡 | 29 乙訓寺窯 | 30 乙訓寺 |
| 31 今里城跡 | 32 光明寺古墳群 | 33 長法寺南原古墳 | 34 平尾火葬墓 | 35 長法寺遺跡 |
| 36 舞塚遺跡 | 37 東代遺跡 | 38 奥海印寺遺跡 | 39 下海印寺遺跡 | 40 伊賀寺遺跡 |
| 41 開田城ノ内遺跡 | 42 十三遺跡 | 43 馬場遺跡 | 44 開田遺跡 | 45 神足遺跡 |
| 46 芝本遺跡 | 47 雲宮遺跡 | 48 友岡遺跡 | 49 鞆岡廃寺 | 50 南栗ヶ塚遺跡 |
| 51 恵解山古墳 | 52 渋川遺跡 | | | |

図8 周辺の遺跡分布図 (1:25,000)

遺物も出土している。後期には石田遺跡がある。

古墳時代前期になると、前方後方墳の元稲荷古墳（13）や前方後円墳であり三角縁神獣鏡が出土した寺戸大塚古墳（6）・妙見山古墳（7）などが丘陵上に造られるようになった。中期では、平野部に造られた恵解山古墳（51）があり、鉄製武器が多数出土している。丘陵部には恵比寿山古墳（5）があり、方格規矩八獣形文鏡などが出土している。後期になると、段丘や丘陵に群集墳が造られた。井ノ内古墳群（25）や芝古墳群（4）、北平尾古墳群（21）、光明寺古墳群（32）などがあり、上里遺跡の近辺にも井ノ内稲荷塚古墳（26）や井ノ内車塚古墳（22）といった首長級の墓が築造されている。古墳時代の集落は、前期から中期の馬場遺跡（43）や中期から後期の今里遺跡、後期の井ノ内遺跡などがあり、土地利用の変遷を考える上で重要な遺跡が多い。

飛鳥時代に入ると、寺院の造営が始まり、塔心礎や礎石、湯屋遺構などが検出された宝菩提院廃寺（8）、大規模な礎石建物とその両端に付く複廊が検出された乙訓寺（30）などが造営された。乙訓寺旧境内では平窯が発見されており（乙訓寺窯、29）、修理瓦を焼いたとみられている。集落跡は掘立柱建物が多数検出されている今里遺跡などがある。この時期の墓域は平尾火葬墓（34）などの丘陵地帯で確認されている。

延暦三年（784）の長岡京遷都とともに、京域としての整備が進み、条坊制に則って官衙政庁や宅地が整然と配置されていった。平安京遷都後も宅地としての利用が続けられたところもあったが、大半の土地が急速に農地へと変わっていったとみられる。

（2）既往の調査（図9、表1）

調査地周辺では、長岡京期やそれ以前の時期、平安時代以降の調査が行われており、多くの成果が上がっている。検出された遺構や遺物の概要を時期ごとにまとめて述べる。

縄文時代 中期から晩期の遺構が検出されている。調査⑫では土坑2基が検出され、中期末の深鉢が出土している。調査⑩では後期の土器が出土した土坑3基があり、その内の1基は壁面が赤く焼けていることから竪穴住居の炉になる可能性が指摘されている。調査⑨・⑪は今回の調査地西側で行った一連の調査で、晩期前半の集落跡の存在が明らかとなった。竪穴住居8棟、土器棺墓24基、土壙墓4基などが検出され、集落内を区画するような大規模な溝状遺構も2条検出されている。この遺構からは大量の土器や石器だけではなく、食物残渣である炭化した穀類や堅果類、動物骨なども多く出土し、当時の食生活や自然環境の復元の手掛かりとして注目されている。調査⑨では晩期後半の土器棺墓3基や土坑5基などが検出され、新しい時期の遺構は山麓近くに営まれたとみられる。その他に、早期の押型文土器片が調査④で、後期の土器や石匙が調査⑫、晩期後半の突帯文土器や小型石棒が調査①などで出土している。

弥生時代 調査⑨では竪穴住居1棟や土器棺墓2基、溝、炉など、調査⑩では土坑、調査⑪では土器棺墓4基や土坑などが検出され、前期第I様式中から新段階の集落跡がこの周辺に広がる可能性がでてきた。これらの東側の調査④・⑤では前期の自然流路が検出されている。中期の集落跡は明らかではないが、調査⑨で方形周溝墓1基、調査⑫・⑬で方形周溝墓の溝とみられる遺



図9 上里遺跡既往調査位置図 (1 : 5,000)

構が検出されている。特に調査⑯の溝から出土した土器は、中期後半の一括資料とされる。後期の土坑は調査④で検出された。弥生時代の自然流路は調査①・⑳においても、北西から南東または西から東へという地形に沿った方向で検出され、起伏のあった地形が想定できる。

古墳時代 調査①では前期の自然流路や溝が検出されている。中期の遺構は調査④で検出された素掘りの井戸がある。埋土からは土師器高杯3個体と緑色凝灰岩製管玉1点、先端をとがらせた木製の棒1本が出土し、何らかの祭祀が行われたと考えられている。調査⑱～㉔では、5世紀末の竪穴住居、6世紀後半の方形総柱の掘立柱建物、6世紀末から7世紀初めの掘立柱建物、溝、土坑などが確認された。調査㉕で後期後半の竈をもつ竪穴住居が1棟と、後期以降の掘立柱建物1棟、調査㉖で同時期とみられる掘立柱建物が検出された。調査⑯で竪穴住居の可能性のある焼土が検出されている。調査⑰において後期の土壙墓が3基確認された。その内の1基からは銀環1対と須恵器杯蓋2点が伏せられた状態で出土し、別の1基からは刀子が出土した。また、短頸壺が2個体出土した土壙墓とみられる遺構が調査㉗で検出されている。調査㉘では、周溝を持つ方墳2基、須恵器杯身・蓋や甕体部片を枕に転用した6世紀中頃の土壙墓が2基検出され、内1基は鉄鍬や鉄鎌を副葬していた。調査㉙は井ノ内車塚古墳の範囲確認調査で、後円部と前方部裾で溝状遺構を検出し全長が36mであることや、葺石が施されていないことがわかった。この南東にある井ノ内稲荷塚古墳に後続する古墳とされていたが、埴輪が立てられていたことから造営時期が先行する可能性が示唆された。その他に、善峰川の旧流路と推定される自然流路が調査⑩で確認され、調査②・③で確認されている旧流路につながるのではないかと推定されている。

奈良時代 この時期の掘立柱建物が調査②・⑤で検出された。調査②のAトレンチでは、5間×2間の東西棟に南庇が付くものと、1間以上×2間の東西棟になるとみられる柱列がある。柱穴底には、礎石があるものと、柱根が残るものがあつた。前者の南には柵列が平行する。これらの建物から北へ40mほどの所に井籠組の井戸が検出された。この井戸を取り囲むように方形の石敷き溝と排水用の石敷きを敷設していた。井戸は北東半分にかかっていた自然流路を埋め立てて造られており、この流路の埋土と井戸の周辺からは多量の奈良時代の遺物が出土した。遺物には土師器や須恵器の他に、「園宅」・「園司」・「園」と書かれた墨書土器や「御司」・「御曹司」と書かれた木簡、顔の描かれた人形、斎串などがある。土器などに書かれた文字史料から、10世紀の「乙訓園」や「長岡園」につながる宮内省園池司に関係した施設が周辺にあったとされ、この井戸がその施設の一部であったと推定されている。この井戸は長岡京造営に伴って廃棄・整地された。調査⑤では掘立柱建物2棟や東西方向の溝が検出されている。調査⑩では杭で護岸した溝や石敷遺構が確認されている。古墳時代の旧流路の名残であった湿地状凹みを利用して、水田や畠が造られた可能性が指摘されている。調査㉚では後半の溝が検出され、フイゴの羽口や鉄滓などが出土した。調査④では柱穴から、墨書された土師器や癒着した万年通寶、神功開寶、その他不明なもの計3枚の銭貨が出土した。その他、北東から南西方向または、北西から南東方向の溝群が調査⑨で検出され、7世紀前半以降の畠の畝などが想定されている。調査⑬では溝からレンズ状堆積した焼土や炭と共に、フイゴ羽口や鉄滓などが出土し、近辺に鍛冶関係の遺構の存在が指摘

表1 既往調査一覧表

調査番号	新条坊・調査次数	所在地	調査機関・調査期間	平安時代～室町時代の調査概要	長岡京期の調査概要	縄文時代～奈良時代の調査概要
①	右京一条四坊十三・十四町 R746	京都市西京区大原野石見町地内他	(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002.8.8～2003.2.28	平安後期～鎌倉前期：掘立柱建物5棟(4間以上×4間、2間以上×6間総柱、4間×1間以上、3間以上×6間、2間以上×3間以上)、柵列、土壇墓1基、敷石遺構3基(茶毘場?)(以上2区) 中世：溝、溜め池(以上1区)	一条条間南小路南側溝(幅1.8m、深0.5m)・北側溝(幅3.2m、深0.2～0.4m)、溝、土坑、柵列(2区)	縄文後期～弥生前期：自然流路・柱穴(1区) 弥生～古墳：流路(2区) 古墳前期：自然流路、溝(1区)
②	右京二条二坊十三町 R285・R310・R335	長岡京市今里更ノ町・井ノ内下印田	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 1987.11.12～1990.2.27	平安：自然流路(E2・Fトレンチ)、井戸(Fトレンチ)、土坑(Fトレンチ、獣骨出土) 中世：溝(A・E2・Fトレンチ)、土坑(E2トレンチ)	西二条大路東側溝(A・Fトレンチ、幅0.7～1m、深0.1～0.3m)、二条条間大路南側溝(幅0.7m以上、深0.2m、新条坊の二条大路北側溝か?、A・Cトレンチ、護岸施設)、路盤改良遺構(E1トレンチ)	弥生：方形周溝墓の溝3条(Aトレンチ) 奈良：掘立柱建物2棟(5間×2間南底、1間以上×2間、Aトレンチ)、柵列、井戸(A・Cトレンチ、土馬出土)
③	右京二条二坊十四町 R511	長岡京市井ノ内	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 1995.10.20～1996.2.28	平安以降：自然流路 中世：南北溝	長岡京期～平安前期：南北溝(西二条大路東側溝、幅1.2m以上、深0.5m、土馬出土)、土坑、東西方向の杭列2条、自然流路(善峰川の旧河道か、上面から神功開竇2枚、寛平大寶13枚出土)	古墳後期以降：自然流路(調査R22・25に繋がる可能性がある、善峰川の旧河道か)
④	右京二条二坊十四・十五町 R547	長岡京市井ノ内・西の京	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 1996.10.7～1997.2.13	中世：地境溝(北地区)	遺構なし、遺物出土	縄文早期：押型土器出土 弥生前期：自然流路 弥生後期：土坑 古墳中期：井戸(凝灰岩製管玉出土) 奈良：柱穴(墨書土器、萬年通寶、神功開竇出土)(以上北地区) 弥生時代前期：自然流路(南地区)
⑤	右京二条二坊十五・十六町 R584	長岡京市井ノ内 的田	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 1997.12.1～1998.1.27	遺構なし	遺構なし	弥生以降：自然流路
⑥	右京二条二坊十五・十六町 R122	長岡京市西の京	(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1983.1.24～2.3	中世以降：自然流路	遺構なし	遺構なし
⑦	右京二条二坊十五・十六町 R953	長岡京市西の京	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 2008.9.24～12.3	遺構なし	遺構なし	遺構なし、縄文晩期：土器 奈良：瓦出土
⑧	右京二条三坊一町	京都市西京区大原野上里鳥見町	京都市文化財保護課 2007.3.22	GL-0.25m以下は河川の氾濫堆積のため、遺構残存せず	遺構なし	遺構なし
⑨	右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡 R903	京都市西京区大原野上里南ノ町地内	(財)京都市埋蔵文化財研究所 2007.4.16～2008.1.10	中世：耕作溝	一条大路南側溝(新：幅1.6～1.8m、深0.18m、旧：幅1.2～1.7m、深0.15～0.4m)・築地・内溝、西三坊坊間東小路東側溝(幅2.3～2.6m、深0.2～0.3m)・西側溝(新：幅3.2～4.2m、深0.2～0.3m、旧：幅1.2～1.6m、深0.2m)、掘立柱建物2棟(3間×3間総柱、2間×2間)、暗渠、造営期整地層、溝(土馬出土)、土坑(墨書土器・土馬出土)	縄文晩期：竪穴住居1、土器棺墓18、溝状遺構2、炉など、溝状遺構から穀類・堅果類など、滑石製勾玉・翡翠製丸玉出土 弥生前期：竪穴住居1、土器棺墓2、溝、炉など 奈良以前：溝
⑩	右京二条三坊二・七町 R22・R25	長岡京市井ノ内 玉ノ上・北裏	(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1979.2.7～8.31	平安：柱穴、溝 中世：溝	掘立柱建物6棟(3間×3間総柱、3間×3間、10間以上×1間、4間以上×4間南・北底など)、足場跡、塀跡3列、溝、土坑	縄文後期：土坑(炉?) 弥生前期：土坑 古墳：旧流路(調査R285・511につながる善峰川旧流路?)、土坑 奈良：杭護岸溝、石敷遺構

調査番号	新条坊・調査回数	所在地	調査機関・調査期間	平安時代～室町時代の調査概要	長岡京期の調査概要	縄文時代～奈良時代の調査概要
⑪	右京二条三坊八・九町 R878	京都市西京区大原野上里南ノ町地内・長岡京市井ノ内北裏	(財)京都市埋蔵文化財研究所 2006.6.12～2007.3.16	中世：溝	掘立柱建物5棟(5間×2間2棟、3間以上×2間南・東庇、5間×2間東・西・南庇、5間×2間北庇)、柵列、一条大路南側溝(幅1.2～1.8m、深0.2～0.3m)・築地、西三坊坊間小路東側溝(幅0.5～0.9m、深0.07～0.12m)・西側溝(幅0.8～1.5m、深0.14m)	縄文晩期：竪穴住居7棟、土器棺墓6基、土壇墓4基、土坑など 弥生前期：土器棺墓4基、土坑など 古墳：溝
⑫	右京二条三坊十三～十五町 R21	長岡京市井ノ内南内畑・小西・広海道・西ノ口	京都府教育委員会 1978.11.20～12.27	平安末～鎌倉：南北溝(No.6グリッド、居館外郭溝か)	土坑(土馬出土、No.6グリッド)	遺構なし 縄文後期：土器・石器出土(No.8グリッド) 奈良：遺物出土(No.6グリッド)
⑬	右京二条三坊十三～十六町 R27	長岡京市井ノ内他	京都府教育委員会 1979.6.18～1980.3.31	平安：南北溝(Cトレンチ) 中世：南北溝(Eトレンチ、居館外郭溝か)	遺構なし、遺物出土	古墳：竪穴住居1棟(Eトレンチ)、土坑 奈良：溝(Fトレンチ、焼土、炭、フイゴ羽口、鉄滓、土錐、製塩土器など)
⑭	右京二条三坊十四町 R29	長岡京市井ノ内広海道	長岡京跡発掘調査研究所 1980.2.15～3.15	平安前期：井戸 鎌倉：溝、土坑	遺構なし、遺物出土	古墳後期：土坑
⑮	右京二条三坊十四町 R167	長岡京市井ノ内広海道	(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1984.6.27～7.20	中世：溝	遺構なし、遺物出土	古墳後期：土坑 奈良：掘立柱建物2棟(3間以上×2間南庇、1間以上×2間以上)、東西溝
⑯	右京二条三坊十四町 R48	長岡京市井ノ内西ノ口	長岡京跡発掘調査研究所 1980.9.12～10.14	鎌倉：溝、土坑	遺構なし	弥生中期：溝(方形周溝墓か、一括資料)、土坑 古墳：焼土(竪穴住居の可能性あり)、土坑、柱穴状遺構
⑰	右京二条三坊十五町 R107	長岡京市井ノ内西ノ口	(財)京都市埋蔵文化財調査研究センター 1982.7.20～10.2	中世：溝、土坑	遺構なし、遺物出土	古墳後期：土壇墓3基(内1基から銀環、別の1基から刀子出土)、溝
⑱	右京二条三坊九・十六町 R850	京都市西京区大原野上里南ノ町地内・長岡京市井ノ内北裏	(財)京都市埋蔵文化財研究所 2005.6.17～2006.6.9	中世：溝	掘立柱建物10棟(A区：3間×2間東庇・3間×2間南庇、B・C区：5間×2間、4間×2間南庇、2間×3間、5間×2間南庇、2間×2間南庇、2間×2間西庇、3間×2間南庇、4間×1間)、井戸(A区、墨書土器「□麻呂」出土)、柵、土坑、溝、河川(鈍具出土)、一条大路南側溝(幅0.46m、深0.26m)・築地	古墳：竪穴住居9棟(A区8、B・C区1)、掘立柱建物7棟(A区、2間×2間総柱3棟、3間×3間、2間×3間、4間×3間2棟、管玉・勾玉)、溝、土坑、河川(韓式系土器) 奈良：土坑
⑲	右京二条四坊一・八・九町 R772	京都市西京区大原野石見町地内	(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003.1.6～8.6	平安：掘立柱建物4棟(A1・2区：3間×1間以上、B1・2区：1間以上×1間以上、2間×2間、3間×1間以上)、柵列 中世：東西溝(糸里坪境)、柵列、耕作溝	一条大路南側溝(A1～16区、幅1.7m、深さ0.35m、鉄製車軸受け金具)、西三坊大路西側溝(B1・2区、幅1.7～1.8m、深0.1～0.3m)、建物4棟(A1～3区：3間×2間北庇、B4・6・9区：2間×2間以上東庇、5間×1間以上北庇、2間×3間以上)、井戸(B6区)、柵列(B7区)、木棺墓(A5・6区)	縄文：土器棺墓3基(A1～3区)、土壇墓3基(A1～3区) 弥生：方形周溝墓1基(A1～2区)、溝、流路 古墳：竪穴住居15棟(A1～4、B1・2区)、建物3棟(A3区：2間×2間総柱、A4区：2間×2間、B4区：2間×2間総柱)、溝、土坑
⑳	右京二条四坊一町 R775	京都市西京区大原野石見町地内	(財)京都市埋蔵文化財研究所 2003.5.22～8.12	中世：耕作溝	西三坊大路西側溝(幅1.6～1.8m、深0.15～0.3m)・路面、門(掘立柱構造の棟門から四脚門への建て替え)、建物(2間×3間以上)、方形区画溝群	縄文・弥生：石器出土 古墳後期：掘立柱建物6棟(3間×4間、3間×2間2棟、2間以上×3間、2間×2間2棟)、柵、溝

調査番号	新条坊・調査次数	所在地	調査機関・調査期間	平安時代～室町時代の調査概要	長岡京期の調査概要	縄文時代～奈良時代の調査概要
⑲	右京二条四坊一～四町 R830	長岡京市井ノ内頭本・広海道	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994.7.26～1995.3.9	平安初期：井戸(Aトレンチ・文字瓦「国万呂」、Bトレンチ)、溝(Dトレンチ) 平安前期：井戸(Bトレンチ、黒色土器風字硯、埴、製塩土器)、溝(Eトレンチ) 平安後期以降：井戸(Dトレンチ) 鎌倉～室町：土坑(Eトレンチ、一部敷石・粘土貼り) 時期不明：土坑(Eトレンチ、鉄製品)	道路状遺構(Eトレンチ、轍痕あり) 長岡～平安前期：土坑(Dトレンチ)、鍛冶滓	縄文中期：土坑2基、古墳：竪穴住居2基(以上Aトレンチ) 奈良後半：溝(Dトレンチ、フイゴ羽口・鉄滓) 古墳後期：土壙墓?(Eトレンチ、短頸壺2個) 古墳後期?：掘立柱建物1棟(Dトレンチ、4間×1間以上)
⑳	右京二条四坊三町 R753	長岡京市井ノ内頭本・広海道	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992.12.11～1993.2.21	平安：土坑 中世：東西溝(居館外郭溝か)、土坑 時期不明：総柱建物(2間×2間以上)1棟	遺構なし、遺物出土	古墳後期：竪穴住居1棟、土坑、柱穴 古墳後期以降：掘立柱建物1棟(2間×3間)
㉑	右京二条四坊二・三町 R213	長岡京市井ノ内頭本	長岡京市教育委員会 1985.11.25～12.24	遺構なし、中世遺物出土	時期不明：東西溝(Aトレンチ、須恵器・土師器小片)	遺構なし
㉒	右京二条三坊十四町 R167	長岡京市井ノ内広海道	(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1998.5.25～9.14	平安：溝	遺構なし	古墳後期：方墳2基(東：井ノ内3号墳、一辺17m、円筒・形象埴輪、須恵器出土 西：井ノ内4号墳、一辺12m、須恵器、滑石製紡錘車)、土壙墓2基 奈良～平安：土器棺墓
㉓	右京二条四坊十五町 R647	長岡京市井ノ内向井芝	(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1999.7.19～8.17	遺構なし	遺構なし	古墳後期：井ノ内車塚古墳(全長36m、後円部と前方部裾部で溝状遺構を検出、葺石は未検出、埴輪出土)

されている。

長岡京期 調査⑨・⑩・⑱・㉑で一条大路南側溝を総延長約720mにわたって検出した。調査①北調査区では一条条間南小路両側溝、調査②では二条大路北側溝と推定される溝、調査②・③では西二坊大路東側溝、調査⑨では西三坊坊間東小路、調査⑱・㉑では西三坊大路西側溝、その他条坊に則った時期不明の溝が検出されており、右京四坊まで条坊が施工されていたことが判明している。調査⑨～⑩・⑱～㉑で、掘立柱建物や井戸などが検出されていることから、二条三・四坊における町の土地利用が明らかになりつつある。調査⑨・⑩では、三坊の八町の東から中央部と九町中央部に整然と建物が並ぶが、一・八・九町北西部に空闲地が存在することがわかった。調査⑩では二町中央に大型建物が配置されていたことから、高位・高官の邸宅または離宮の存在が想定されている。対する七町の建物は小型ではあるが、「大舎人寮」銘の墨書須恵器から大舎人寮と関係のある施設とみられている。調査⑱の十六町は小振りな建物から、小規模な宅地、九町は官衙的な施設が造られた後、雑舎群が造られたという2時期が考えられている。調査㉑では西三坊大路に開く門が発見された。平安時代初期に至る建て替えの痕跡から、平安京遷都後も宅地としての利用が続けられていたことが明らかとなった。その他に、調査②では丸太材を使用して地盤改良を行った大路路面改修痕跡が検出されている。

平安時代以降 平安時代の遺構は、調査⑱で掘立柱建物4棟と柵列、調査②・⑭・㉑で井戸、

その他溝や柱穴・土坑が検出されている。調査②で確認された自然流路は、長岡京期の西二坊大路東側溝を横断して、北から南へ流れる自然流路に合流していた。調査⑭の井戸からは平安時代前期の良好な一括資料を得ている。鎌倉時代の遺構は、調査⑭・⑯で溝や土坑、中世の遺構は境界溝や耕作溝を検出している。調査⑰（R 21- 6）・⑱（R 27- E）・㉑では、断面U字状で多量に土師器・瓦器を含む溝が検出された。調査⑳で南から西へ折れ曲がる北東の隅が検出され、東西 19 m以上、南北 23 m以上になることが判明した。12 世紀後半の中世居館跡の外郭施設と考えられ、溝は 13 世紀中頃には埋没したとされる。富坂荘・長岡荘の荘園に関係する遺構と考えられている。調査①では平安後期から鎌倉時代前期の 2 時期ある掘立柱建物や柵列、建物に重なる土壇墓の位置から屋敷墓が想定されている。調査結果から、13 世紀後半には現在につながる水田景観が成立、検出した集落跡はそれ以前の景観とみられ集落廃絶後に水田になったと考えられている。

参考文献

- 調査① 網 伸也ほか『長岡京右京一条四坊十三・十四町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-2（財）京都市埋蔵文化財研究所 2003 年
- 調査② 石尾政信ほか「長岡京跡右京第 285・310・335 次発掘調査概要（7 ANIFC・CS 地区）」『京都府遺跡調査概報』第 45 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991 年
- 調査③ 石尾政信「長岡京跡右京第 511 次発掘調査概要（7 ANGKN 地区）」『京都府遺跡調査概報』第 69 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996 年
- 調査④ 伊野近富ほか「長岡京跡右京第 547 次発掘調査概要（7 ANGTE- 3・GKN- 2）」『京都府遺跡調査概報』第 77 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997 年
- 調査⑤ 八木厚之「長岡京跡右京第 584 次発掘調査概要（7 ANGHD- 1 地区）」『京都府遺跡調査概報』第 80 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998 年
- 調査⑥ 山本輝雄「右京第 122 次（7 ANGNU 地区）調査概報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和 57 年度』（財）長岡京市埋蔵文化財センター 1983 年
- 調査⑦ 柴 暁彦「長岡京跡右京第 953 次（7 ANGNU- 3 地区）発掘調査報告」『京都府遺跡調査報告集』第 133 冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2009 年
- 調査⑧ 堀 大輔ほか『京都市内遺跡試掘調査報告 平成 19 年度』京都市文化市民局 2008 年
- 調査⑨ 高橋 潔ほか『長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2007-12（財）京都市埋蔵文化財研究所 2008 年
- 調査⑩ 山本輝雄『長岡京跡右京第 22・25 次調査報告書』『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第 11 集（財）長岡京市埋蔵文化財センター 1997 年
- 調査⑪ 上村和直ほか『長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-34（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007 年
- 調査⑫ 奥村清一郎ほか「長岡京跡昭和 53 年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1979）』京都府教育委員会 1979 年
- 調査⑬ 奥村清一郎ほか「長岡京跡右京第 27 次発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』第 2 分冊 京

都府教育委員会 1980年

- 調査⑭ 岩崎 誠「長岡京跡右京第29次(7 ANGHD- 2地区)調査概要—右京二条三坊十六町・井ノ内遺跡—」『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1987年
- 調査⑮ 小田桐 淳「右京第167次(7 ANGHD- 3地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和59年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 1985年
- 調査⑯ 岩崎 誠ほか「長岡京跡右京第48次(7 ANGNC- 2地区)調査概要—右京二条三坊十六町・上里遺跡(西ノ口地点)—」『長岡京市文化財調査報告書』第19冊 長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1987年
- 調査⑰ 山下 正「長岡京跡右京第107次発掘調査概要(7 ANGNC地区)」『京都府遺跡調査概報』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983年
- 調査⑱ 上村和直ほか『長岡京右京二条三坊九・十六町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年
- 調査⑲ 永田宗秀ほか『長岡京右京二条四坊一・八・九町跡、上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-3 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 調査⑳ 網 伸也ほか『長岡京右京二条四坊一町跡・上里遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-4 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 調査㉑ 増田孝彦「長岡京跡右京第830次・上里遺跡・井ノ内遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第95号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2005年
増田孝彦ほか「長岡京跡右京第830次(7 ANGKT- 2・GHD- 9地区)・上里遺跡・井ノ内遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第117冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2006年
- 調査㉒ 増田孝彦「長岡京跡右京第753次(7 ANGHD- 5地区)・井ノ内遺跡・上里遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2003年
- 調査㉓ 中尾秀正「長岡京跡右京第213次(7 ANGKT地区)調査概要—右京南一条四坊四町・一条四坊一町・南一条大路—」『長岡京市文化財調査報告書』第17冊 長岡京市教育委員会 1986年
- 調査㉔ 小田桐 淳「右京第605次(7 ANGMM- 1地区)調査略報」『長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成10年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター 2000年
- 調査㉕ 福永伸哉ほか「井ノ内車塚古墳第3次調査概要—長岡京跡右京第647次調査—」『長岡京市文化財調査報告書』第41集 長岡京市教育委員会 2000年

3. 遺 構

(1) 層序と遺構の概要 (図 10～14、表 2)

基本層序 本年度調査地は緩やかに北西から南東へと下降する段丘の東端に位置している。調査地周辺は田畑が広がる田園地帯であり、いずれの調査区も着手以前は田畑として利用されていた。Ⅰ区では西から東へ下降する傾斜面を削り込んで東へ積むことにより田畑としての平坦面を確保する、いわゆる「切り盛り」によって3段の東向きの雛壇状に整形された状態であった。地表面の標高はⅢ区の西端で35.0 m、東端で34.0 m、Ⅰ区の西端で34.0 m前後、東端で33.0 m前後である。Ⅰ区とⅡ区の間には南北方向の段丘崖が存在しており、約2 mの段差で東側のⅡ区が低くなっており、地表面の標高は31.0 m前後であった。

Ⅰ区・Ⅲ区の基本的な層序は上部より、現代耕作土(厚さ0.2～0.4 m)、長岡京期遺構ベース層(厚さ0.25 m)、弥生時代前期遺物包含層(厚さ0.15～0.2 m)、自然堆積層(厚さ0.2 m)、縄文時代晩期遺物包含層(厚さ0.15 m)、縄文時代晩期以前の自然堆積層となる。ただし、西から東への傾斜地であるⅠ区では、東ほど上部層位は削られて失われていた。

なお、弥生時代前期および縄文時代晩期の遺構成立面は、本来それぞれの遺物包含層(土壌層)の上面と考えられるが、調査面は昨年度までの調査の成果でも明らかなように遺構の検出が困難であるため、遺物包含層を除去した下面での調査を主体として行った。その際、必ず遺物包含層の上面でも遺構検出を行い、記録を作成した後に、遺物包含層の除去を行って下面の調査に入った。また、Ⅰ区・Ⅲ区では長岡京期の遺構面において長岡京期以降、および弥生時代前期以降から長岡京期以前(奈良時代以前)の遺構も検出している。

Ⅱ区では現代耕作土(厚さ0.2 m)、現代以前の耕作土(厚さ0.2～0.4 m)、以下は小畑川あるいは善峰川による氾濫堆積(砂礫中心)となっている。段丘崖を形成した氾濫堆積の時期は不明であるが、長岡京期以降と考えられ、それ以前の遺構は削り取られて遺存していない。

遺構の概要 調査の対象は、主として長岡京期・弥生時代前期・縄文時代晩期の3時期で、

表 2 遺構一覧表

時 代	遺 構
長岡京期以降	掘立柱建物、耕作に伴う整地、溝、氾濫堆積
長岡京期	一条大路および南側溝・築地関連遺構、西三坊坊間東小路および東西両側溝、一町城北辺内溝、整地
奈良時代以前	溝
弥生時代前期	竪穴住居、掘立柱建物、土器棺墓、土坑、溝、柱穴列、柱穴、焼土痕、遺物包含層
縄文時代晩期	竪穴住居、土器棺墓、土坑、配石遺構、集石遺構、流路状遺構、遺物包含層

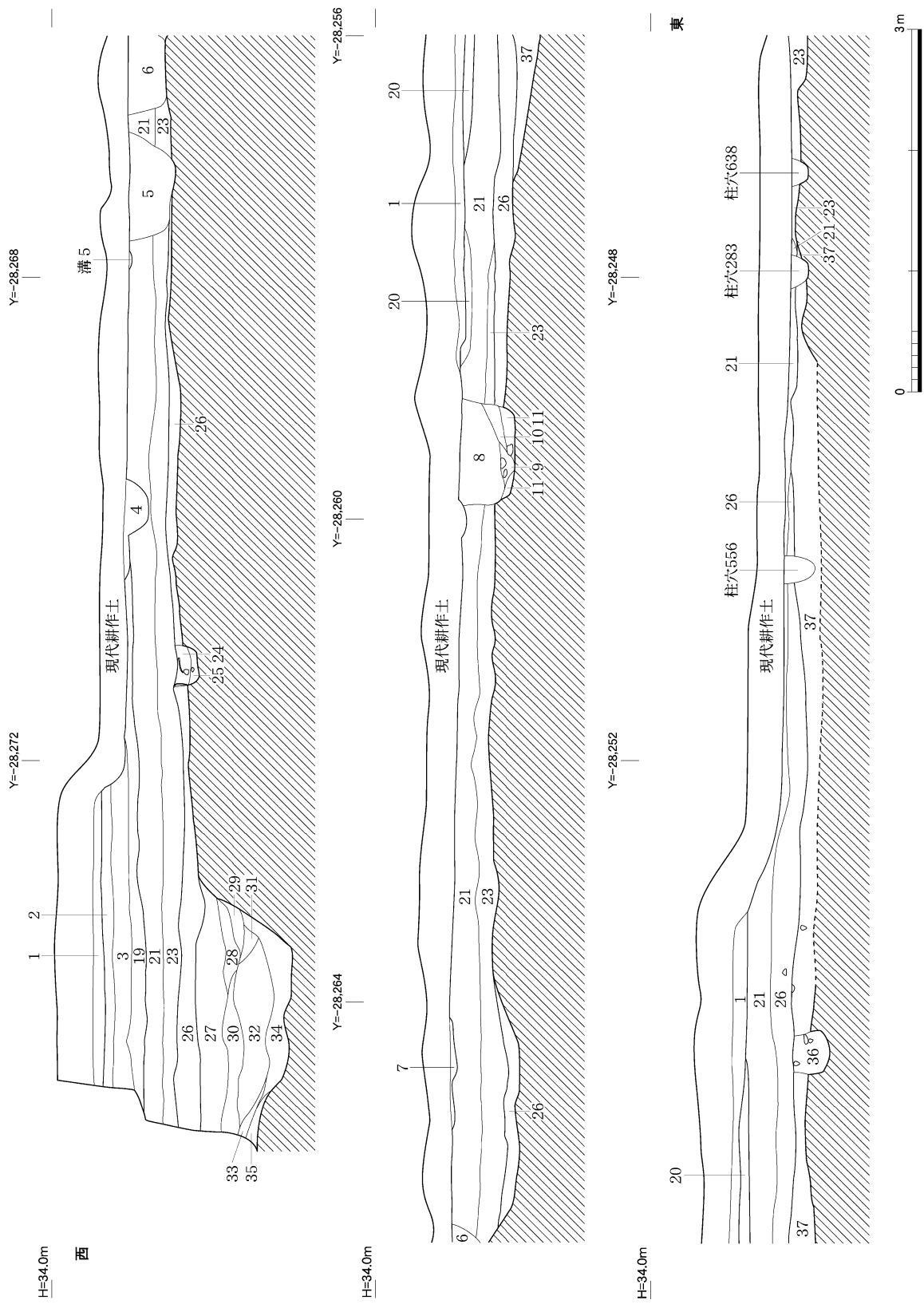


図10 I区 X = -116,944 ライン断面図1 (1 : 50)

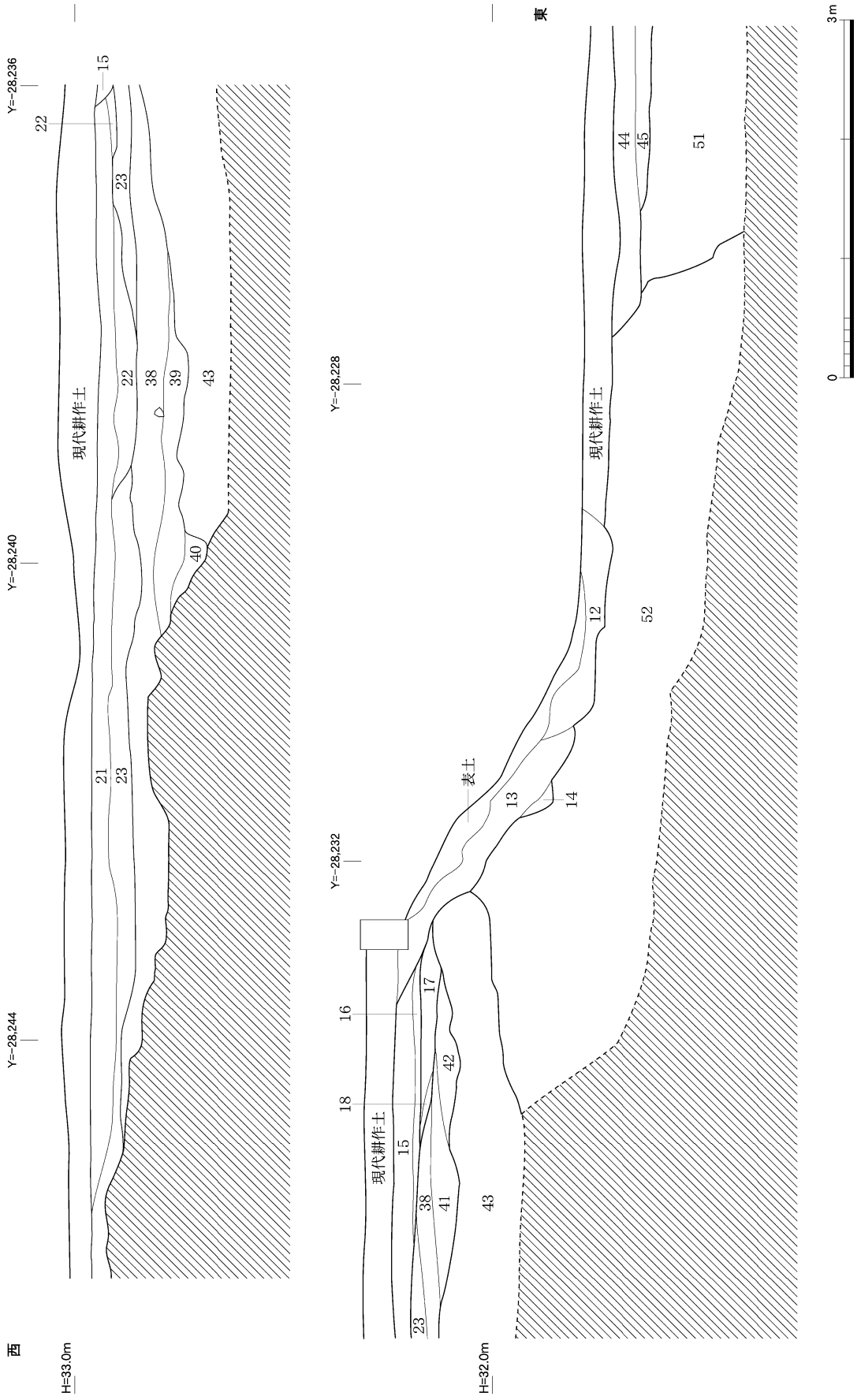


図 11 I・II区 X = -116,944 ライン断面図 2 (1 : 50)

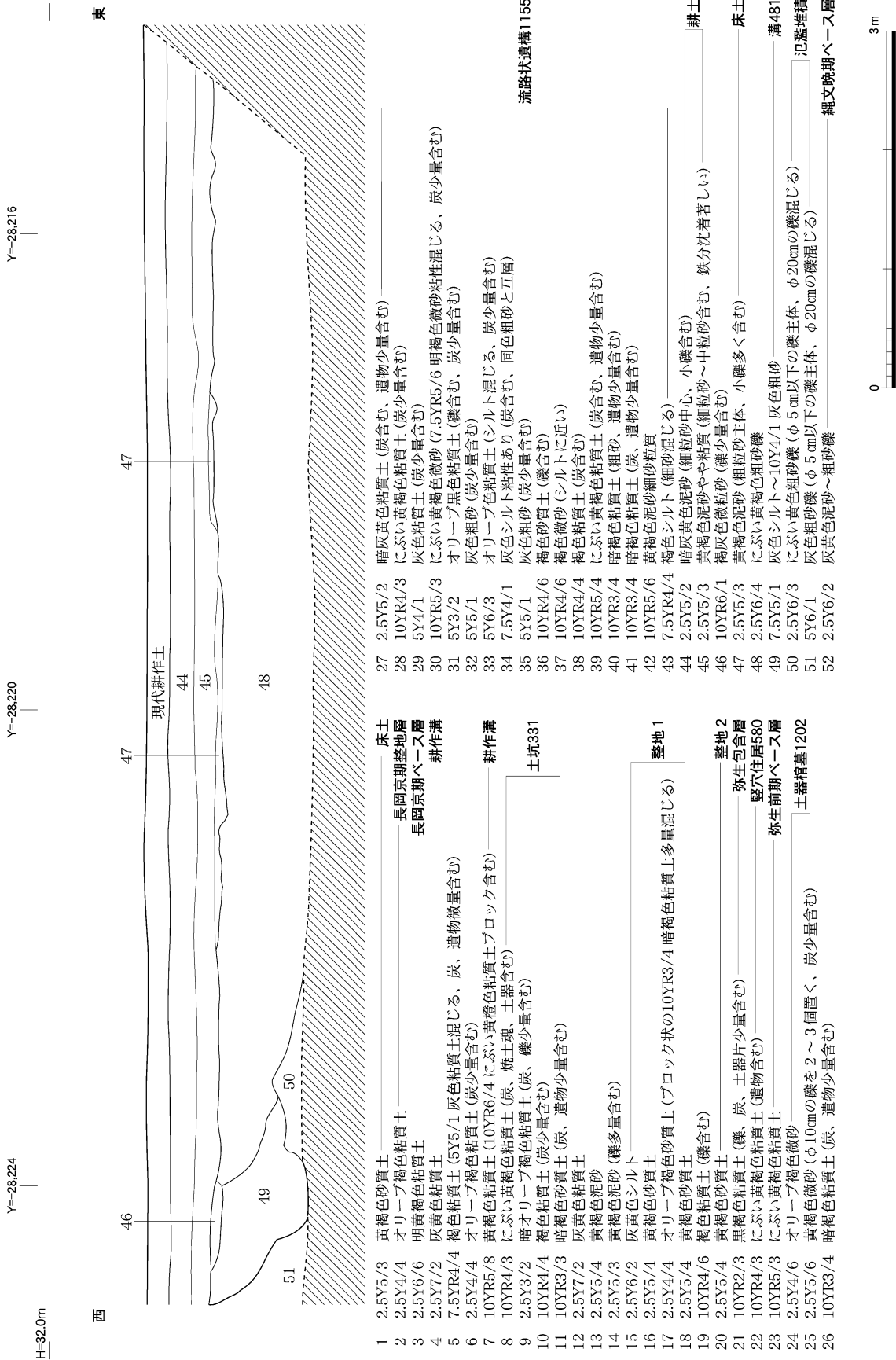


図 12 II区 X = -116,944 ライン断面図 3 (1 : 50)

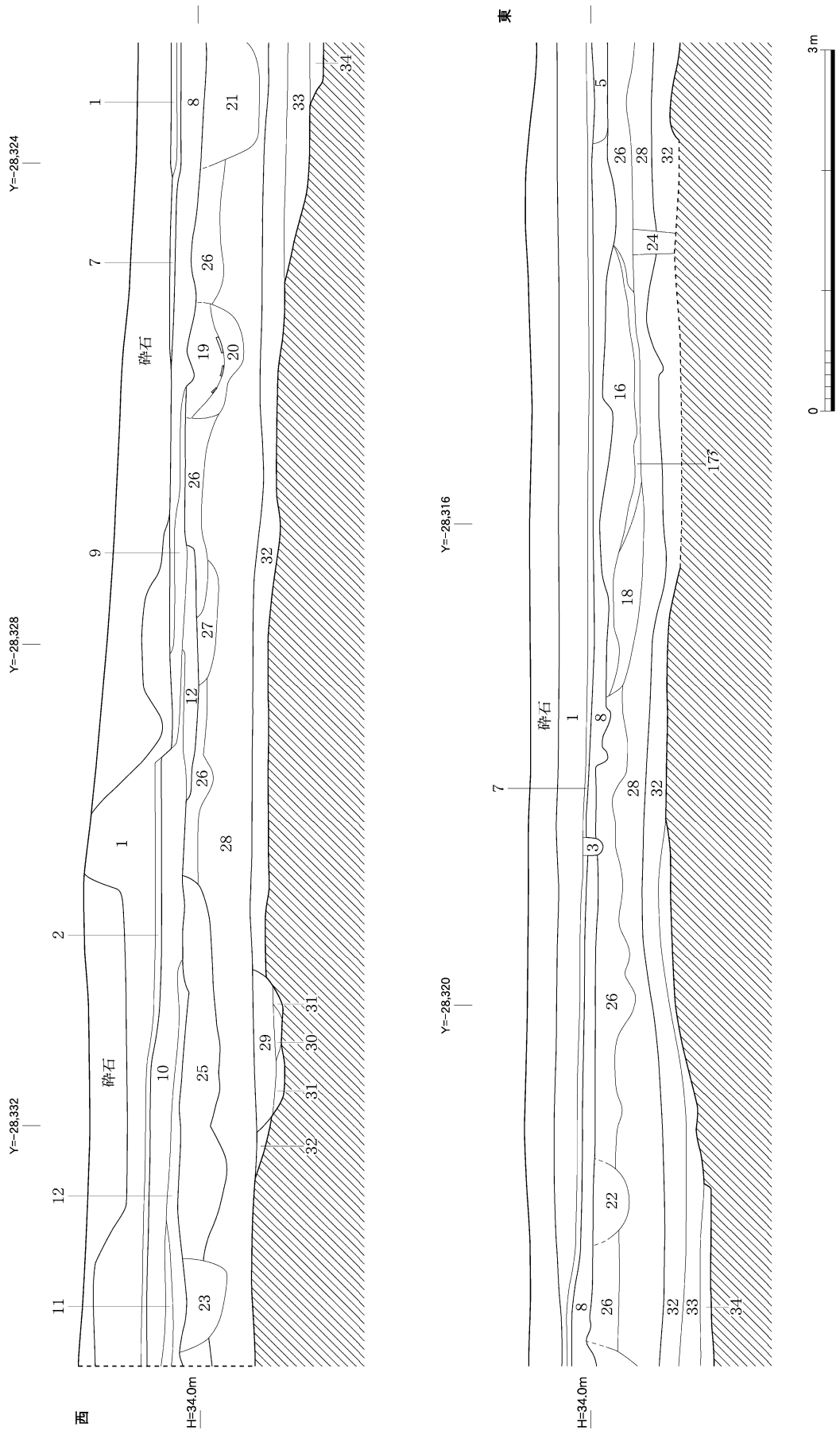
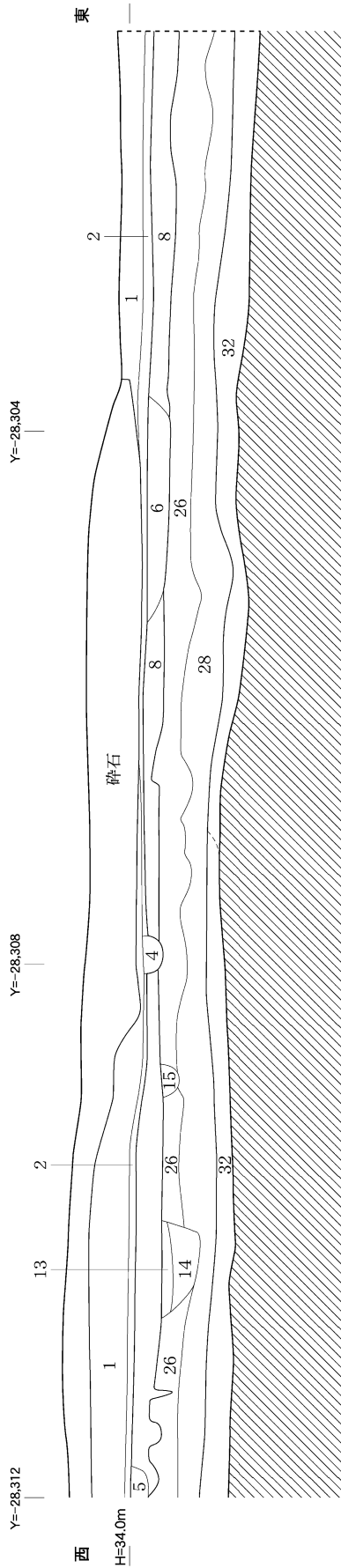


图 13 Ⅲ区 調査区北壁断面图 1 (1 : 50)



- | | | | | |
|----|----------|--------------------------------|------------------------------|-----------|
| 1 | 2.5Y4/3 | オリープ褐色シルト | 暗灰黄色シルト (炭少量混じる、炭微量含む、土師片含む) | 土坑3067 |
| 2 | 10YR4/4 | 褐色シルト | オリープ褐色シルト (礫、炭少量含む) | 土坑3140 |
| 3 | 10YR5/6 | 黄褐色シルト | にぶい黄褐色シルト (礫、炭微量含む、土師片少量含む) | 土坑3279 |
| 4 | 10YR4/3 | 褐色砂泥 | にぶい黄褐色シルト (礫、炭、シルト混じる) | |
| 5 | 2.5Y6/2 | 灰黄色砂泥 | にぶい黄褐色シルト (礫、炭、少量含む) | |
| 6 | 10YR5/3 | 黄褐色砂泥 | 褐色シルト (炭微量含む) | |
| 7 | 10YR4/4 | 褐色砂泥 | 褐色シルト (炭微量含む) | |
| 8 | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色砂泥 | 暗褐色砂泥 (下層シルト混じる) | 弥生前期ベース層 |
| 9 | 7.5YR3/4 | 暗褐色粘質土 (炭微量含む) | 暗褐色砂泥 (炭、土師片少量含む) | |
| 10 | 10YR4/6 | 褐色粘質土 (微砂、礫含む) | 褐色砂泥 (炭少量含む) | |
| 11 | 10YR3/4 | 暗褐色砂泥 (φ2cm以下) | 褐色シルト (炭微量含む) | |
| 12 | 10YR4/4 | 褐色シルト (炭微量含む) | にぶい黄褐色砂泥 (φ2cm以下) | 溝3264 |
| 13 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色シルトやや粘質 (炭微量含む) | オリープ褐色シルト (炭微量含む) | |
| 14 | 10YR4/4 | 褐色シルトやや粘質 (炭微量含む) | にぶい黄褐色砂泥 (炭少量含む) | |
| 15 | 10YR3/4 | 暗褐色砂泥 | 褐色シルト (炭少量含む) | |
| 16 | 10YR4/6 | 褐色シルト (粗砂多く混じる、炭微量含む) | 褐色シルト (炭少量、炭微量含む) | |
| 17 | 2.5Y4/3 | オリープ褐色シルト (φ3cm以上の石、炭、土師片微量含む) | 暗灰黄色シルト (炭少量混じる、炭微量含む) | 流路状遺構3263 |
| 18 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色シルト (礫、炭微量含む) | | |

- | | | | |
|----|----------|------------------------------|--------|
| 19 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色シルト (炭少量混じる、炭微量含む、土師片含む) | 土坑3071 |
| 20 | 2.5Y4/3 | オリープ褐色シルト (礫、炭少量含む) | |
| 21 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色シルト (礫、炭微量含む、土師片少量含む) | |
| 22 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色シルト (礫、炭、シルト混じる) | |
| 23 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色シルト (礫、炭、少量含む) | |
| 24 | 10YR4/4 | 褐色シルト (炭微量含む) | |
| 25 | 7.5YR3/3 | 暗褐色砂泥 (下層シルト混じる) | |
| 26 | 10YR3/3 | 暗褐色砂泥 (炭、土師片少量含む) | |
| 27 | 10YR3/4 | 褐色粘質土 (微砂、礫含む) | |
| 28 | 10YR3/4 | 暗褐色砂泥 (炭少量含む) | |
| 29 | 10YR4/4 | 褐色シルト (炭微量含む) | |
| 30 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂泥 (φ2cm以下) | |
| 31 | 2.5Y4/3 | オリープ褐色シルト (炭微量含む) | |
| 32 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂泥 (炭少量含む) | |
| 33 | 10YR4/4 | 褐色シルト (炭少量、炭微量含む) | |
| 34 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色シルト (炭少量混じる、炭微量含む) | |

図 14 Ⅲ区 調査区北壁断面図 2 (1:50)

生時代前期と縄文時代晩期は先述のようにそれぞれ遺物包含層の上面と下面の2面の調査を行ったため、遺構面としては5面であった。

(2) 長岡京期以降の遺構 (図版1・5)

長岡京期以降の遺構はI区・II区で検出した。I区では掘立柱建物1棟とこれに後出する整地層(整地1・2)、II区では溝状遺構(溝481)と河川氾濫堆積を検出した。

掘立柱建物1(図15) I区中央南寄りで検出した。東西5間・南北3間の掘立柱建物である。後世の耕作に伴う整形により削り込まれた東半部では柱穴の遺存状況が悪く、正確な規模については不明である。柱間は一定ではなく、東西は1.8~2.5m、南北はおおよそ2.4m、確認できた建物の規模は東西10.7m、南北7.1mである。柱穴は直径が0.3~0.4mの円形、深さは0.2m前後である。建物の主軸方向は北で東に4度振れている。各柱穴からの出土遺物が少なく、詳細な時期は不明であるが、整地2に先行する。

整地1・2 耕作に伴って西から東へ下降する傾斜面の高い側(西側)を削り、低い側(東側)へ土を盛って平坦面を作るいわゆる「切り盛り」際の盛土にあたりと考えられる。整地1はI区の東端の段丘の落ち際、段丘崖に沿う形で幅4m前後の範囲である。底面は東へ下がって傾斜して東端では0.4~0.6mの厚さがあり、版築状の堆積状況がみられることから、幾度も整地が繰り返され平坦面の確保がなされていたようである。整地2はI区中央、耕作に伴う南北方向の段

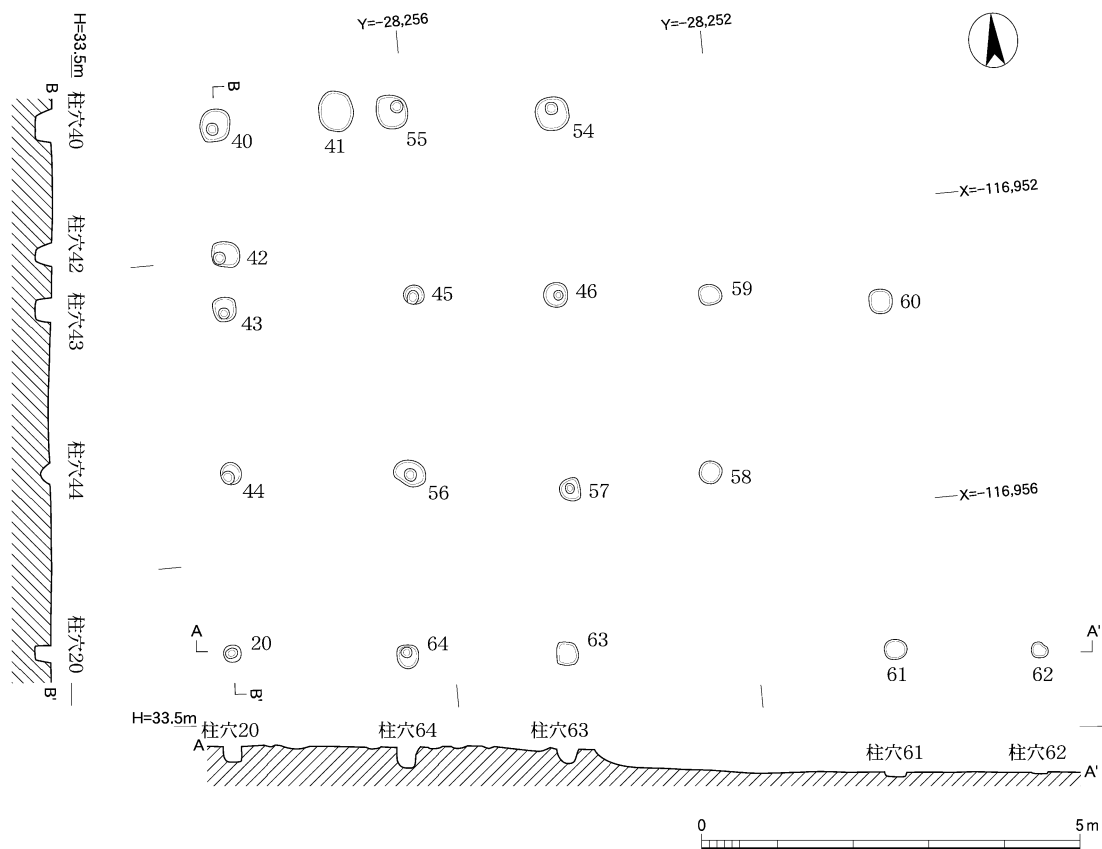


図15 I区 掘立柱建物1実測図(1:100)

の高い側（西側）上面で検出した。厚さ 0.1～0.2 mで、東ほど厚くなっている。

溝 481 II 区の東西のほぼ中央で、現代以前耕作土を除去した河川氾濫堆積の上面で検出したやや北で東へ振れる南北方向の溝状遺構である。幅は 3 mあり、南北の中央付近から北の調査区外へと伸びる。確認できたのは 13.5 m分である。

河川氾濫堆積 I 区との境である段丘崖を形成したと考えられる小畑川あるいは善峰川の大規模な氾濫による砂礫主体の堆積である。II 区のほぼ全面で確認された。現在当地より約 200 m東を流れる小畑川の氾濫原の西端にあたっている。II 区中央部の東西断割断面（図 11・12）の観察により、大きく下面を削り込む洪水とそれに伴う砂礫の堆積が少なくとも 2 度確認され、1 度目の洪水により I・II 区間の段丘崖が形成されたと考えられ、2 度目の洪水までに溝 481 が作られ、その埋没後に 2 度目の洪水があったとみられる。その後は耕作地として利用されていることがわかる。

（3）長岡京期の遺構（図版 2・6・8・9）

I・II 区は右京二条三坊一町の中央東寄りの北 1/4 にあっており、I 区の北辺では東西方向の一条大路および南側溝、これに伴う築地関連遺構を検出した。一町宅地部分では一条大路に面して内溝および整地遺構を検出したが、建物は検出されなかった。II 区では先述の河川氾濫により、遺構面が大きく削り取られたと考えられ、当該期の遺構は皆無であった。

一条大路および南側溝 I 区北辺で検出した東西方向の溝 26 の北側が一条大路路面部にあたる。I 区西 1/2 までは良好に遺存するが、東 1/2 程度は後世の「切り盛り」などによって削り込まれる。南側溝と考えられる溝 26 も調査区の西 1/2 では良好に検出されたが、東 1/2 では東端に底部が残存するのみであった。溝 26 は前年までの成果と同様、溝には新古 2 段階が確認され、古い段階の溝は西端で幅 2.3 m・深さ 0.4 m（底の標高 33.2 m）、調査区中央では幅 1.7 m・深さ 0.3 m（底の標高 32.9 m）と東側では上部が削られて残存状況が良くないが、部分的に底部が深く掘り込まれている箇所がある。一旦埋まった後やや幅 1 m・深さ 0.15 mの幅の狭く浅い、新しい段階の溝が掘り直されている。

築地関連遺構 南側溝（溝 26）の南側で、側溝に並行する 2 条の柱穴列（柱穴列 1・2）を検出した。柱穴列 1 は柱穴 27・29・32、柱穴列 2 は柱穴 28・30・34、0.9 mの間隔で並行する 1 対の遺構と考えられ、柱間 6.5 m 2 間分が確認できた。2006 年度・2007 年度の調査でも同様の遺構が確認されており、構造については検討が必要であるが、築地に関連する遺構と考えられる。

内溝および整地遺構 柱穴列 2 の南側約 1 mで、これも並行して内溝と考えられる東西方向の溝（溝 24）と整地遺構（整地 3）を検出した。整地 3 は内溝の位置より南側へ 2～5 mの不整形な範囲を深さ 0.2 m前後掘り込んだ後、入れ土をしたもので、造営時に何らかの理由で行われた整地に関連する遺構であると考えられる。2007 年度に検出した整地層 163 と同一の遺構である。内溝と考えられる溝 24 は、整地 3 が施された後に北端部に東西方向に掘り込まれた、幅 0.5～0.8 m、深さ 0.2 mの溝である。

Ⅲ区は一条大路の南辺、西三坊坊間東小路との交差点部にあっており、一条大路の南側溝、西三坊坊間東小路東西両側溝を検出した。

一条大路および南側溝 調査区のほぼ中央に検出した東西方向の溝 3012 と溝 3010 が南側溝であり、これらの北側が一条大路路面にあたる。路面に関する施設は検出できなかった。八町部分の南側溝 3012 は幅 1.7 ～ 2.0 m、これまでの成果と同様に新古 2 時期あり、古段階の溝が埋まった後に新段階の溝が掘り直される。西三坊坊間東小路の路面を貫通して東へ延びず、南へ 90 度折れ曲がって西側溝 3013 に接続する。同様に一町部分の南側溝 3010 も 90 度南に折れ曲がり、東小路の東側溝 3011 に接続する。

西三坊坊間東小路および東西両側溝 西三坊坊間東小路は調査区の東寄りで検出した。一条大路との交差点南辺にあたり、2007 年度調査の北延長となる東西両側溝 3011・3013 を確認した。東小路の路面の幅は、両側溝の肩部間の距離で 6 m である。先述のように一条大路の南側溝は東小路を貫通することなく、それぞれ南へ折れ曲がって、東小路の側溝に接続することが明らかになった。東側溝 3011 は幅 2.1 m、深さ 0.1 m、西側溝 3013 は幅 0.8 m、深さ 0.1 m、いずれも北側の一条大路路面はほぼ同じ幅の浅い溝が横断して接続する。

(4) 奈良時代以前の遺構 (図版 6)

当該期の遺構はⅢ区で検出した溝などがあり、溝は 2007 年度調査で検出したものの北延長部にあたる。長岡京期遺構面と同一面で検出される。出土遺物がなく詳細な時期が決められないが、切り合い関係などから長岡京期以前、弥生時代前期以降のいずれかの時期の遺構と考えられる。

溝 3005・3023 いずれも幅 0.7 m 前後、深さ 0.15 m、方位北で東へ 20 ～ 30 度傾く並行する南北方向の溝である。両溝の芯・芯間の距離は 7 m である。

(5) 弥生時代前期の遺構 (図版 3・7・10)

I 区、Ⅲ区の全域で、竪穴住居・掘立柱建物・土坑・焼土痕 (炉跡)・土器棺墓・溝・柱穴列・柱穴など多数の遺構を検出した。

竪穴住居 334 I 区中央南端で検出した。東西 5.7 m、南北 3 m 以上の不整円形の平面形の北半部と考えられるが、中央土坑や炉跡は検出できなかった。

竪穴住居 335 I 区中央南端、先述の竪穴住居 334 の西で検出した。東側、西側を溝に切られ、平面形は不明であるが、住居の北半部にあたると思われる。中央やや東寄りに屋内炉跡と考えられる焼土 657 を検出した。

竪穴住居 415 (図 16、図版 11- 2) I 区中央北端で検出した。平面形が隅丸方形の住居の南半部とみられ、東西 7.3m、南北は 3 m 以上になる。検出面より 0.15m 前後で面的に土器や石器が検出され、明瞭な面をなさないが床面と考えた。中央南辺に近い床面で焼土を含む土坑 653 を検出した。

竪穴住居 580 (図 17、図版 11- 3) I 区東端中央、直径 5 m の円形住居の西半を検出した。東半は後世の整地 1 によって削られ失われている。覆土には多くの土器・石器の破片が投棄されて

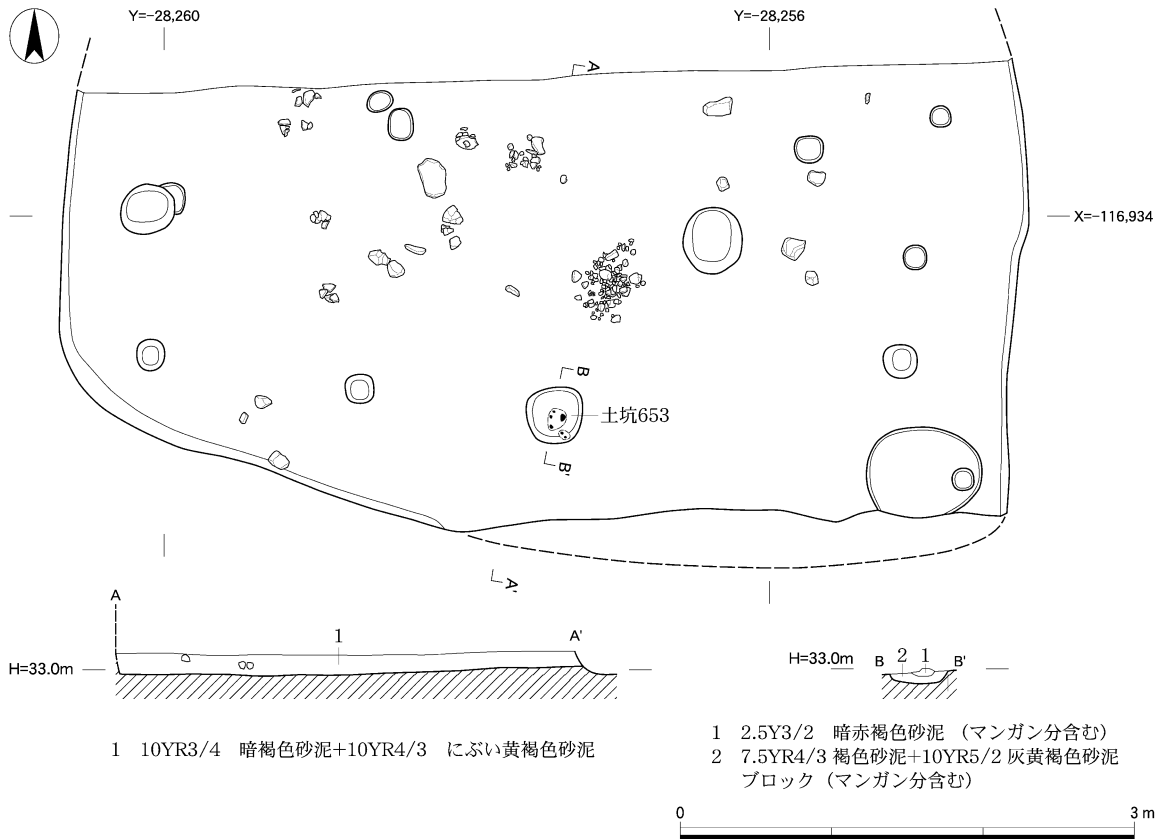


図 16 I 区 竪穴住居 415 実測図 (1 : 50)

いた。北端には土坑 605・606 があり、住居に伴う遺構と考えられる。

竪穴住居 3171 (図 18、図版 11- 1) III 区ほぼ中央で検出した。北半分は後世の遺構により失われ、残存状況は良くなかったが、長軸 5.5 m、短軸 5.0 m の楕円形の平面形の住居と考えられる。中央に検出された土坑 3036 は、底面がやや焼けており炉跡と考えられる。ほぼ床面まで削り込まれた状況であったが、床面は周囲が浅く掘り込まれ中央がやや高くなっている。柱穴は 7 基検出した。

竪穴住居 3289 (図 19) III 区やや西寄りで検出した。約 4 m の円形の平面形の住居の南半部と考えられる。床面まで削り込まれた状態であったが、土坑 3067 を中央土坑とし、半円形に柱穴が検出されたため、住居と考えた。先の 3171 や 2007 年度の竪穴住居 687 と同じ構造の住居であると思われる。

掘立柱建物 2 (図 20) I 区東端で検出した。桁行 5 間 (4.5 m) 以上、梁行 2 間 (2.2 m)、北で東へ約 45 度振れる方形の掘立柱建物である。柱穴は直径が 0.2 m 前後の円形のもので、桁行の柱間は 0.8 ~ 1.0 m とばらつきがある。

掘立柱建物 3 I 区中央部南寄りで検出した。上屋構造については不明であるが、不整楕円形の平面形の建物と考えられる。柱穴は直径 0.3 m 前後の円形のもので、柱間は 2 m 前後から 0.7 m とまばらである。建物内の北辺に検出した埋土内に焼土塊を含む土坑 308 は、建物に関連する遺構であるとする。

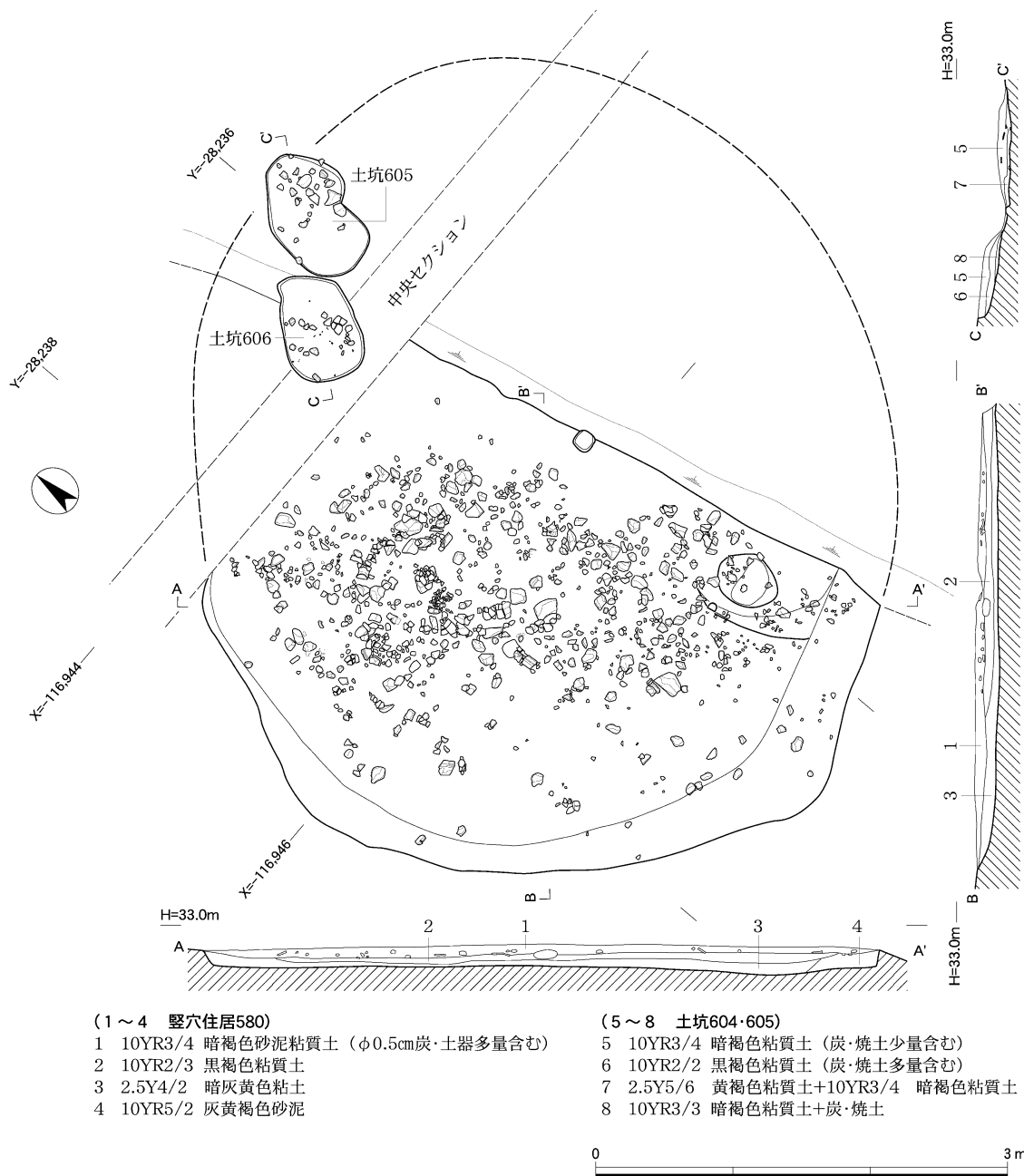


図17 I区 竪穴住居580実測図(1:50)

土坑298(図21) I区北半東寄りで検出した。東西0.6m、南北0.98mの長楕円形の土坑である。上部は削られて失われており、残存する深さは最大で0.1mである。埋土中に少量の炭化物とともにまばらに土器破片を含む。

土坑331(図22) I区中央部で検出した。南北に細長い溝状の土坑である。幅0.8m、南北3.45m、深さは0.2m、側面がなだらかに傾斜して底面が平坦になっている。2層から底面にかけて全面的に土器片や石器(石鏃)、礫などが投棄された状態で検出された。長軸の方位はほぼ座標軸に沿っている

土坑340(図23) I区南半西寄りで検出した。東西に細長い溝状の土坑である。幅0.8m、東西4.4m、深さは0.2～0.25m、断面は側縁の短いU字形を呈する。埋土下部から底部で土器片や石器・

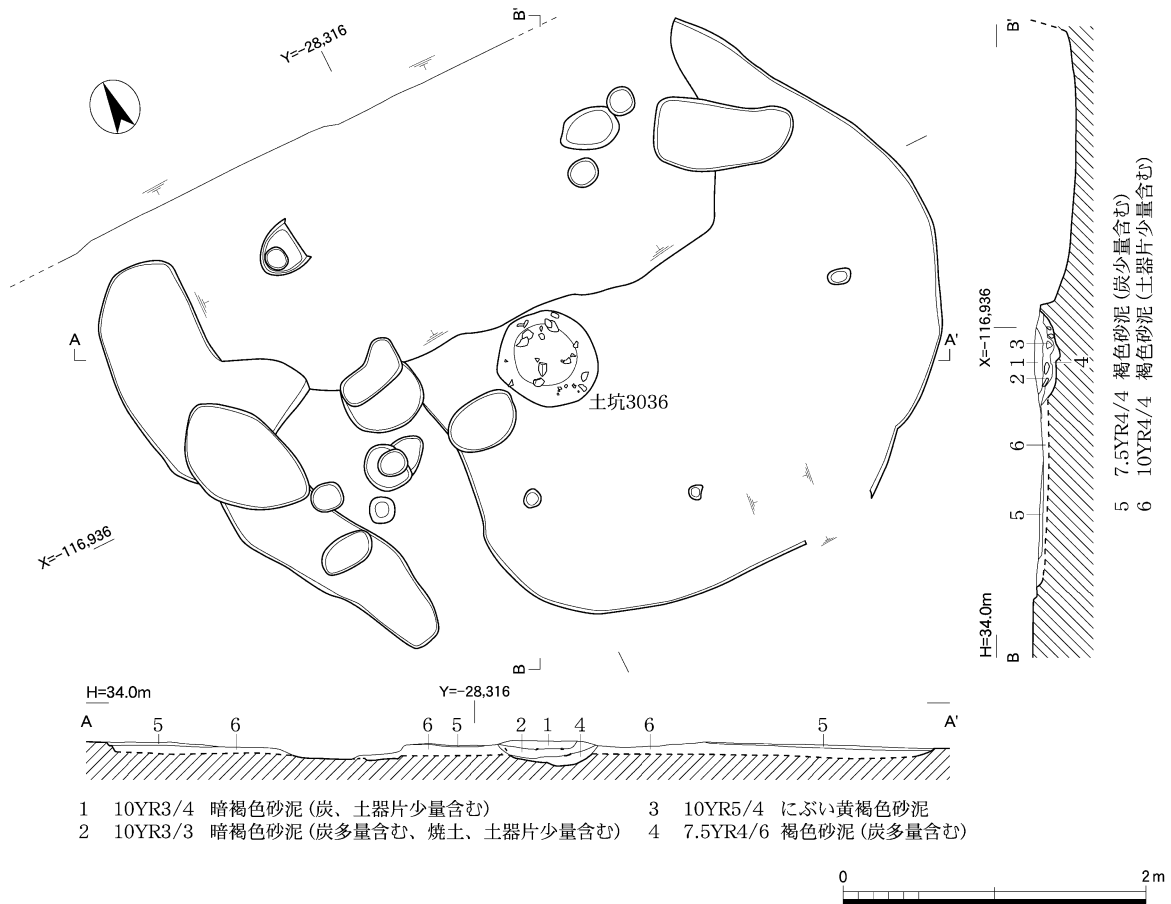


図 18 Ⅲ区 竪穴住居 3171 実測図 (1 : 50)

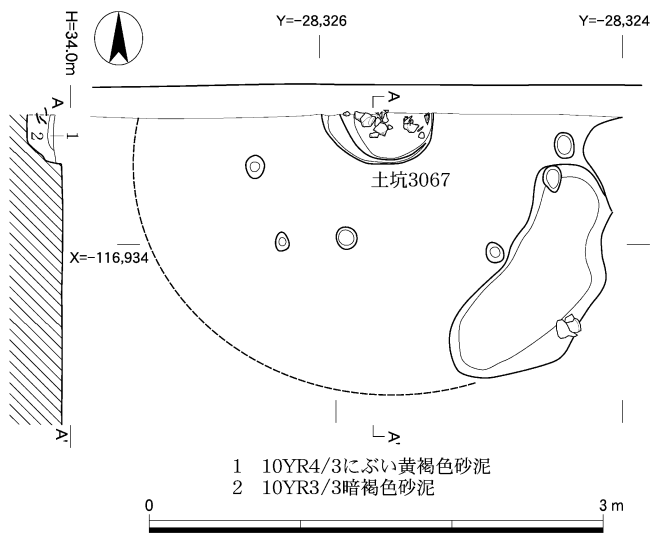


図 19 Ⅲ区 竪穴住居 3289 実測図 (1 : 50)

礫などが検出された。先の土坑 331 に直交する方位である。

土坑 344 (図 24) I 区南半部西側で検出した。東西 1.6 m、南北 0.85 m の楕円形の平面形で、深さ 0.25 m の土坑である。断面などの観察により、一旦 5 ~ 7 層によって埋まった後に、当初よりも小振りの深さ 0.2 m の土坑 (1 ~ 4 層) が掘り直されたことがわかる。掘り直された土坑には底面に炭化物を主体として焼土塊を多く含む層 (2 ~ 4 層) が堆積しており、灰穴炉

のような用途が考えられる。付章で述べるように、3 層から採取した炭化材は放射性炭素年代測定によれば、紀元前 6 世紀から 5 世紀という暦年較正年代が与えられている。

土坑 393 (図 25) I 区西寄りで検出した。東西 1.0 m、南北 0.9 m の円形、深さ 0.2 m である。土坑の底部に接して径 0.15 m 前後の礫が入れられており、底面より 0.15 m ほど埋まった段階で、

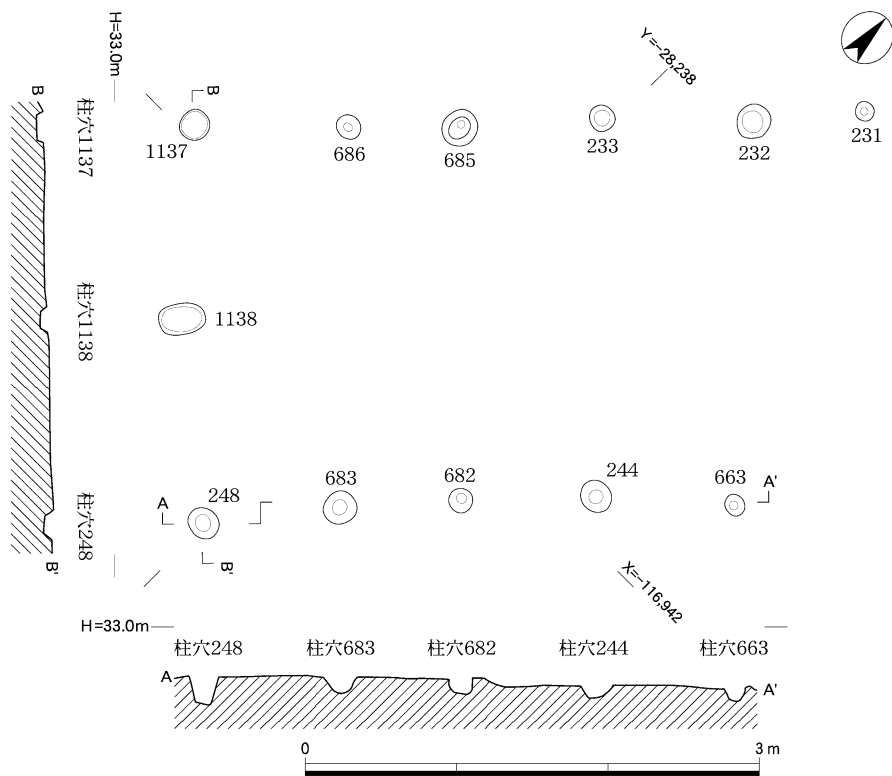
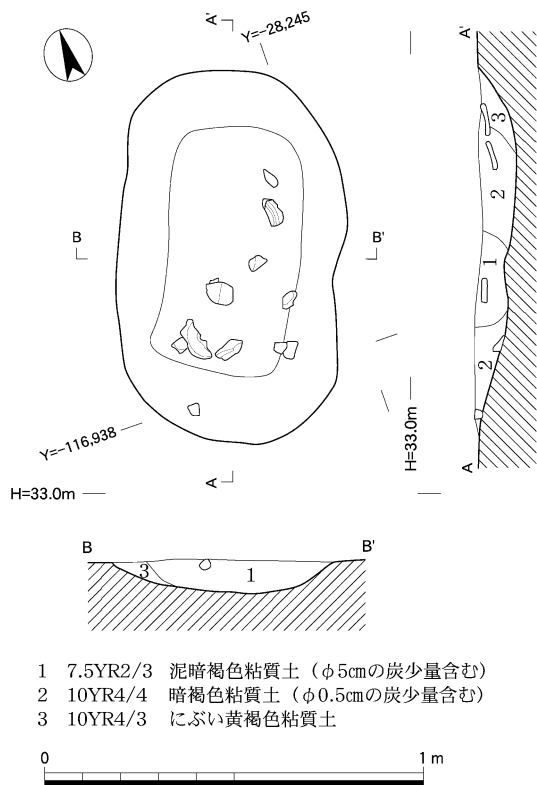
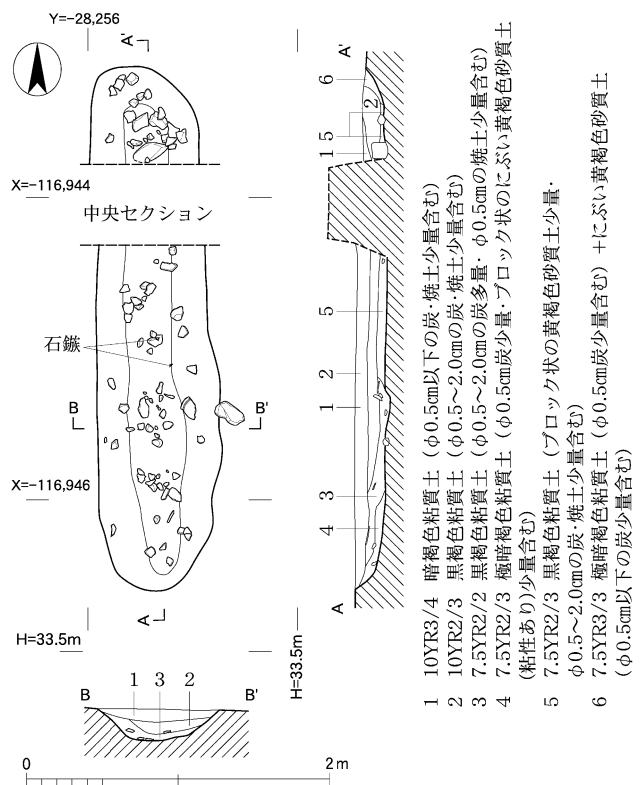


図20 I区 掘立柱建物2実測図(1:50)



- 1 7.5YR2/3 泥暗褐色粘質土 (φ5cmの炭少量含む)
- 2 10YR4/4 暗褐色粘質土 (φ0.5cmの炭少量含む)
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土

図21 I区 土坑298実測図(1:20)



- 1 10YR3/4 暗褐色粘質土 (φ0.5cm以下の炭・焼土少量含む)
- 2 10YR2/3 黒褐色粘質土 (φ0.5~2.0cmの炭・焼土少量含む)
- 3 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 (φ0.5~2.0cmの炭多量・φ0.5cmの焼土少量含む)
- 4 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土 (φ0.5cm炭少量・ブロック状のにぶい黄褐色砂質土(粘性あり)少量含む)
- 5 7.5YR2/3 黒褐色粘質土 (ブロック状の黄褐色砂質土少量・φ0.5~2.0cmの炭・焼土少量含む)
- 6 7.5YR3/3 極暗褐色粘質土 (φ0.5cm炭少量含む) + にぶい黄褐色砂質土 (φ0.5cm以下の炭少量含む)

図22 I区 土坑331実測図(1:50)

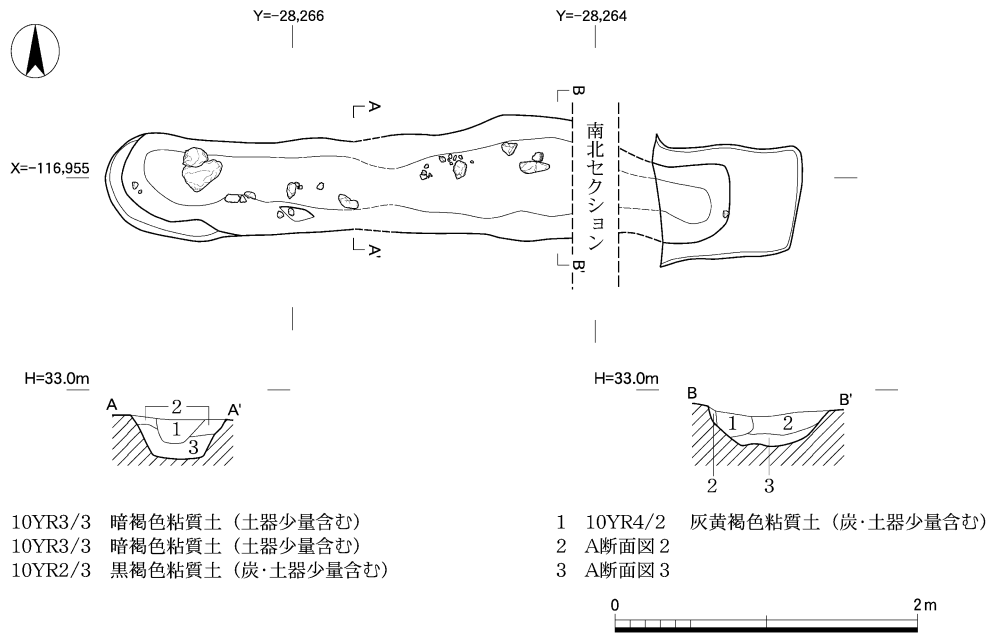


図23 I区 土坑 340 実測図 (1 : 50)

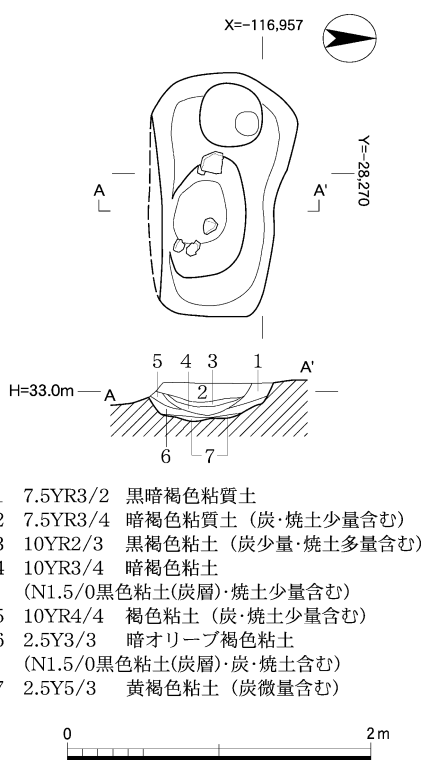


図24 I区 土坑 344 実測図 (1 : 50)

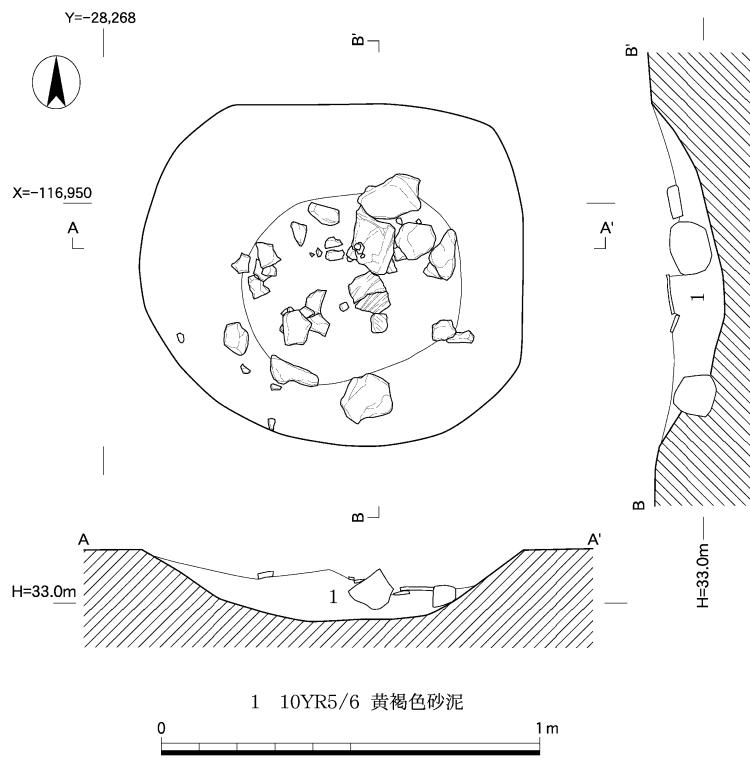


図25 I区 土坑 393 実測図 (1 : 20)

土器が廃棄されている。

土坑 664 (図 26) I 区南半西寄りで見出した。東西 1.7 m、南北 1.0 m の楕円形の平面形、深さ 0.2 m の土坑である。底面から 0.1 m までの埋土に多くの土器片・石器・礫などが含まれる。不要な土器・石器の廃棄土坑と考えられる。

土坑 3103 (図 27) III 区中央部で見出した。南北 1.75 m、東西 0.8 m の長楕円形の平面形の土

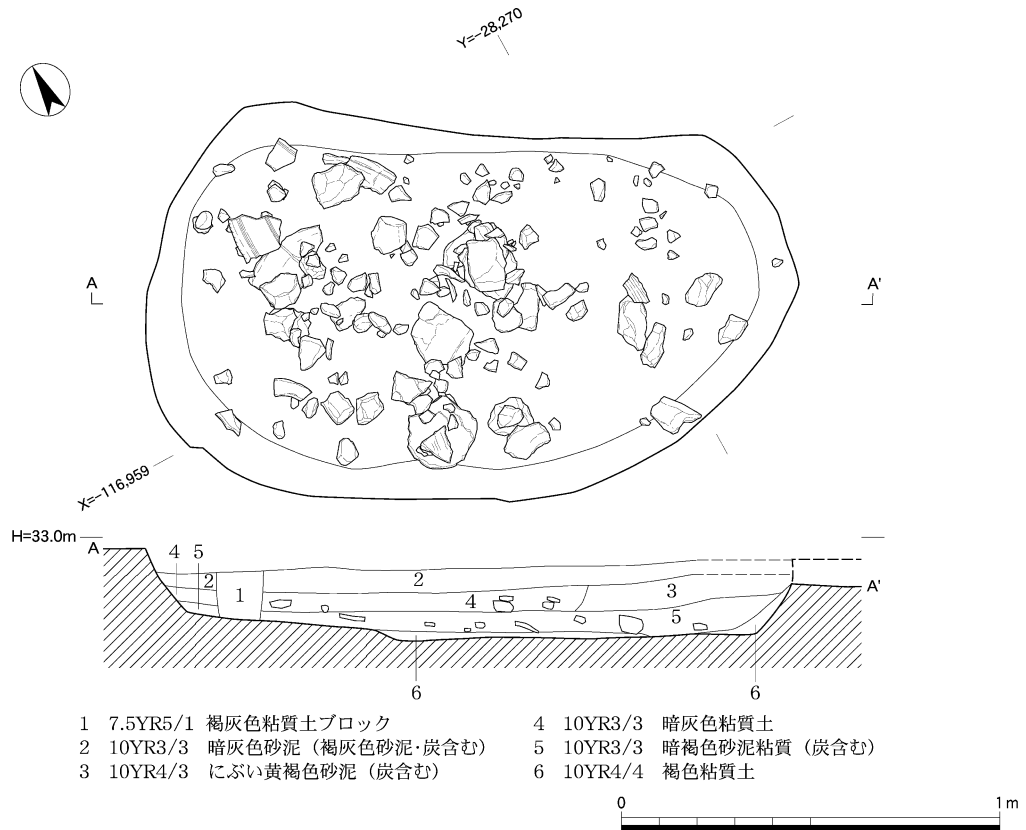


図26 I区 土坑664実測図 (1:20)

坑である。北端から0.65 mまでは深さ0.1 mと浅く平坦面をなし、底面は熱を受けて赤色に変色する。南半には最深部で0.45 mと急に深くなる2段落ちの構造になっている。一連の遺構であり、炉跡と考えられる。

土坑3140 (図28) III区北端、竪穴住居3289の東に隣接して検出した。東西1.4 m、南北1.7 m以上、北端は調査区外へ延びる。検出面での平面形は長軸が南北方向の長楕円形であったが、浅くなだらかな窪みの中央に、東西方向の楕円形 (1.4 m × 1.1 m以上)、深さ0.4 mの落ち込みがある。甕を中心とする土器類が出土した。

焼土痕 炉跡と考えられる焼土痕は、焼土225・226・227・228・637・657・671・680、土坑308などがあり、

I区西半部で多くを検出した。このうち焼土225・土坑308は土坑に焼土塊が少量含まれるもので、その場所で火が焚かれたものではないとみられる。それ以外のものはその場所で火が焚かれ、その熱によって下面が直径0.3～1 mの範囲で赤～黄色に変色している。明瞭な焼面が確認できたのは焼土227・671・637・657の4基であり、ほかのものは焼面が失われて加熱による変色痕を確認した。焼土657は竪穴住居335に伴う屋内炉と考えられるが、それ以外のものはいずれも竪穴住居に伴わず、屋外炉であったようである。

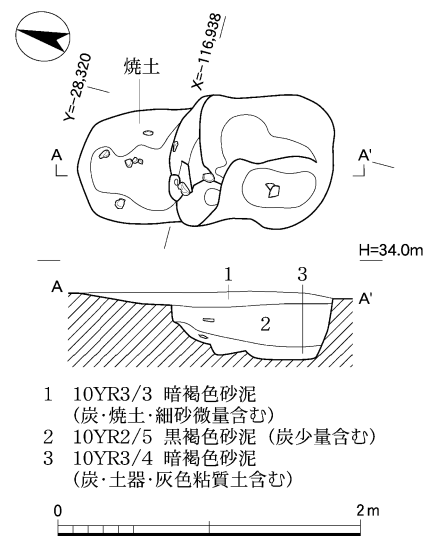


図27 III区 土坑3103実測図 (1:)

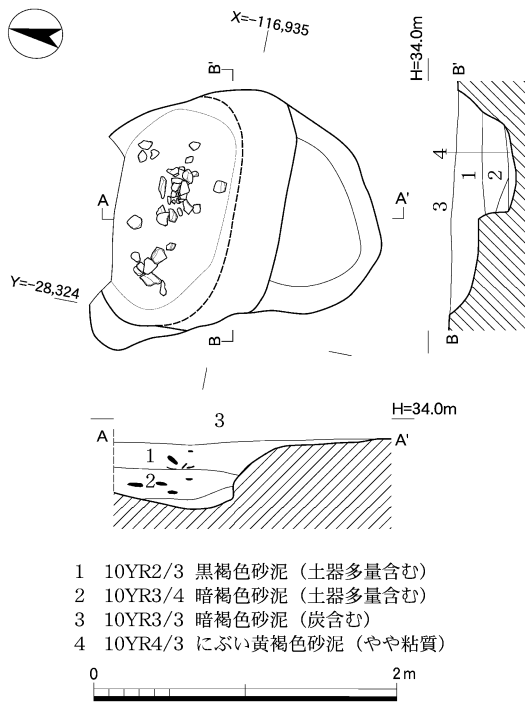


図 28 Ⅲ区 土坑 3140 実測図 (1 : 50)

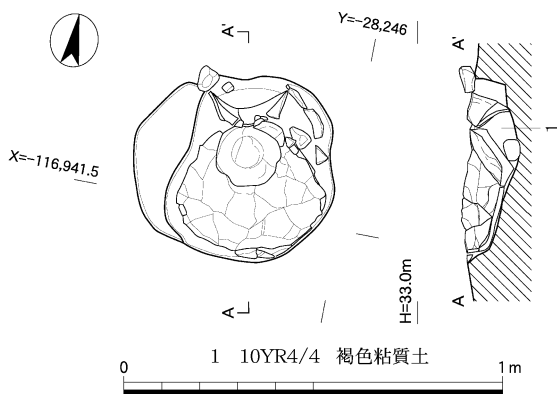


図 29 I区 土器棺墓 290 実測図 (1 : 20)

土器棺墓 (図 29、図版 11- 4) 土器棺墓は I 区で 1 基、土器棺墓 290 を検出した。一個体の口頸部界と頸胴部界にヘラ描き平行沈線文を巡らせる広口壺を用いた土器棺墓である。遺構の上部の大半は後世に削られ失われているが、底部が残存していた。検出した掘形はほぼ円形、直径が 0.6 m である。広口壺の口縁部を打ち欠いて、体部を棺として用いる、下半部を掘形底面に接して置き、打ち欠いた口縁部を底部の支えとして壺体部を斜位に据えている。

柱穴列 I 区では直径 0.1 ~ 0.3 m の円形の柱穴を多数検出した。それらのうち、何箇所かで直線的に列状に並ぶ柱穴群を確認した。いずれも柱間は等間隔ではなく、必ずしも一直線ではないが、何度か柱が直線のある程度意識して建てられたのではないかと考えられる。そのような可能性も含めて、柱穴列 3 ~ 10 とした。柱穴列 3 は I 区東端で検出した。直径 0.1 ~ 0.2 m の柱穴が南北方向に約 4 m 並ぶ。柱穴列 4 は I 区中央東寄りで検出した。北でやや西に振れる南北方向の 20 m 前後の列状を成す。柱穴列 5 は柱穴列 4 の約 4.5 m 西側でほぼ平行して、約 15 m を確認した。柱穴列 6 は I 区北半西寄りで検出した。座標北から西へ 35 度振れる方

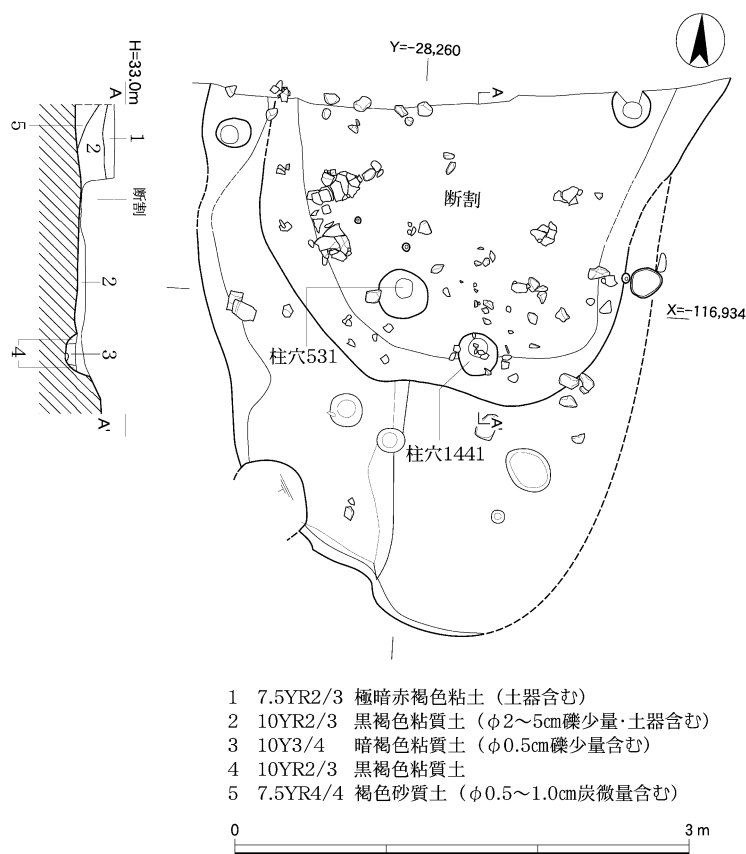
位の柱列で、約 11 m を確認した。柱穴 7 ~ 10 は I 区西半で検出したほぼ平行する南北方向の柱列で、7・8 と 9・10 はそれぞれ同じ場所で建て替えられたものとみられる。

(6) 縄文時代晩期の遺構 (図版 4・7・12)

縄文時代晩期の遺構は、流路状遺構を中心に I・Ⅲ区の全域で検出した。縄文時代晩期の遺構には、竪穴住居とみられる土坑 1 基・焼土 1 基、土器棺墓 3 基、配石遺構 1 基、流路状遺構 3 条、集石遺構 1 基、その他多数の土坑や柱穴がある。

土坑 848 (図 30、図版 13- 1) I 区中央北端で検出した。遺構の半分以上が調査区外であり、竪穴住居の可能性が考えられたため、その確認も含めて調査区北側を拡張した。中央に深さ 0.18 m の不整形土坑があり、その周りを囲むように浅い皿状の掘り込みが確認できた。全体では小判形になるとみられ、中央土坑などの床面では柱穴を 8 基検出した。しかし、規則的ではなく、主

柱穴ではないとみられる。土坑に伴う柱穴の一つである柱穴1441は直径0.25 m、柱あたり径0.12 m、深さ0.05 mである。床面とみられる土坑の底や肩口付近から晩期前半の土器が数点出土している。埋土は遺物を包含する極褐色粘土の下に、遺物を含む黒褐色粘質土が堆積していた。北壁近くの底面に北から南へ下がる褐色砂質土が入っていた。南北3.5 m以上、東西3.2 m、土坑の中央部は南北2.1 m以上、東西2.5 mである。北壁断面から土坑の深さを確認したところ、0.3 mの深さが確実にあったことがわかった。



- 1 7.5YR2/3 極暗赤褐色粘土 (土器含む)
- 2 10YR2/3 黒褐色粘質土 (φ2~5cm礫少量・土器含む)
- 3 10Y3/4 暗褐色粘質土 (φ0.5cm礫少量含む)
- 4 10YR2/3 黒褐色粘質土
- 5 7.5YR4/4 褐色砂質土 (φ0.5~1.0cm炭微量含む)

図30 I区 土坑848実測図(1:50)

焼土995 I区北西の北壁近

くで検出した。直径0.6 mの不整形円形を呈する。検出面は周辺の遺構よりも0.05 m程度高い位置であった。中央が赤褐色、その周辺には同じ色がうっすらと広がる程度の残りかたであった。焼土本体は遺構検出時以前に削平されていた可能性が考えられる。この焼土周辺には、土坑や柱穴、杭跡のような小型柱穴(直径0.05~0.1 m)を比較的まとめて検出している。このことから、竪穴住居の可能性を考え、調査区北壁を拡張し、遺構検出を行った。掘り込みを確認することはできなかったが、上部が後世に削平されている可能性や平地式住居の可能性も考えられることから、住居の可能性のあることを指摘するにとどめる。

土器棺墓740(図31、図版13-3) I区南西の流路状遺構1155南西肩で検出した。掘形の長径0.43 m、短径0.36 m、深さ0.24 mである。口縁から頸部は検出時にはすでに欠損しており、後世の削平を受けたとみられる。土器棺内の埋土は黒褐色砂質土であった。土器より少し大きな穴を掘って斜めに据え付けているため、土器がほぼ掘形に接している。掘形埋土は暗褐色砂質土と褐色砂質土である。底部は埋設時に打ち欠いたとみられる。

土器棺墓1202(図32、図版13-4) I区西で検出した。長径0.6 m、短径0.4 mの卵形土坑の南に直径0.25 mの深鉢が底を打ち欠いた状態で、正位置で埋められていた。土器棺埋土の深さは0.15 mである。土器棺中央に口縁部片の一部を載せ、底中央に拳大の礫を据えていた。南半分の土器は良く残っていたが、北半分の土器片はすべて抜いて、北側の本来土器口縁があるあたりに、蓋をしたような状態で置かれていた。掘形は暗褐色粘質土、土器棺内埋土はオリーブ褐色微砂と

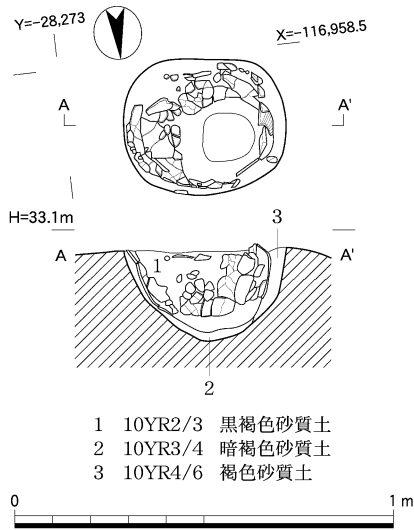


図 31 I 区 土器棺墓 740 実測図 (1 : 20)

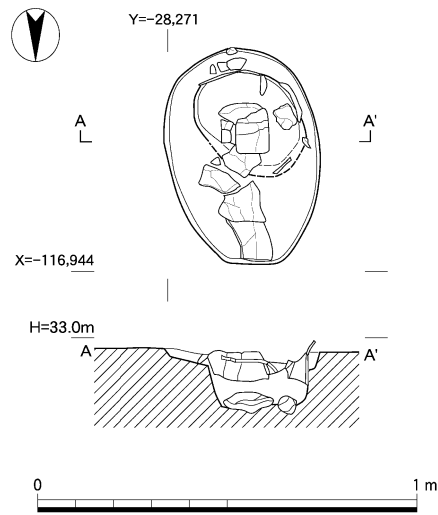


図 32 I 区 土器棺墓 1202 実測図 (1 : 20)

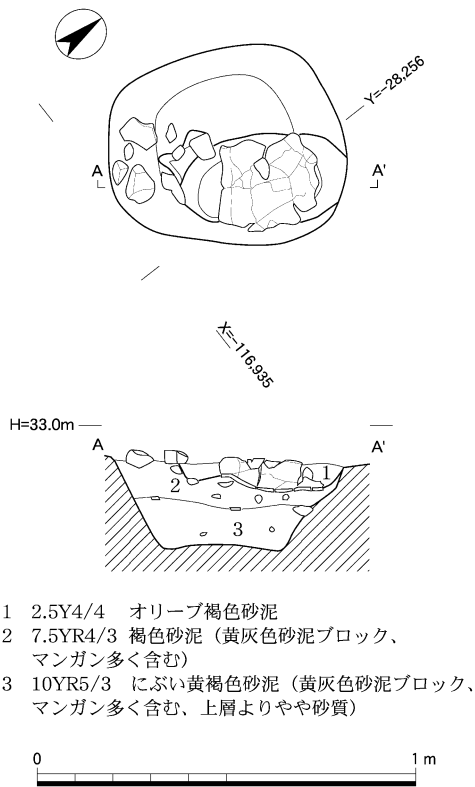


図 33 I 区 土器棺墓 1358 実測図 (1 : 20)

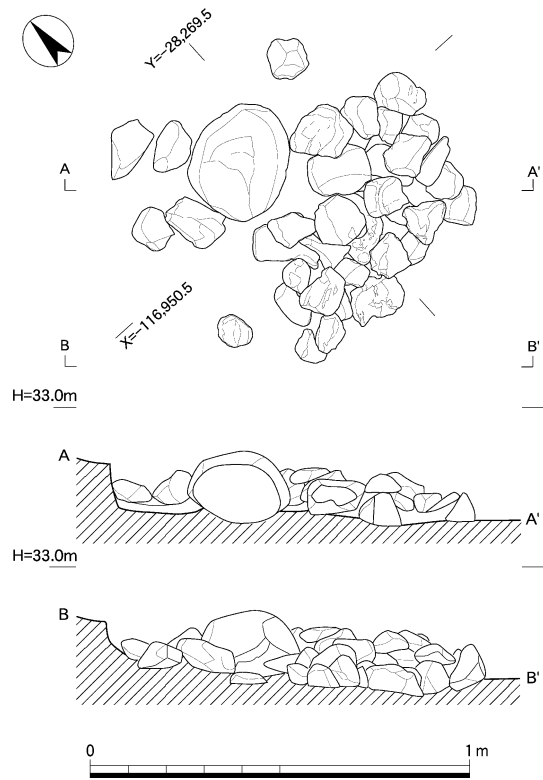


図 34 I 区 配石遺構 1412 実測図 (1 : 20)

黄褐色微砂である。骨などは検出できなかった。

土器棺墓 1358 (図 33) I 区中央北の土坑 848 東側で検出した。長径 0.6 m、短径 0.5 m、深さ 0.25 m である。土坑の南東部寄りに深鉢を横に寝かせて据えていた。上半分は削平されてなくなっており、土器は約半分と埋土は深さ 0.07 m が残っていた。底部は打ち欠いたとみられ、欠損していた。土器棺内埋土はオリーブ褐色砂泥、下層土坑埋土は褐色砂泥、にぶい黄褐色砂泥である。

配石遺構 1412 (図 34、図版 13- 2) I 区南西の流路状遺構 1155 の北肩斜面で検出した。や

や西寄りに直径 25 ～ 30 cm、高さ 20 cm の球状に近い石を据え、周辺に径 20 ～ 40 cm の石を南東側に特に集中させて配置していた。掘形はなく、地表面にじかに置いたものである。置き方に規則性は見られない。北西－南東方向に長軸があり、集石の範囲は長軸 1.0 m、短軸 0.9 m である。中央の石は砂岩質で、部分的に面を持っていることから、面取りの研磨加工をしたとみられる。周辺に配置されていた石はチャートと砂岩で、ほぼ同じ割合であった。チャートは加工痕をもたないが、砂岩には使用痕のあるものが数点含まれていた。断割を行って下層遺構の確認を行ったが、遺構は検出できなかった。

土坑 849 (図 35) 1 区北西隅で検出した。遺構の半分以上は調査区外である。東西 2.3 m 以上、南北 0.8 m 以上、深さ 0.25 m である。埋土は径 10 ～ 15 cm の礫と遺物を多く包含する黒褐色粘土と、径 1 ～ 3 cm の礫と遺物を含む黒褐色粘土である。西寄りに礫を多く含む層が堆積している。

土坑 1033 (図 36) 1 区中央北で検出

した。遺構の北側は長岡京期の溝で壊されていた。東西 2.3 m、南北 1.5 m 以上、深さ 0.1 m の皿状土坑である。同一個体とみられる浅鉢の破片が土坑内に散乱していた。また、粘板岩破片も出土している。埋土は褐色粘質土、炭を少量含むやや粘質なオリーブ褐色砂質土である。

土坑 1079 (図 37) 1 区中央北寄りで検出した。平面形は米粒形で中央が小判形にさらに深く凹む。土坑主軸は北西－南東方向にあり、その長さは 2.1 m、直交する短軸の長さ 1.25 m、深さ 0.07 m である。中央土坑の長軸 1.6 m、短軸 0.9 m、深さ 0.07 m である。埋土はやや粘質の黄褐色砂泥、下層は暗褐色砂泥である。出土遺物には、土坑北東で検出した石皿とみられる砂岩質の石と、南東で検出した浅鉢胴部片がある。

土坑 527 (図 38) 1 区中央南の流路状遺構 1155 の北方で検出した。隅丸方形に近い形で、中央がさらに楕円形状にくぼむ。長軸 1.05 m、短軸 0.96 m、上段の掘り込みの深さ 0.07 m、中央の一段下がる掘り込みの長軸 0.45 m、短軸 0.38 m、深さ 0.05 m である。埋土は上層が褐色粘質

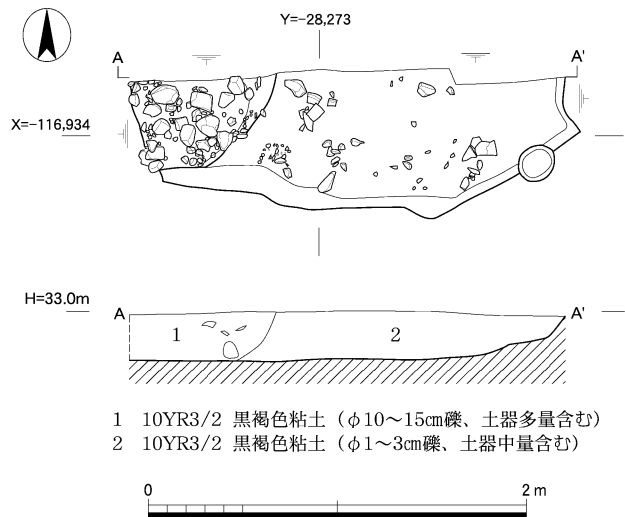


図 35 1 区 土坑 849 実測図 (1 : 40)

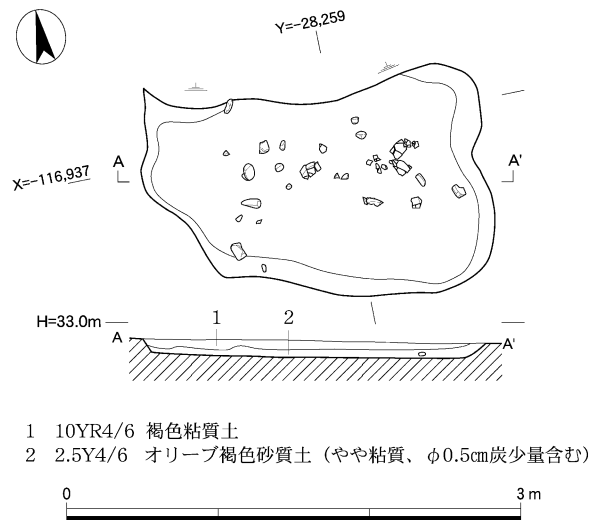


図 36 1 区 土坑 1033 実測図 (1 : 50)

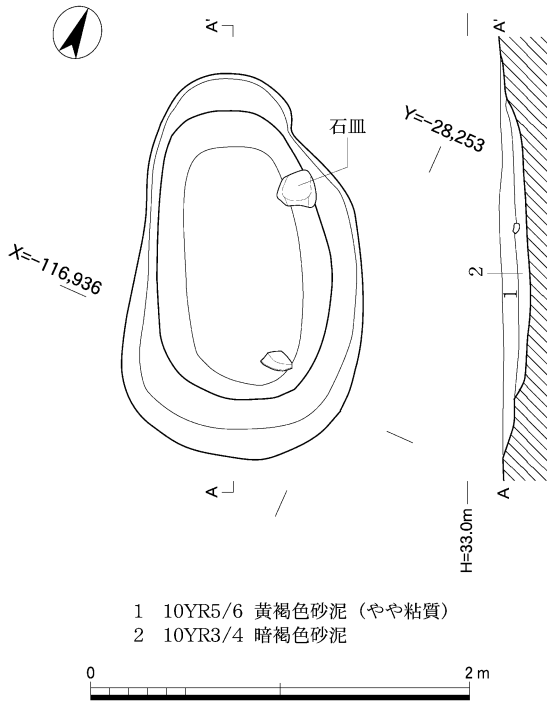


図 37 I 区 土坑 1079 実測図 (1 : 40)

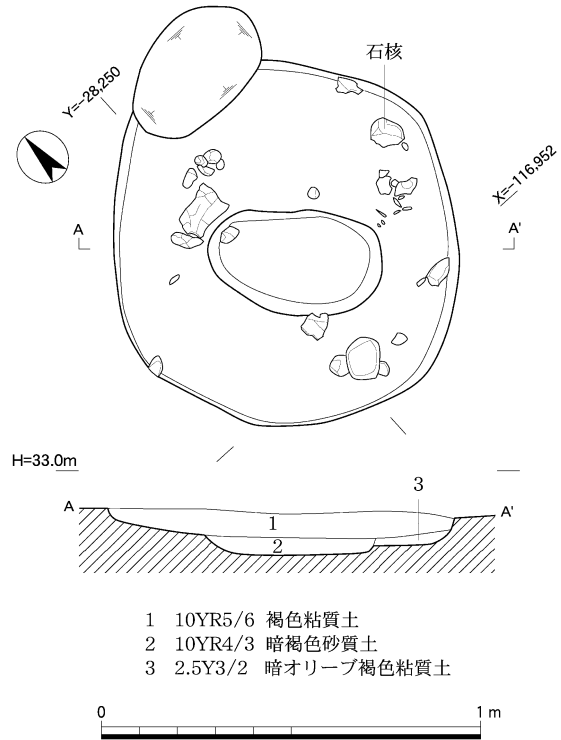


図 38 I 区 土坑 527 実測図 (1 : 20)

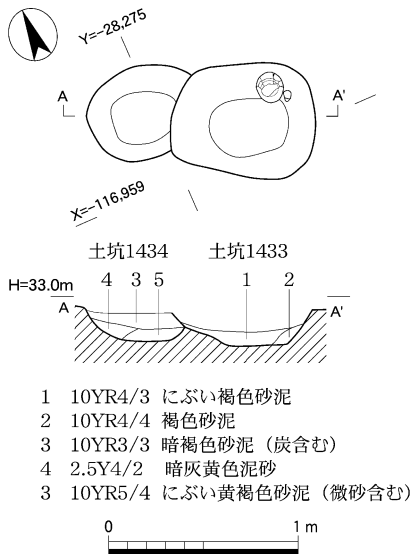


図 39 I 区 土坑 1433・1434 実測図 (1 : 40)

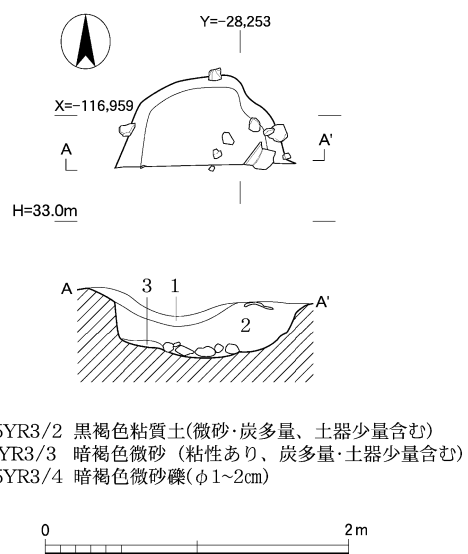


図 40 I 区 土坑 1429 実測図 (1 : 50)

土、楕円形状凹みの下層は暗褐色砂質土である。出土遺物は、深鉢片、磨石とみられる砂岩質の石、サヌカイト石核などである。

土坑 1433・1434 (図 39) I 区の土器棺墓 740 南西で検出した。隅丸方形である。長軸 0.75 m、短軸 0.6 m、深さ 0.2 m、埋土はにぶい褐色砂泥が主体で、南東の底に褐色砂泥が堆積していた。北東隅からボウル状の無文浅鉢が伏せられた状態で出土した。土坑 1434 は土坑 1433 の北西に重なって検出された長軸 0.5 m 以上、短軸 0.5 m の土坑である。埋土は暗褐色系の砂泥で

ある。縄文時代晩期土器片が出土している。

土坑 1429 (図 40) I 区中央南端の流路状遺構 1155 の底面付近で検出した。流路状遺構 1155 の埋土を切り込んで構築されていた。上面は断面で確認し、上面径 1.0 m、底面径 0.75 m、深さ 0.3 m である。人為的に置かれたとみられる径 5 cm 前後の石を底面で多数検出した。埋土は暗褐色微砂で、径 0.5 ~ 1 cm の粒状の炭化物を多く含んでいた。この粒状のものは、分析の結果 ドングリであることが判明し、ドングリの貯蔵穴と考えられる。皮を検出していないことから、中身だけを保存していたとみられる。埋土上層には最終的に流れ込んだとみられる炭を多く含む黒褐色粘質土が堆積していた。

流路状遺構 1155 (図 41 ~ 43・45、図版 14) I 区の西から南、東へと広がる自然によって形成された遺構である。中央部から南西の北肩口は緩やかな傾斜で底面へ下がるが、北西や南東の北肩口および南肩口は急峻であった。北東付近の幅は 13 m、底面の幅 4 m、西肩口からの最大の

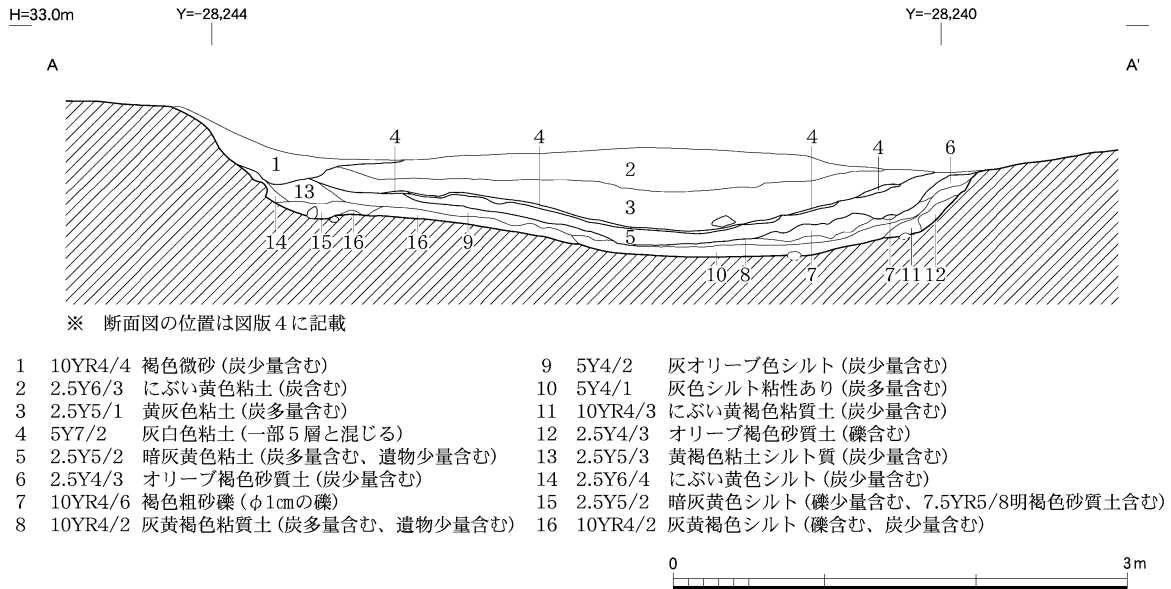


図 41 I 区 流路状遺構 1155 断面図 1 (1 : 50)

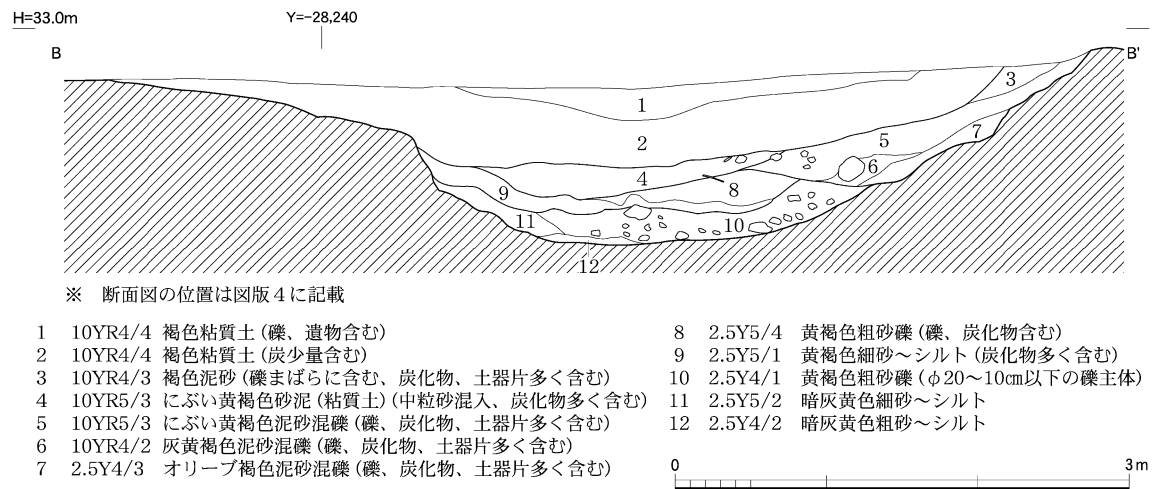


図 42 I 区 流路状遺構 1155 断面図 2 (1 : 50)

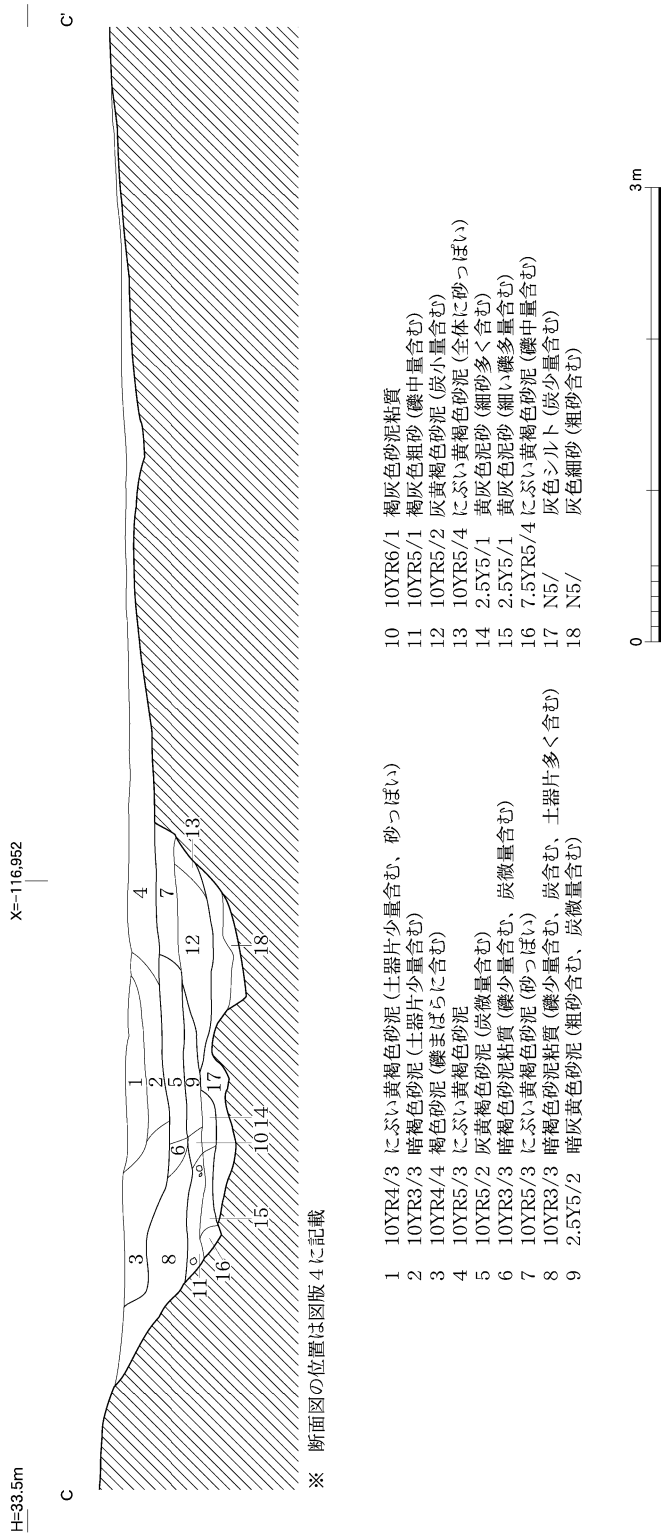


図 43 I 区 流路状遺構 1155 断面図 3 (1 : 50)

m溝状の窪地になっていたところに流入した状態が確認できた。南東の第5～7層と中央付近の中層から下層には、土器や石器、炭化物が多量に含まれており、これらの層は南側に偏って検出された。廃棄された土器や石器は、破片が大きく器形がわかり、器面が荒れていないものが多い。このことから、廃棄物を南側から投棄していた状態が考えられる。

深さは1 m、南東付近の幅 6.5 m、底面幅 1.5 m、東肩口から深さ 1 m、南西付近の幅 3.6 m、底面の幅 2 m、南西肩口からの深さ 0.9 mである。底面には北西から南と中央東から北東、中央東から南へ下がる傾斜がみられるが、流水があった形跡は南西の一部のみのそれも一時期で、全体的に滞留していたような土層を確認している。北東の埋土 (図 41) は自然堆積とみられる褐色微砂などの下に灰白色粘土 (第 4 層) が薄く堆積し、底面近くの深いところで炭化物などを多く含む灰黄褐色粘質土 (第 8 層) や灰色シルト (第 10 層) が堆積していた。南東の埋土 (図 42) は自然堆積とみられる褐色粘質土など (第 1～3 層)、土器や石器、炭化物、礫を多く含むにぶい黄褐色泥砂混礫など (第 5～7 層)、一時の流水痕跡とみられる暗灰色黄色細砂～シルト (第 11・12 層) の層序である。人の手が加わったとみられる層は第 5～7 層である。南西の埋土 (図 43) は褐灰色砂泥や粗砂、砂などが互層に堆積する (第 10 層以下)。最下層には流水痕跡である灰色シルト (第 17 層) と灰色細砂 (第 18 層) が、遺構底面に広がっていた。上層にはにぶい黄褐色砂泥 (第 4 層) の自然堆積で埋まったのち、にぶい黄褐色砂泥 (第 1 層) と暗褐色砂泥 (第 2 層) が幅 1.4

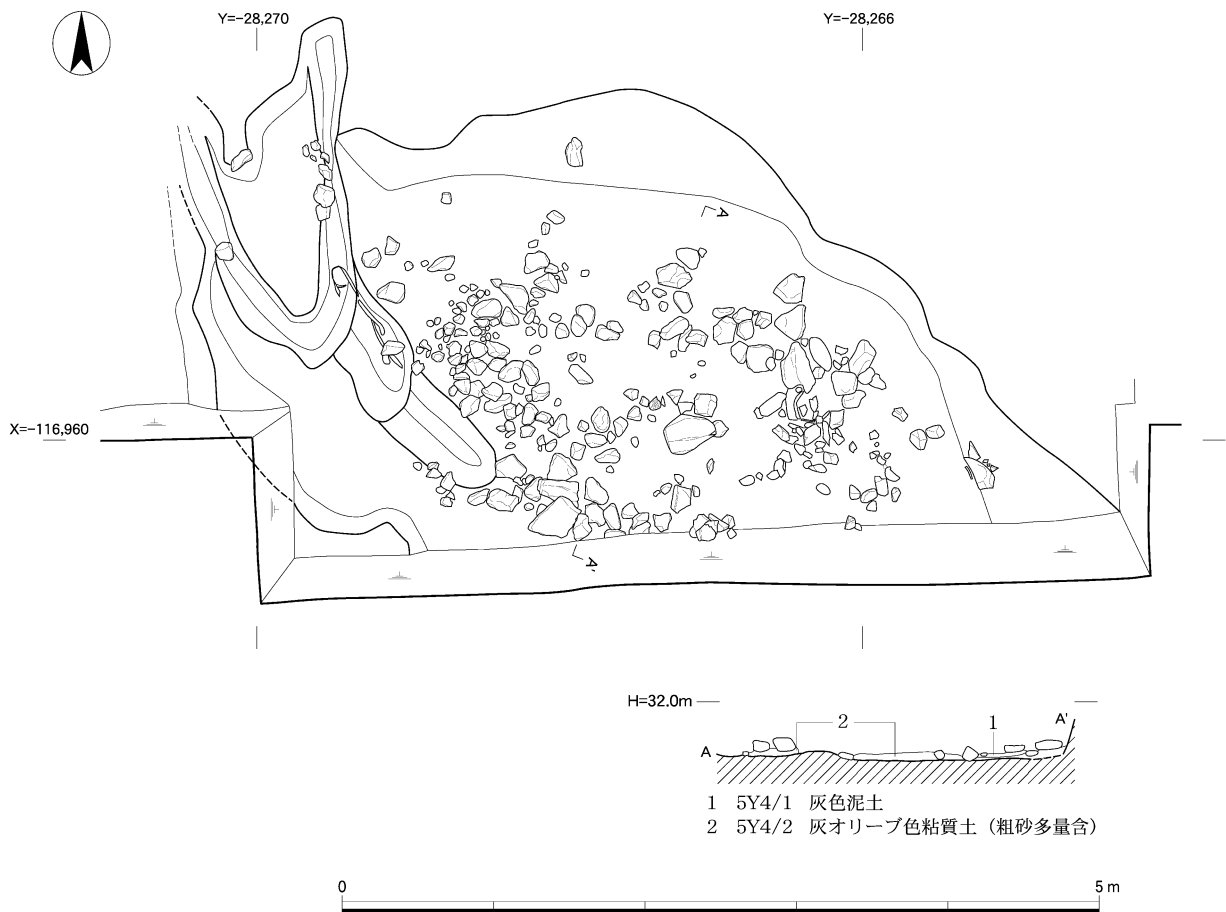


図 44 I 区 集石 1430 平面図 (1 : 50)

集石 1430 (図 44・45、図版 14- 3) I 区流路状遺構 1155 の南西部底で検出した。流路状遺構 1155 の底面で、この周辺が最も深くなる部分である。流れによって運ばれてきた石に加え、明らかに人為的に置かれた石が確認できたため、南へさらに拡張して調査を行った。砂礫層上に粗砂を多量に含む灰オリーブ色粘質土が堆積し、その上部の所々で灰色粘土が堆積していた。これらの堆積土には、腐食していない木の枝や葉、種実などが多量に含まれていた。ほとんどの石は灰オリーブ色粘質土上に撒かれたような散乱状態で検出したが、上面の高さが比較的そろっており、また一部面をそろえて列状に並べたところや、使用痕のある石器や土器が配置されたような状態で検出された。水を使用する際の足場の可能性がある。検出範囲は、東西 5 m、南北 3 m でさらに南側に広がるとみられる。遺構の直上は灰色細砂などで覆われており、この層は流路状遺構 1155 の下層埋土に相当する。南東壁際の第 6 層付近の平面検出で杭跡が数本東西に並んでいるのを確認したが、集石を検出した面まで打ちこまれていなかったため、この遺構とは別の施設の痕跡と考えられる。

土坑 3266 (図版 15- 1) III 区東で検出した隅丸方形の浅い土坑である。東西 7.3 m、南北 2.6 m 以上、深さ 0.08 m である。中央西寄りに東西 4 m、南北 2.5 m 以上の不整円形の凹みがあり、さらにその土坑の西寄りに東西 2 m、南北 1.5 m 以上、深さ 0.2 m の土坑がある。埋土は炭や土器が少量入った褐色砂泥が最も深い中央土坑に堆積し、浅い部分には土器や炭を少量含む黒褐色

H=34.0m

Y=-28.264

Y=-28.268

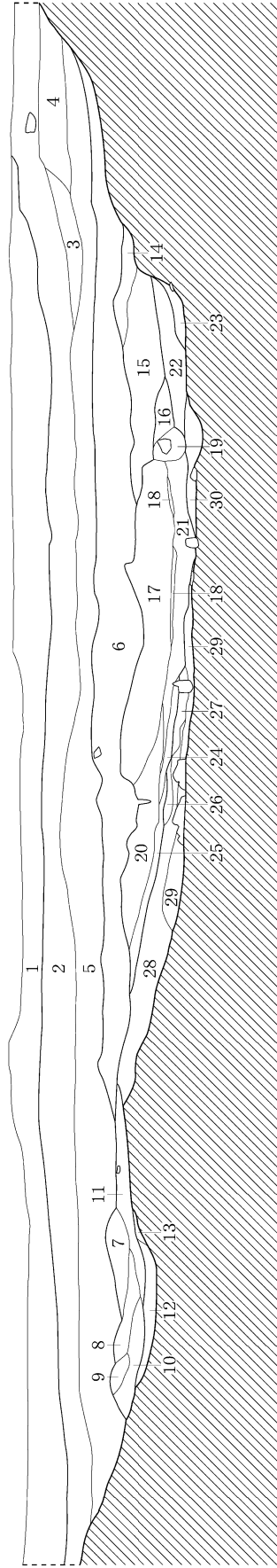


図 45 I 区 流路状遺構 1155 (集石 1430 部分) 断面図 (1 : 50)

自然堆積層

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土
- 2 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質土 (炭、焼土塊、遺物少量含む)
- 3 10YR4/4 褐色粘質土 (炭、土器片少量含む)
- 4 10YR4/4 褐色微砂 (10YR5/6 黄褐色微砂混じる、炭含む、遺物少量含む)
- 5 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土シルト質
- 6 5Y5/1 灰色シルト粘性あり (炭含む、土器片少量含む、褐色鉄分含む)
- 7 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質土 (微砂混じる、炭含む)
- 8 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質土 (微砂混じる、礫、炭含む)
- 9 7.5YR3/4 暗褐色粘質土 (炭微量含む)
- 10 10YR4/6 褐色粘質土 (微砂、礫含む)
- 11 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (礫含む)
- 12 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (炭含む)
- 13 5Y4/2 灰オリーブ色粘質土シルト質 (粗砂少量混じる、炭少量含む)
- 14 5Y5/1 灰色シルト (微砂混じる、炭含む)
- 15 N4/ 灰色シルト粘性あり

流路状遺構
1155

- 16 N4/ 灰色粗砂 (礫少量含む)
- 17 N3/ 暗灰色粘土 (炭多量含む)
- 18 5Y4/2 灰オリーブ色微砂粘性あり (炭少量含む)
- 19 5Y4/1 灰色シルト粘性あり
- 20 7.5YR4/6 褐色粘土 (粗砂混じる)
- 21 7.5Y4/1 灰色細砂 (炭少量含む)
- 22 N4/ 灰色シルト粘性あり (炭含む)
- 23 N6/ 灰色細砂粘性あり (シルト含む)
- 24 7.5Y5/2 灰オリーブ色粘質土 (炭少量含む)
- 25 7.5Y4/3 暗オリーブ色粘土 (炭少量含む)
- 26 5Y3/1 オリーブ黒色粘質土シルト質 (粗砂少量混じる、炭多量含む)
- 27 7.5Y3/2 オリーブ黒色粘質土 (粗砂混じる、炭含む)
- 28 7.5Y4/2 灰オリーブ色粘土 (炭多量含む)
- 29 7.5Y3/1 オリーブ黒色粘質土シルト質 (粗砂混じる、炭多量含む)
- 30 N3/ 暗灰色粘土 (炭多量含む)



砂泥やにぶい黄褐色砂泥などが堆積していた。西寄りの土坑西側に集中して、サヌカイト剥片が大量に出土した。剥片は5 mm以下の大きさが主体で、石器作りの最終調整に排出される押圧剥離によるチップとみられる。それ以外に、石鏃やその未製品、先端部が欠損したもの、石錐などが少量ではあるが出土している。石器を製作していた場所か、石器製作時に出たごみを廃棄した場所であったのかは不明である。1 mで地区割りをを行い、土壌ごとすべて持ち帰り、水洗選別を行って分析中である。

土坑 3273(図版 15- 2) Ⅲ区東端の土坑 3266 を約 0.1 m下げた際に東側で検出した。東西 2.5 m以上、南北 1.5 m以上である。底は北西から南東に向かって傾斜しており、深さは西側の浅いところで 0.08 m、東側の深いところで 0.3 mであった。台石が埋土の灰黄褐色砂泥上面で、土坑中央付近に、面を平坦にした状態で出土した。上層からさらに 0.1 m掘り下げたところ、南東付近に凹みがあり、中から土器や石器が出土した。埋土は炭を少量含む黒褐色砂泥などである。土坑 3266 に関係する遺構とみられるが、詳細は不明である。

流路状遺構 3263 Ⅲ区東から西端全体を占める遺構であり、2007 年度調査で検出した溝 1215 の北側の続きである。調査区中央付近と調査区西側に深い部分があるが、全体的に平坦な遺構である。最終的に深い部分が埋まった後も、広い範囲で浅い凹地となっていたとみられる。北壁断面での幅約 27 m、南壁断面での幅約 16 mである。調査区中央付近の深さは 0.45 m、調査区西側の深さは 0.34 m、浅い部分の深さ 0.15 mで、深い部分に炭化物や遺物が多く含まれていた。

流路状遺構 3274 (図版 15- 3・15- 4) Ⅲ区南西の流路状遺構 3263 下層で検出した。西から南へ弧を描く遺構である。最大幅 3 m、長さ 8 m以上、深さ 0.25 ~ 0.45 mである。埋土は、上層ににぶい黄褐色砂泥や暗褐色砂泥が堆積するが、下層は流水痕跡であるシルトが約 0.2 m堆積していた。このシルト層中には、炭化物を非常に多く含む層が部分的にあった。最上層から中層にかけて土器や石器が大量に出土した。

土坑 3288 Ⅲ区西の流路状遺構 3274 の西側下面で検出した。流路状遺構の流れ方向である東西方向に長軸が直交していた。東西 0.8 m、南北 0.6 m、深さ 0.3 mで、隅丸の長方形を呈する。検出時は炭を多く含む黒褐色砂泥が、「コ」の字状に幅 0.15 m、深さ約 0.1 mで堆積していた。この土を掘り下げた結果、深さは 0.25 mとなり、板状のものを立てた痕跡であることがわかった。周辺の掘形埋土である暗褐色粘質土やにぶい黄褐色シルトを取り除くと、断面が下膨れになる土坑になった。底面付近で縄文土器片が出土している。流路状遺構 3274 に関係する水場的施設の一部とみられるが、上部構造などが残存していなかったこともあり、詳細は不明である。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理箱に470箱出土した。土器類・石器類のほか、玉類・金属製品・炭化植物などがあり、主として長岡京期、弥生時代前期、縄文時代晩期のものである。

長岡京期以降の遺物はごく少量ある。Ⅰ区の整地1・2や耕作土、Ⅱ区の耕作土、氾濫堆積層などからまばらに出土した。土師器や瓦器などの土器類や銅銭などがある。

長岡京期の遺物はⅠ区やⅢ区の当該期の遺構、主に溝や整地などから出土した。土師器・須恵器など土器類が中心である。

弥生時代前期の遺物はⅠ区やⅢ区の各遺構や遺物包含層などから出土している。土器類・石器類など畿内第Ⅰ様式新段階のものが中心である。土器類では壺・甕、石器には石鎌・石錐・石庖丁・台石などがある。

縄文時代晩期の遺物はⅠ区やⅢ区の各遺構や遺物包含層などから出土している。土器類・石器類のほか、土製品・玉類など晩期前半のいわゆる滋賀里Ⅲ式期を中心とする遺物群である。土器類には浅鉢・深鉢があり、石器には石鎌・石棒・石刀や石皿・敲石・磨石など多種多様なものがあり、剥片や未成品なども多く含まれている。また、炭化した木片や植物種実が、とくに流路状遺構などの埋土から出土している。

(2) 長岡京期の遺物

いずれの遺構からも遺物の出土量が少なく、小片がほとんどで図示できる個体は非常に少ない。

溝3012出土遺物(1～4)(図46、図版16-1) Ⅲ区で検出した一条大路南側溝3012からは少量の土師器、須恵器のほか、土馬の破片と考えられる土製品などが出土した。土師器碗(1)は口径が13.9cmに復元できる体部から口縁部破片である。体部外面にはヘラケズリが施される。

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
長岡京期以降	土師器、瓦器、金属製品など				
長岡京期	土師器、須恵器、土製品など		土師器8点、須恵器7点、土製品(土馬)1点		
弥生時代前期	弥生土器、石器		弥生土器39点、石器19点		
縄文時代晩期	縄文土器、石器、土製品、玉類		縄文土器44点、石器64点、土製品2点、玉類2点		
合計		470箱	186点(30箱)	430箱	10箱

内面には漆と考えられる被膜が付着している。須恵器杯蓋（2）は口径16.8 cm、高さ3.3 cm天井部中央には宝珠形のツマミがつく。須恵器杯（3）は底部に高台のつく、いわゆる杯Bの直線的に開く体部から口縁部で、口径は19.6 cmである。土製品（4）は土馬の脚部と考えられる中実棒状の破片である。体部に接合していたとみられる上部がやや太く、脚先に向かってすぼまり先端は丸く納める。

溝26出土遺物（5～10）（図46）I区で検出した一条大路南側溝26

からは土師器、須恵器などが出土した。土師器皿（8）は口径が19.6 cm、器高が2.6 cm、底部から屈曲して立ち上がる口縁部は短く開きナデによって外反する。口縁端部は外傾する面をもち、内面には弱い沈縁が巡る。須恵器杯蓋（5）は口径13.4 cm、平坦な天井部の中央にツマミのつくものと思われる。底部に高台のつく、須恵器杯Bには6・7がある。6は口径11.8 cm、底径8.8 cmの小型のもので、7は口縁部を欠くが底径11.6 cmの大型のものである。須恵器瓶子（9）は回転ナデによって成形された体部下半のみが残存していた。須恵器壺（10）は高台のつく壺の底部と考えられる。外面には厚く自然釉が付着し、高台の底面には離れ砂が粘着している。

溝24および整地3出土遺物（11～16）（図46）I区で検出した一町域北辺の内溝24とこれに伴う整地3からは土師器、須恵器などが出土した。図示したうち、11は内溝24、12～16は整地3から出土した。土師器碗には（11～13）があり、いずれも口縁端部は丸く納める。磨滅が著しく調整は不明瞭である。口径は11が12.2 cm、12が16.0 cm、13が13.7 cmである。土師器皿には（14・15）がある。14は口径が15.2 cm、口縁端部を丸く納める。15は口径19.4 cm、口縁端部は肥厚して内傾する面をもち、体部外面にはヘラケズリが施される。土師器甕（16）は口径24.6 cm、体部から屈曲して口縁部が短く開く。口縁端部は肥厚して外傾する面をもつ。外面はユビオサエと縦方向のハケで調整される。

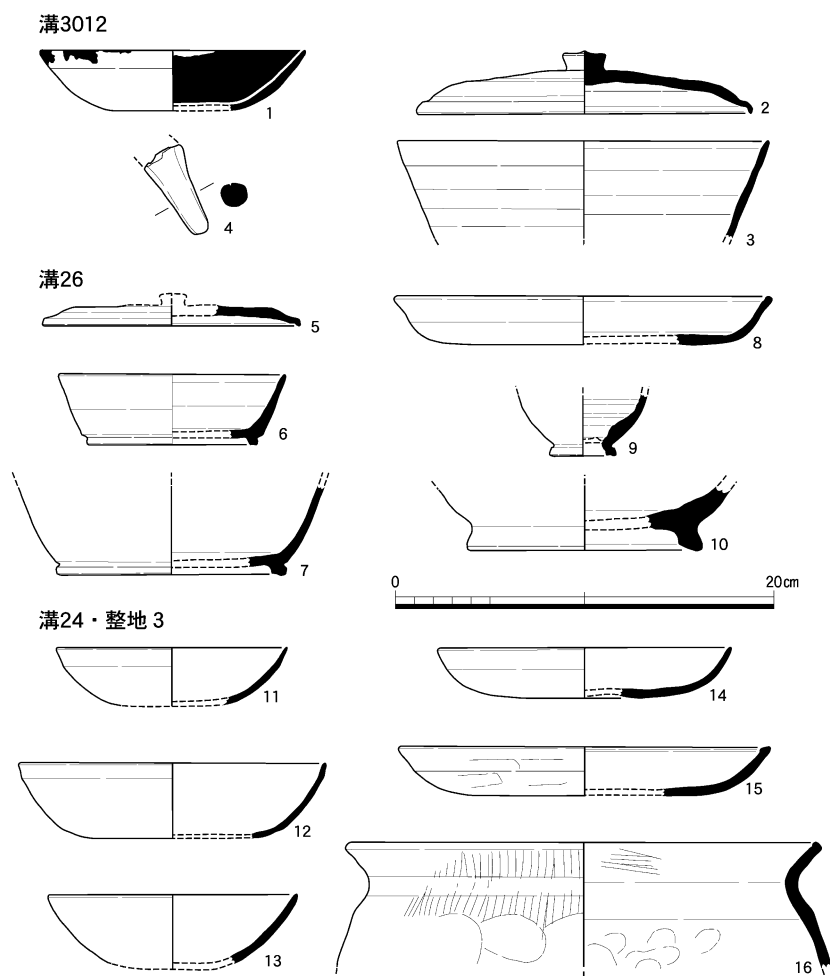


図46 長岡京期遺物実測図（1：4）

(3) 弥生時代前期の遺物

1) 土器類

竪穴住居 580 出土土器 (17～23) (図 47、図版 16-2) I 区竪穴住居 580 は覆土に多くの土器・石器片を含んでおり、住居としての機能廃絶後は不要物の廃棄坑として利用されたようである。甕 (17)、壺 (18～20) など土器類と石鏃や磨石・石皿などの石器類が出土した。甕 17 は口径が 35.8 cm の大型の甕口頸部である。体部から短く外反する口縁部がつく。口縁端部はやや受け口状を呈し、外面には刻目が施される。頸部に 3 条のヘラ描き平行沈線が巡る。壺 18・19 は広口壺の頸部と胴部である。18 は上部に向かいすぼまる頸部で、口頸部界と頸胴部界に弱いながらも段を施し、頸胴部界には 5 条のヘラ描き沈線を巡らせる。19 は丸く強く張る胴部で、頸胴部界にヘラ描き平行沈線文が 5 条巡る。界の段は不明瞭ながら意識しているようである。壺 20 は長頸壺の頸部で、少なくとも 3 条の突帯文を貼付けて巡らし、断面三角形の突帯の頂部には刻目を施す。底部 (21～23) のうち、21 は壺、22・23 は甕のものと思われる。

土坑 3067 出土土器 (24～28) (図 48、図版 16-1) III 区土坑 3067 は竪穴住居 3289 の中央土坑と考えられる遺構である。甕 (24・25)、壺 (26・27) などが出土した。甕 24 は口径 20.0 cm、25 は口径 19.2 cm、いずれも直線的な体部に短く外反する口縁部がつき、端部には刻目が施される。頸部に 4 条のヘラ描き平行沈線が巡る。広口壺 26 は強くすぼまった頸部から口縁部が大きく外反する。口径は 18.0 cm で、口頸部界には 4 条、頸胴部界には 4 条以上のヘラ描き平行

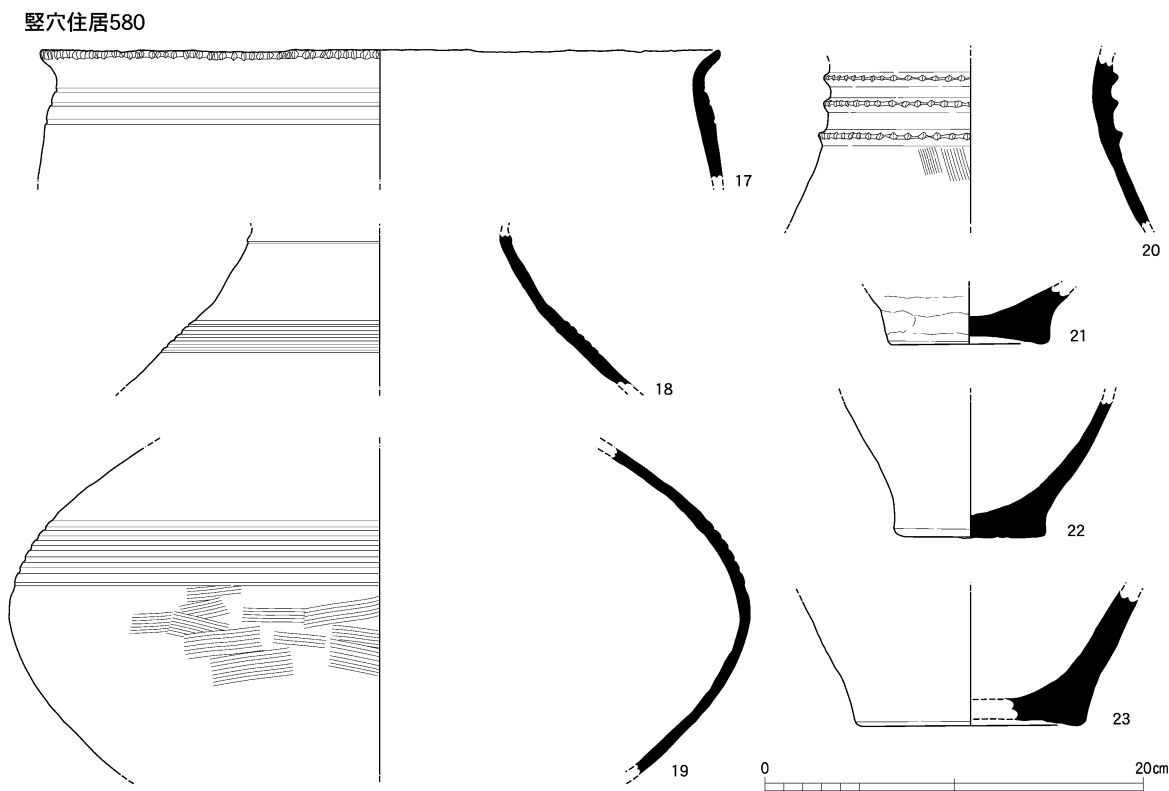
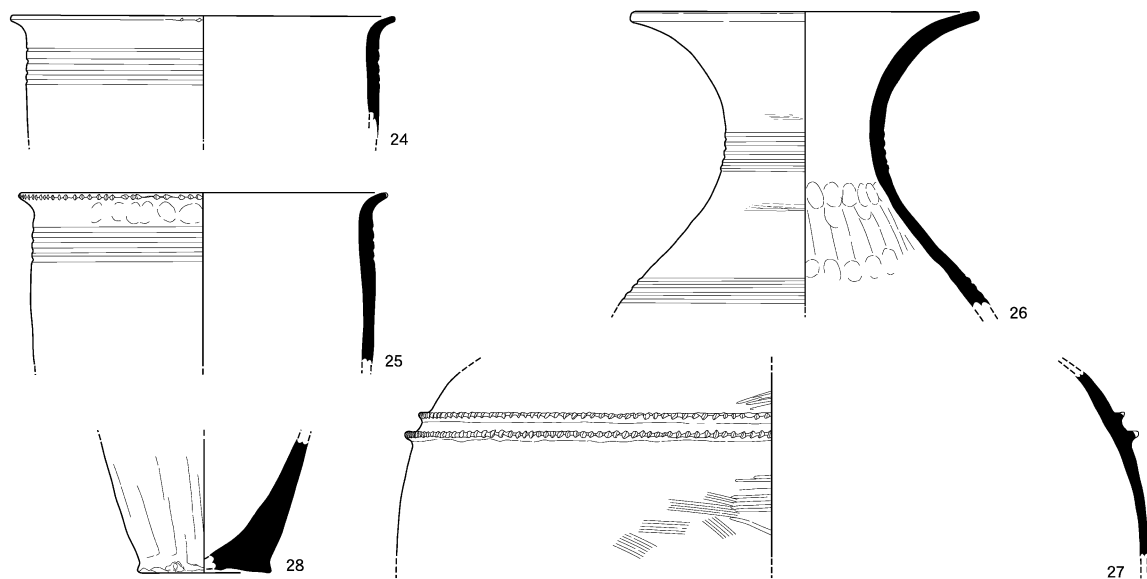


図 47 弥生時代前期出土土器実測図 1 (1:4)

土坑3067



土坑3140

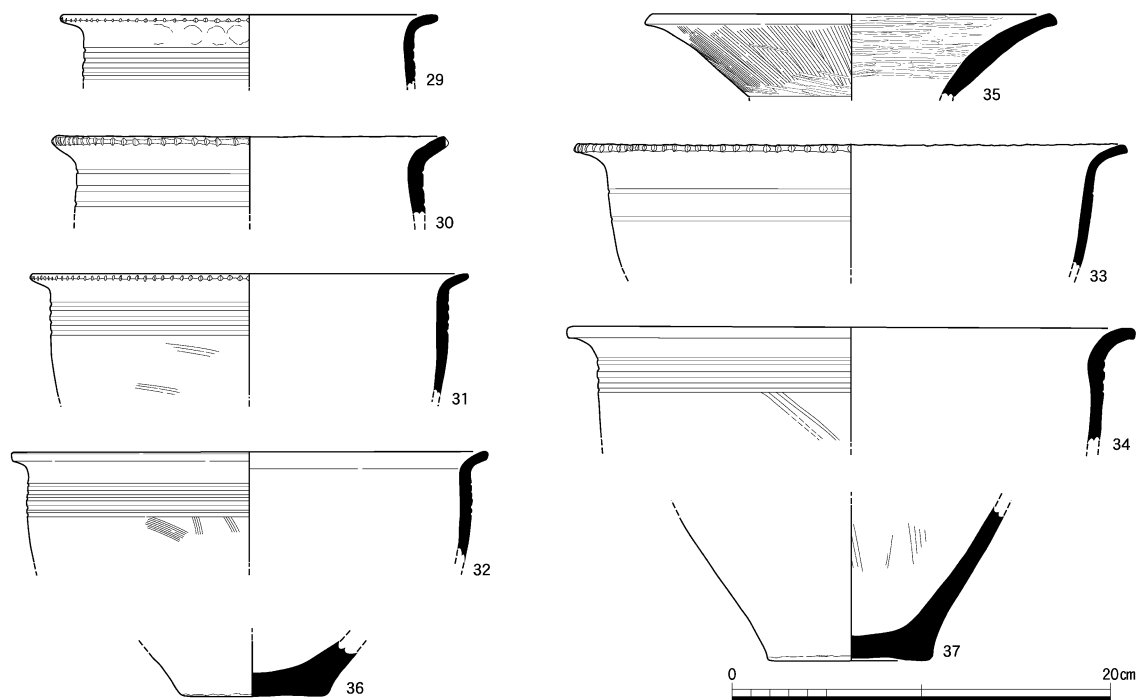


図 48 弥生時代前期出土土器実測図 2 (1 : 4)

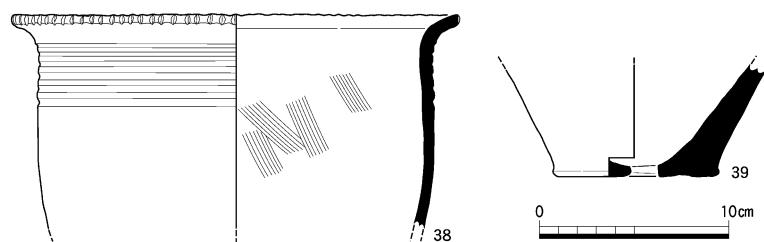
沈線を巡らせ、界には弱いながらも段を作り出している。27は壺胴部で、頸胴部界に2条の突帯文を貼り付け、頂部には刻目を施す。底部28は甕の底部である。外面には板状工具による縦方向のナデが明瞭に残る。

土坑 3140 出土土器 (29 ~ 37) (図 48) Ⅲ区竪穴住居 3289 の東側で検出した土坑 3140 からは甕 (29 ~ 34) を中心に壺 (35) などが出土した。甕は体部から外反して開く口縁部がつくもので、端面に刻目を施すもの (29 ~ 31・33) と施さないもの (32・34) がある。口径は 29 が 19.9 cm、30 が 20.4 cm、31 が 23.0 cm、32 が 25.0 cm、33 が 29.7 cm、34 が 30.0 cm である。頸部にヘラ描き平行沈線が施される。33 が 2 条、30 が 3 条、29・31・34 が 4 条、32 が 5 条で、

34はその下部に2条以上の平行斜沈線文が施されている。壺35は広口壺の口縁部で、破片の下端に沈線の痕跡がみられることから、口頸部界にヘラ描き平行沈線文が施されていたと考えられる。口径は20.9 cm、端部には外傾する面をもたせる。外面は縦方向のハケメののち横方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキが施される。底部36・37は甕の底部である。

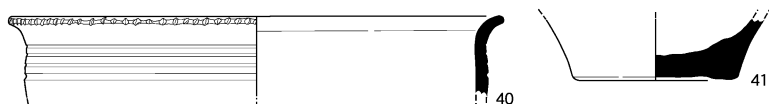
土坑331出土土器(38・39)(図49) I区中央で検出した土坑331からは甕・壺などの土器類が多く出土したが、図示できるものは少なかった。甕38は体部から外反して開く口縁部のもので、端部外面に刻目を巡らせる。頸部にはヘラ描き平行沈線文を6条施す。口径は23.0 cmである。

土坑331



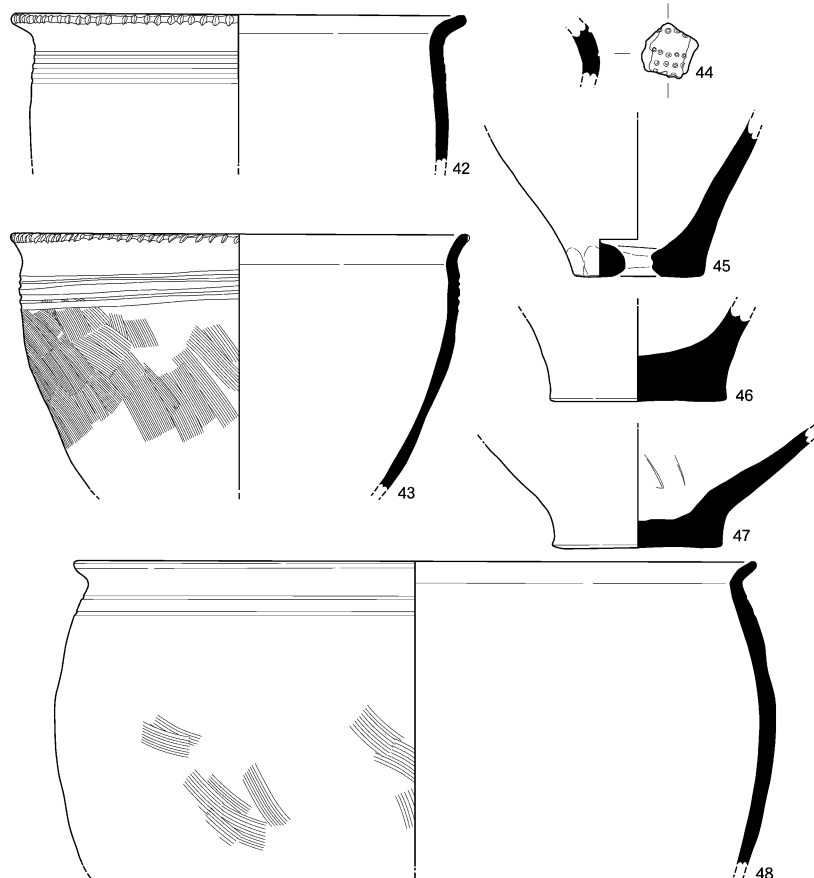
底部39は甕の底部で、焼成後に底部のほぼ中央に、外面から穿孔を行い、1.5 cmの不整形な穴を開けている。甕として利用されたと考えられる。

土坑3103



土坑3103出土土器(40・41)(図49) III区の焼土痕を伴う土坑3103からは土器類、石器類が出土した。図示できるものは少なかった。

土坑664



土坑664出土土器(42～48)(図49、図版16-1) I区南西部で検出した土坑664からは大量の土器・石器類が出土した。土器類では甕が主体的である。甕には体部から外反して開く口縁部の42や頸部の屈曲が弱く立ち

図49 弥生時代前期出土土器実測図3(1:4)

上がる口縁部の 43、口径が 35.4 cm と大型の 48 などがある。42・43 は口縁端部外面に刻目を施し、頸部にはヘラ描き平行沈線文を 4 条巡らせる。48 は口縁端部に刻目は施されず、頸部のヘラ描き平行沈線文が 2 条である。44 は壺の体部破片である。径 2 mm の刺突文を水平方向に 4 条以上巡らせる。底部には甕のもの 45・46 と壺のもの 47 などがある。45 は焼成後に穿孔を行い、甕として使用していたと推測される。

土器棺墓 290 出土土器 (49・50) (図 50、図版 16- 1) I 区で検出した土器棺墓 290 の棺身として用いられた広口壺である。肩部を欠くが一個体の土器である。中央がやや凹む平底の底部から胴部が大きく張り、頸部がすぼまって滑らかに外反して口縁部が開く。外傾する丸みを帯びた端面をもつ。口頸部界に 6 条以上、頸胴部界に 3 条のヘラ描き平行沈線文が巡らされる。

その他の遺構出土土器 (51 ~ 55) (図 51) 51 は I 区土坑 428 から出土した、器種が不明のものである。口径が 10.3 cm で、内傾する口縁部で、内面に粘土の帯が付加されて肥厚する。胎土はやや粗い。52 は III 区土坑 3279 から出土した広口壺の頸部とみられる破片である。外面には頂部に刻目を施す貼り付け突帯を巡らせ、内面にも貼り付け突帯状の粘土紐を巡らせている。内面のは蓋を受けるためのものと考えられる。53 ~ 55 は文様を施した壺の頸部あるいは体部の破片である。53 は I 区土坑 406 出土のもので、ヘラ描き平行沈線文、平行斜沈線文が施される。54 はヘラ描き平行沈線文と径 2 ~ 3 mm の竹管文列を組み合わせた文様である。55 はヘラ描き平行沈線文を上下に

土器棺墓290

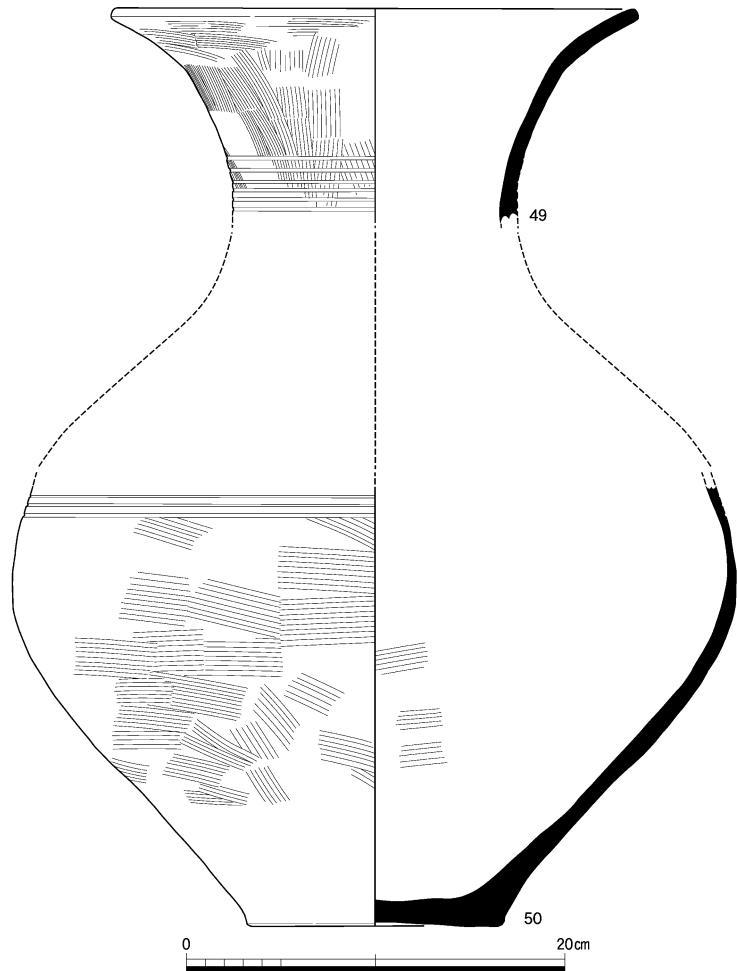


図 50 弥生時代前期出土土器実測図 4 (1 : 4)

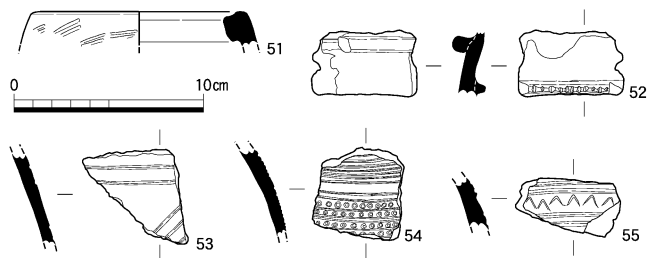


図 51 弥生時代前期出土土器実測図 5 (1 : 4)

施し、その間に倒立した「V」字形文を列状に配している。原体は三角形2個一組のスタンプ状の原体による施文であると思われる。

2) 石器類 (56～74) (図版 17)

石器には、石鏃、石錐、石庖丁、台石などがある。石鏃と石錐は二上山産出とみられるサヌカイト、石庖丁は頁岩を含む粘板岩、台石は砂岩質の石材を利用している。遺構や包含層から出土したものが大半であるが、石庖丁はすべて後世の遺構などから出土した。法量は特筆しない限り最大値を記し、重さは220 gを超えないものについては小数点第2位まで掲載している。

56～68は石鏃で、すべて無茎鏃である。基部が平らな57・66と未成品の可能性のある68以外は、凹基である。加工痕から見ると、石鏃の表裏面中央に当初の剥片剥離面を残して側縁を押圧剥離するものと、全面に押圧剥離などの加工を加えるものの2種に大別できる。57・63・64はI区土坑331、59はI区土坑664、60・61・65はI区竪穴住居580、66はI区竪穴住居415、67はIII区土坑3132、その他の石鏃は土坑や柱穴から出土した。56は側縁に押圧剥離を施し、最後に基部を調整する。裏面中央に当初の剥片剥離面が残存する。長さ1.9 cm、幅1.4 cm、厚さ0.3 cm、重さ0.70 gである。57は両側縁を鋸歯状の細かい押圧剥離を施す。表裏中央に当初の剥片剥離面が残存する。長さ2.4 cm、幅1.6 cm、厚さ0.4 cm、重さ1.19 gである。57は側縁と基部を押圧剥離し、表裏中央に剥片剥離面を残す。表面の状態から石材の打点が向かって右側にあったことがわかった。長さ2.2 cm、幅1.6 cm、厚さ0.5 cm、重さ1.49 gである。59は側縁すべてを細かく押圧剥離し、特に左側縁を鋸歯状に剥離する。長さ2.0 cm、幅1.4 cm、厚さ0.4 cm、重さ0.93 gである。60は全面剥離するが、風化が著しく不明瞭である。長さ2.0 cm、幅1.2 cm、厚さ0.3 cm、重さ0.56 gである。61は両側縁に細かい押圧剥離を加え、鋸歯状にする。表裏面中央に剥片剥離面が残存する。長さ2.6 cm、幅1.9 cm、厚さ0.4 cm、重さ1.48 gである。62は二等辺三角形を呈する。側縁と基部は押圧剥離で、裏面中央に素材剥片の剥離痕が残る。先端の欠損は使用時とみられる。長さ2.9 cm、幅2.0 cm、厚さ0.5 cm、重さ1.77 gである。63は全面を押圧剥離するが、裏面中央に剥片剥離面が残る。基部の調整は途中で行われている。長さ2.7 cm、幅1.7 cm、厚さ0.4 cm、重さ1.06 gである。64は側縁を押圧剥離し、表裏面中央に剥片剥離痕がある。基部調整は中途段階で行う。長さ2.9 cm、幅1.4 cm、厚さ0.4 cm、重さ1.17 gである。65は全面押圧剥離を施すが、裏面中央に剥片剥離面を残す。右脚は使用時の欠損とみられる。長さ2.6 cm、幅1.4 cm、厚さ0.4 cm、重さ1.17 gである。66は表面の側縁と基部のみを押圧剥離する。裏面は腹面で基部左側に打点があったとみられ、その部分に刃部に垂直に剥離痕がある。長さ2.6 cm、幅1.2 cm、厚さ0.3 cm、重さ0.92 gである。67は両面を押圧剥離するが、中央付近に剥片剥離面が残る。剥片の打点は左側である。長さ3.6 cm、幅2.1 cm、厚さ0.3 cm、重さ1.99 gである。68は表面をすべて押圧剥離する。裏面は側縁のみ押圧剥離するが、中央に自然面が残っている。基部調整は途中で行っている。形が歪み、大きな剥離痕を持ち、厚さが0.7 cmと分厚いことから、製作途中の未製品の可能性がある。長さ3.4 cm、幅2.3 cm、重さ3.30 gである。

69・70は石錐である。出土遺構はⅠ区土坑606である。69は表面の側縁と裏面の刃部を押圧剥離する。先端は使用時または製作時に折損したとみられる。上面に自然面が残る。長さ2.4cm、幅1.6cm、上部の厚さ0.6cm、錐部の厚さ0.4cm、重さ2.06gである。70は全面を粗く剥離する。上面と裏面に自然面が残る。先端は使用時または製作時に欠損したとみられる。微調整されていないので、未製品の可能性がある。長さ1.9cm、幅1.0cm、厚さ0.72cm、重さ1.49gである。

71～73は石庖丁である。整地1・2や長岡京期の溝から出土した。71は右側半分が欠損している。表面は研磨痕が確認できないが、非常に滑らかであることから使用痕とみられる。上側縁は割れ痕跡の中に所々研磨痕が残る。左側縁は古い割れ口である。刃部は片刃で、横方向の研磨痕があり、部分的に欠けて丸くなった部分がある。刃部の最大幅は0.3cmである。孔は2方向穿孔で、外側の径0.8cm以上、内側の径0.6cm以上。縦4.4cm、横8.1cm、厚さ0.7cm、重さ29.11gである。72は左半分が欠損している。表面は右上から左下への粗い研磨痕が全面で確認できる。刃部は横方向の細かい研磨痕の跡で、部分的に右上から左下への研磨痕が入る。孔のところは左上から右下への強い擦痕が認められる。裏面は非常に滑らかで、部分的に左上から右下への研磨痕がある。刃部は横方向の研磨である。上側縁及び右側縁は滑らかであるが、明確な研磨痕はない。孔の中心から右へ約3cm行った上側縁部は0.2cm程度の凹んでおり、また刃部でも同じような凹みがあり、使用痕とみられる。刃は両刃で、最大幅0.9cm。2方向穿孔で、外径0.7cm、内径0.6cmである。縦4.3cm、横10.1cm、厚さ0.7cm、重さ34.15gである。73は右の3分の2と、左側縁が一部欠損している。表面は横方向の研磨痕と、上下方向のものが数本強いのが入る。刃部は横方向の研磨痕がある。裏面は摂理で剥離しているようである。孔の横に穿孔途中とみられる円形の凹みが確認できる。上側縁は面から垂直に整形され、細かい研磨痕が確認できる。片刃で、2方向から穿孔されている。孔の外径0.97cm以上、内径0.49cm以上、縦3.6cm、横4.8cm、厚さ4.4cm、重さ10.49gである。

74は台石とみられる。Ⅲ区の土坑3140から出土した。角を丸く面取りし、裏面に整形時の粗いケズリ痕が残る。表面中央が平滑になっており、使用痕とみられる。長さ8.1cm、幅8.5cm、厚さ2.5cm、重さ236gである。

(4) 縄文時代晩期の遺物

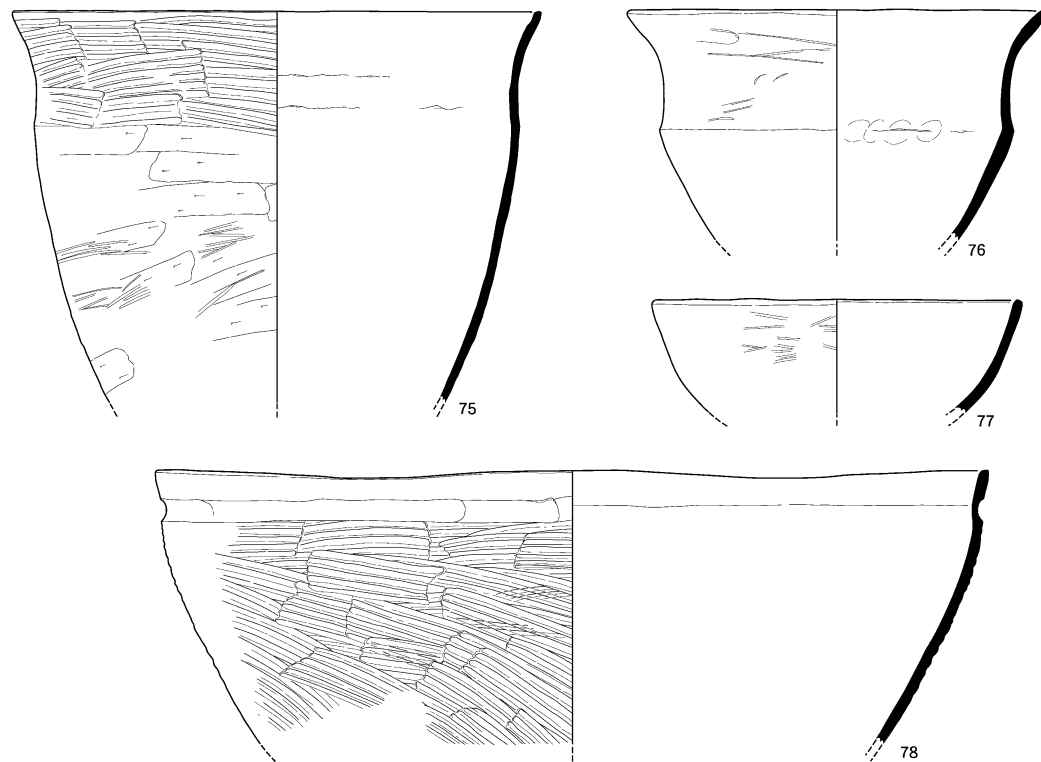
1) 土器類

土坑などから出土する土器の個体数は多くなかったが、流路状遺構1155・3274からは时期的にまとまった遺物が大量に出土した。深鉢や浅鉢胴部片が目立ち、細片になっているものが大半である。時期は縄文時代晩期前半の滋賀里Ⅲa式新段階から篠原式古段階に相当する。今回の報告では、主要遺構の大まかな様相が捉えられると考えた土器を中心に、復元実測が可能なものを抜き出して掲載した。

土坑848出土土器(75～80)(図52、図版18-1)床面とみられる土坑底や埋土から出土した。75は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部で少し内湾する深鉢である。口縁部外面の調整は二枚貝

条痕、胴部はケズリのち一部ミガキである。ミガキは2～3mmの棒状工具を使用している。調整方向は右から左で、胴部下半のケズリとミガキは右上から左下に向かっていた。内面はナデ調整で、口縁端部に指一本分の強い横ナデを施す。口縁部内面に粘土紐接合痕が確認できる。口径は27.8cm、外面色調はにぶい黄褐色(10YR4/3)と黄褐色(2.5Y5/3)、内面色調は黒褐色(2.5Y3/1)である。胎土は径2～3mmの花崗岩と径1mm以下の長石・石英・チャート・角閃石を多量に含む。76は逆「く」字に屈曲した肩部から、大きく外反口縁を持つ深鉢である。口縁端部付近が肥圧する。外面は何らかの工具によってナデ調整が行われているが、その他は磨滅が著しく不明である。外面肩部付近にふきこぼれ痕とみられる付着が付く。口径は21.8cmである。外面色調はオリーブ褐色(2.5Y4/3)、内面は黒色(10YR2/1)を呈する。胎土は径4mmの石英・チャートを少量と、径2mm以下の石英・長石・チャート・角閃石・赤色粒を多量に含む。いわゆる生駒西麓産の胎土とみられる。77は碗形の浅鉢である。外面は丁寧なミガキ、内面はナデで、口縁端部を丁寧に面取りする。口径は19.0cmである。外面はオリーブ褐色(2.5Y3/3)、内面は灰黄褐色(10YR6/2)

土坑848



土坑1033

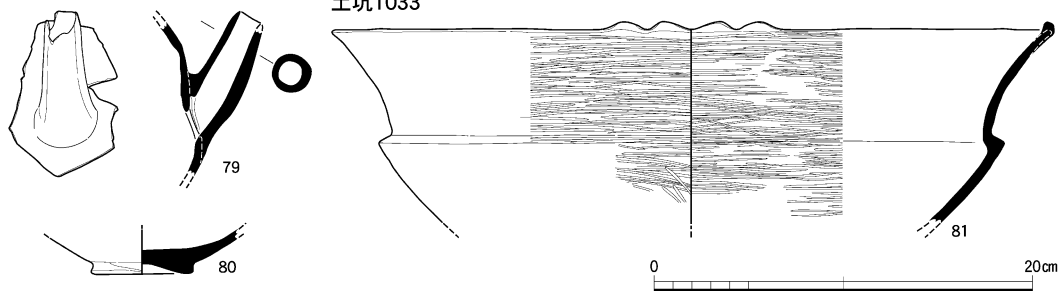


図52 縄文時代晩期出土土器実測図1 (1:4)

の色調を呈する。胎土は径2mm以下の石英・チャートを含む。78は大型の浅鉢である。口縁は緩やかな波状口縁で、4単位になるとみられる。外面口縁から内面はナデ、頸部を横ナデ、胴部を二枚貝条痕で調整する。調整方向は右から左である。口径は43.7cmである。外面色調は灰黄褐色(10YR4/2)、内面はにぶい黄色(2.5Y6/3)で、胎土は径2mm以下の石英・長石・チャート・角閃石・赤色粒を多量に含んでいる。79は注口土器の注口部である。全体の器形は胴部下半で内屈する土瓶形になるとみられる。この胴部下半の屈曲上に径1.9cmの孔を開け、その部分に最大径2.5cmの注口を貼りつける。注口内側の最大径は1.4cmであった。器厚は一定ではない。調整は磨滅が著しく、ナデとみられるが不明瞭である。口縁端部は丁寧に丸く調整する。色調は明黄褐色(10YR6/6)、胎土は径1~2mmの石英・チャートを多く含む。80は小型深鉢または浅鉢の底部とみられる。全面を丁寧になでる。凹底で、外面を強くなでて、胴部との境目を明瞭にする。底径4.9cmである。外面はにぶい黄橙色(10YR7/4)、内面は灰白色(2.5Y8/2)の色調を呈する。胎土は径2mm以下の石英・長石・チャートを多量に含む。

土坑1033出土土器(81)(図52) 破片が土坑内全体に散らばっていた。すべての破片は接合しないが、同一個体と考えられる。肩部が逆「く」字に屈曲し、そこから大きく外反する口縁部を持つ黒色磨研系の系譜を引く浅鉢である。底部は丸底になるとみられる。口縁端部に山形の突起が連続して3個付くが、3個1組であるのか、4個1組になるのか不明で、また口縁の何箇所に付くのかも明らかではない。突起の断面は隅丸台形である。全面をミガキ調整し、内面胴部の屈曲部や外面の屈曲部の丁寧になでたのち磨く。口径は37.8cmである。外面色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)、内面は黒色(2.5Y2/1)を呈する。胎土は径0.05mm以下の石英・長石・チャートを多く含んでいるが、精良である。

流路状遺構1155出土土器(82~100)(図53~55、図版20・21) 遺構中層から下層付近で出土した。82は波状口縁深鉢である。波頂は4単位とみられる。口縁部は頸部から内湾しながら、外側に開きつつ立ち上がる。胴部は張らない。口縁端部に刻み目を施す。平面観はD字に近いが断面はU字形で、いわゆる「D字」刻みではない。波頂部に他の刻みより少し大きな刻みを付ける。口縁部外面は二枚貝条痕で、口縁端部まで調整したのち刻み目を入れている。頸部には横ナデ、胴部は右から左方向のケズリ、内面は全面ナデである。口縁内面に刻み目の影響による凹凸が認められ、外側から内側にむかって刻まれたことがわかる。口径は30.8cmである。外面はにぶい黄橙色(10YR6/3)、内面は黒色(10YR2/1)を呈する。径2mm以下の石英・長石・チャートを多量に含むが精良な胎土を持つ。83は波状口縁深鉢で、2単位の波頂部を持つとみられる。丸く張った胴部に、頸部で逆「く」字に屈曲する口縁部が付く。口縁部外面に二枚貝条痕を施し、頸部を強くなでる。胴部外面はケズリとみられるが、磨滅が著しい。内面はナデである。口径は波頂部で約26cm、残存している低い部分で23.6cmである。外面色調は灰黄褐色(10YR5/2)、内面は黄灰色(2.5Y4/1)で、胎土は径1mm以下の石英を少量、チャートを多量に含む。84は平口縁の深鉢である。張った胴部が頸部で屈曲し、口縁が外反する。口縁外面を二枚貝条痕、頸部を横方向とみられるナデ、胴部を右下から左上へのケズリ、内面は一部工具痕の残るナデ調整を行う。

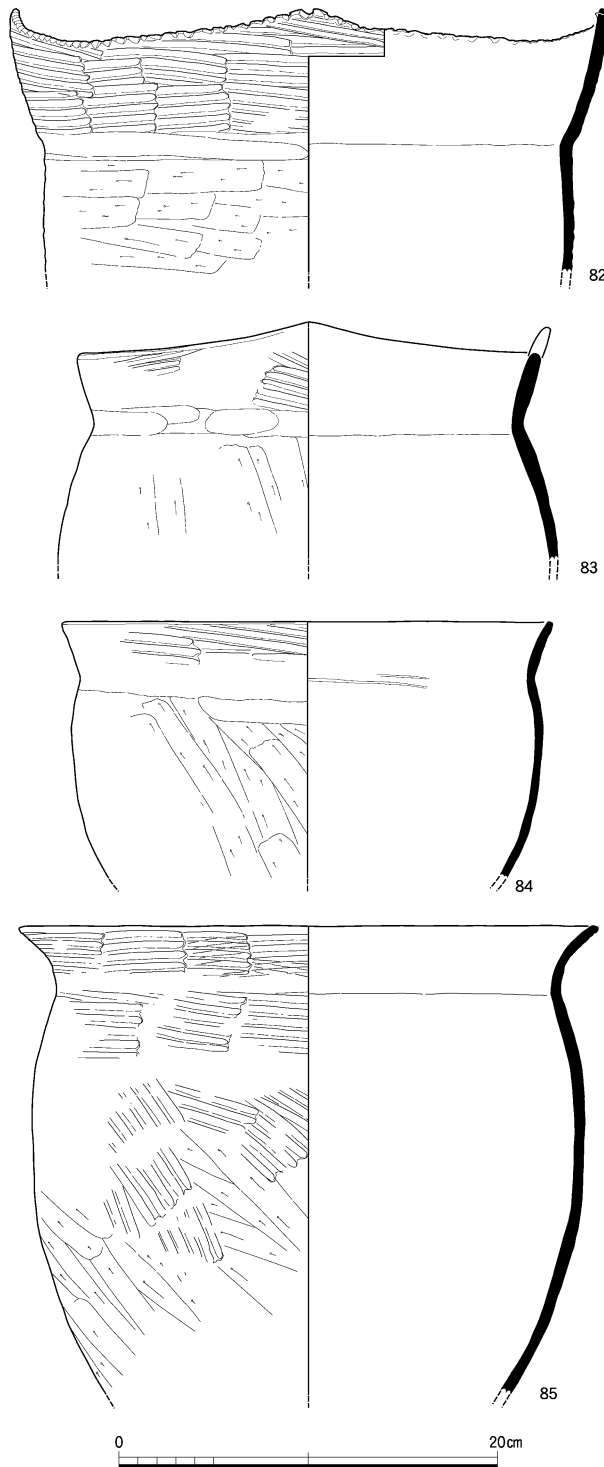


図 53 縄文時代晩期出土土器実測図 2 (1 : 4)

口径は 25.4 cm である。外面はにぶい黄橙色 (10YR6/3)、内面は黒褐色 (2.5Y3/2) を呈する。胎土は径 1 mm 以下の石英・長石・チャートを多く含む。胴部外面に煤が付着している。85 は張った胴部が頸部で屈曲し、強く外反する口縁部を持つ深鉢である。口縁外面と頸部直下付近を右から左への二枚貝条痕を施し、頸部をなでて条痕を消す。胴部は右下から左上へのケズリを行ったのち、胴部上部を二枚貝でなでたような痕跡が認められた。口径は 30.0 cm である。色調は内外ともににぶい黄橙色 (10YR6/4 ~ 7/4) を呈する。胎土は径 3 mm のチャートが少量と、径 1 mm 以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多量に含む。86 は突起の付く平口縁深鉢である。突起は口縁外面から粘土を貼り付け、端部上に山状の盛り上がりを作りだす。3 個 1 組とみられる。口縁部外面をなでるが、胴部ケズリの際の工具痕が口縁部にも付いている。胴部は右から左、右下から左上へのケズリ調整を施す。胴部内面の一部に幅広の横ナデ痕跡が認められる。口径は 32.4 cm である。色調は灰黄褐色 (10YR6/2) で、口縁内面のみ黒色 (10YR1.7/1) を呈する。径 1 mm 以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多量に含む胎土である。87 は深鉢である。丸い胴部から大きく外反する口縁が付く。口縁端部に台形の突起があり、上辺が凹

む。口縁外面上部は工具によってナデまたはケズリを施し、下部から肩部までは横ナデ、胴部はケズリ調整である。ケズリの方向は下から上である。口径は 30.3 cm である。外面色調は灰黄褐色 (10YR6/2)、内面は黒色 (2.5Y2/1) である。径 1 mm 以下の石英・長石・チャートを多く含む胎土である。88 は胴部が張って、口縁が強く外反する深鉢である。口縁部外面を横方向になでており、その単位幅が明瞭に残る。肩部には右から左へのケズリ調整が認められる。内面はナデであ

るが、何らかの工具による痕跡がある。口径は 36.2 cm である。色調はにぶい黄橙色 (10 YR7/2) で、内面の一部が黒色 (2.5Y2/1) 化している。胎土は径 3 mm 以下の石英を少量、径 1 mm 以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多量に含む。89 は頸部が緩く屈曲し、短い口縁部が立ち上がる深鉢である。口縁部外面はナデ、頸部に強い横ナデが入り、胴部には基本的に下から上へのケズリを施す。肩部には右から左へのケズリがある。口径は 32.0 cm である。外面色調は浅黄色 (2.5Y7/3)、内面は黒色 (5Y2/1) である。胎土は径 4 ~ 7 mm のチャートを少量、径 2 mm 以下のチャート・石英を多量に含む。90 は砲弾形の深鉢である。口縁端部をなでるが、粘土接合痕が所々に残る。胴部上部は右から左へのケズリ、下部は下から上へのケズリである。ただし、ほとんど砂粒の動きが認められない。内面は工具によってナデ調整を施したとみられる。口径は 24.8 cm である。外面色調は灰黄褐色 (10YR4/2)、内面は暗灰黄色 (2.5Y5/2) を呈する。胎土は径 1 mm 以下の石英・チャートを多く含む。91 は口縁部に突起が付く砲弾形の深鉢であ

流路状遺構1155

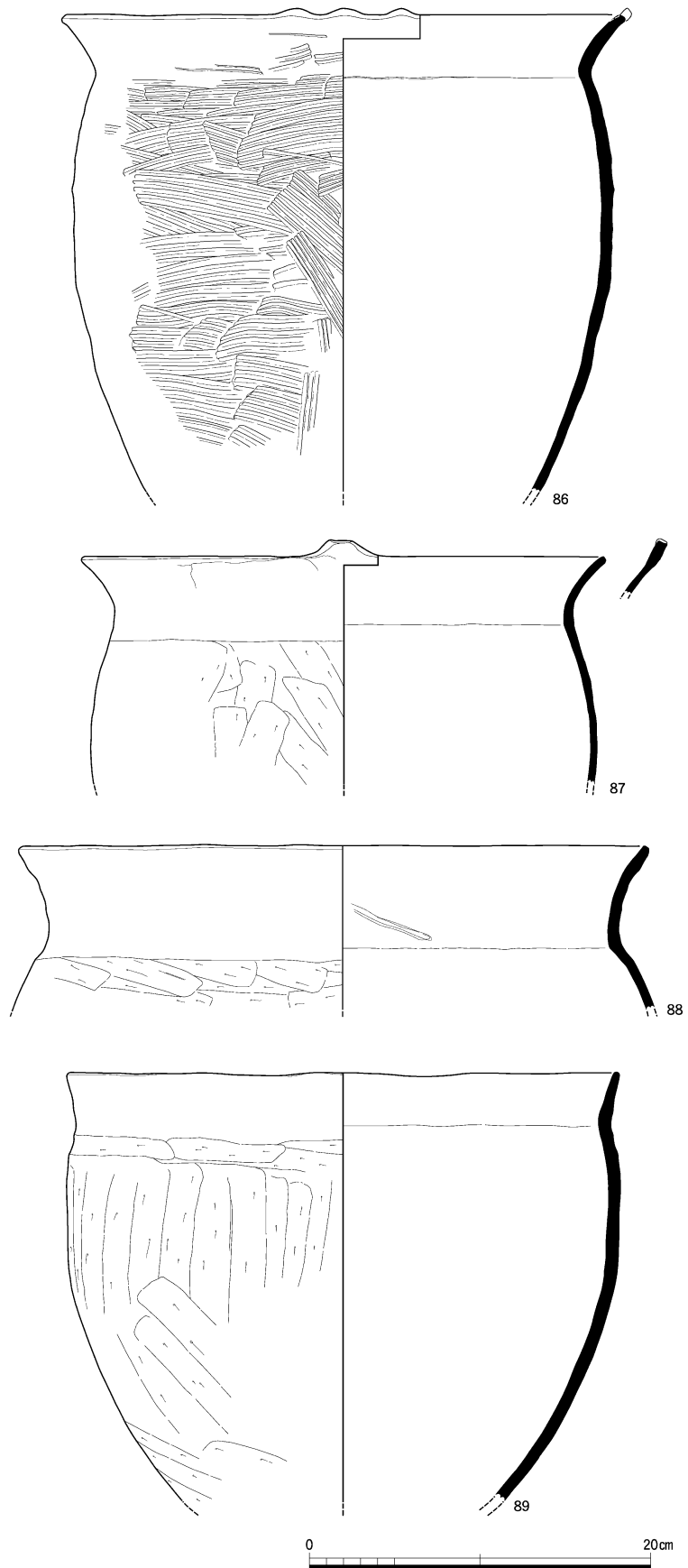


図 54 縄文時代晩期出土土器実測図 3 (1 : 4)

る。口縁が内湾する。突起は台形で、頂点に刻み状の凹みがある。全面を丁寧にミガキ調整する。口径は 16.3 cm である。色調は外面がにぶい黄橙色 (10YR7/3)、内面が黒色 (5Y2/1) である。径 1 mm 以下の石英・長石・チャートを多く含む精良な胎土である。92 は肩部が逆「く」字に屈曲し、そこから頸部がさらに括れ、口縁部は強く外反する器形の浅鉢である。口縁端部は丁寧に面取りする。全面を丁寧に磨くが、頸部にナデの痕跡が残る。口径は 33.7 cm である。色調は外面がにぶい黄橙色 (10YR6/3)、口縁部外面から内面が黒色 (10YR2/1) である。胎土は精良で、径 1 mm 以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多量に含む。93 は肩部で屈曲し、外反する短い口縁部が付く浅鉢である。全面をミガキ調整するが、胴部外面が磨滅して不明瞭になっている。口縁端部を丁寧に面取りする。口径は 28.4 cm、色調は灰黄褐色 (10YR5/2) である。径 1 mm 以下の

流路状遺構1155

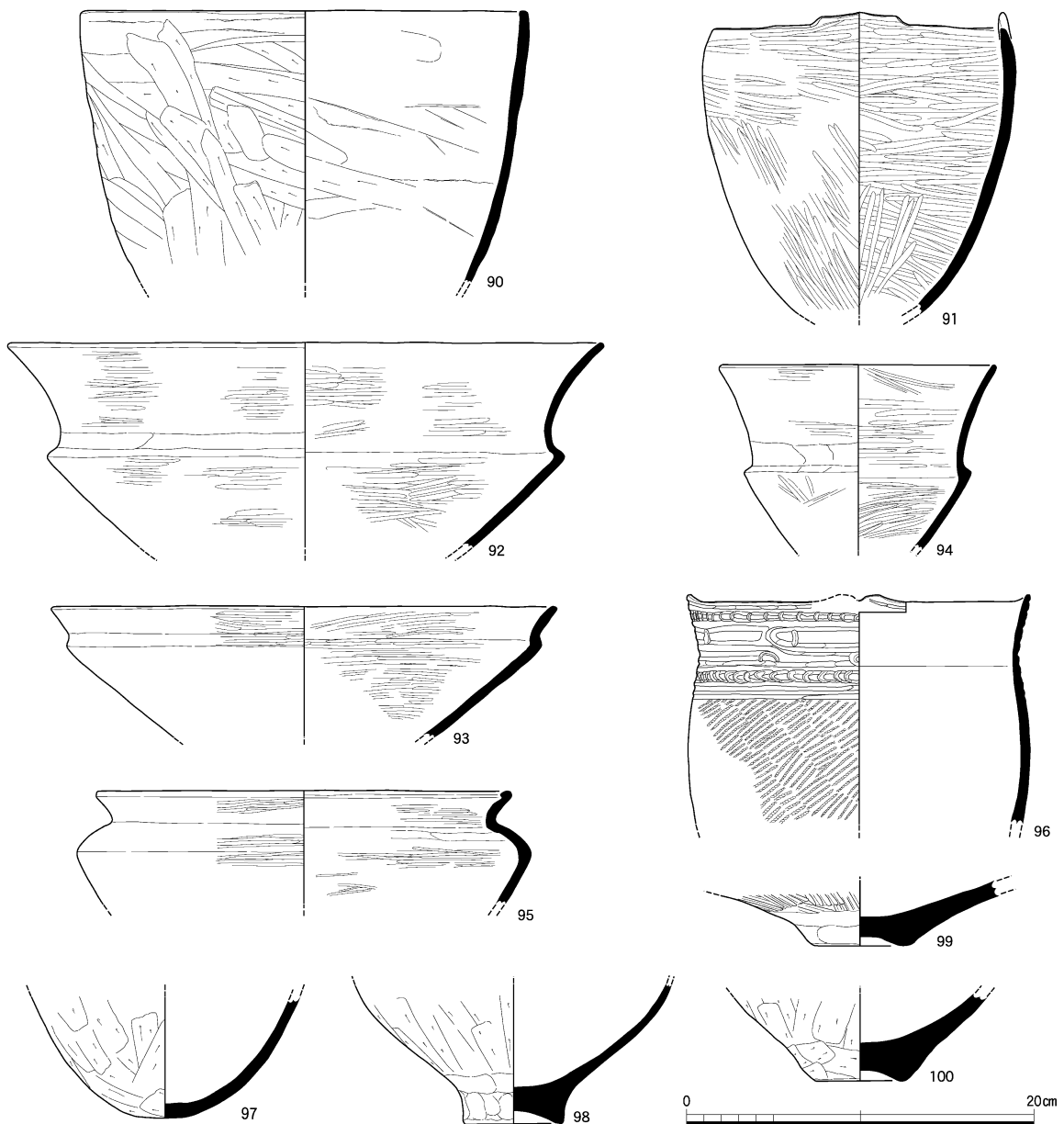


図 55 縄文時代晩期出土土器実測図 4 (1 : 4)

石英・チャート・赤色粒を多く含む精良な胎土である。94は逆「く」字に屈曲した肩部に、外反する口縁がつく浅鉢である。口径が15.7 cmと小さい。頸部は横ナデを施し、それ以外を丁寧にみがく。外面色調は灰黄褐色(10YR6/2)と褐灰色(10YR5/1)、内面は黒色(2.5Y2/1)である。胎土は径0.5 mm以下の石英・長石・チャート・雲母を多量含む。95は胴部が逆「く」字に屈曲し、頸部で窄まり、短い口縁が外反する壺形浅鉢である。口縁端部を面取りし、内面に沈線状の段を施す。全面を横方向にミガキ調整する。内面肩部に横方向のナデが確認できる。口径は23.6 cmである。外面は黄灰色(2.5Y5/1)、内面はにぶい黄橙色(10YR7/3)と部分的に黒色(2.5Y2/1)の色調を呈する。胎土は径1 mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多量に含むが、精良である。96は東日本系の深鉢である。口縁部に山形の突起が付くが、半分が欠損しているため正確な形は不明である。少し張った胴部に、少し外反する口縁が立ち上がる。口縁部から肩部にかけて、半截竹管状工具による押し引き文と、竹管状工具による沈線文を施している。口縁端部直下から沈線、半截竹管状工具による左から右への押し引き文、横長楕円に半円形やL字形の沈線を引いた文様、押し引き文、2本の平行沈線という順番に文様が施文されている。胴部はRL縄文で、撚り幅0.15～0.25 cm、粒の厚さ0.15 cmであった。内面はナデで、口縁端部のみミガキを行う。口径は19.4 cmである。外面色調は灰黄褐色(10YR5/2)からにぶい褐色(7.5YR5/4)、内面は黒褐色(10YR3/1)である。胎土は径1 mm以下の石英・長石・チャート・角閃石・赤色粒を多く含む。97～100は深鉢の底部である。97は丸底で、90や91のような砲弾形の深鉢底部になるとみられる。外面は下から上へのナデに近いケズリで、内面はナデである。外面は一部にぶい橙色(7.5YR6/4)を呈するが灰黄褐色(10YR6/2)で、内面は灰黄色(2.5Y7/2)で一部黒色(5Y2/1)である。径4 mmのチャートを少量含み、径1 mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多量に含む胎土である。98は凹底で、接地面からほぼまっすぐに立ちあがってから、大きく張り出す胴部につながる。外面を下から上に向かってケズリ、立ち上がる部分に横ナデを施し、接地面近くは指オサエで整形する。内面と凹んだ部分の調整は不明である。底径は5.6 cm、色調は外面で灰黄褐色(10YR5/2)、所々橙色(7.5YR6/6)、内面で褐灰色(10YR4/1)である。胎土は径4 mmの石英・チャートを少量、径2 mm以下の石英・長石・チャート・雲母を多量に含む。99は底径5.0 cmの凹底である。接地面近くの外面を横にナデ、胴部下半に二枚貝条痕を施す。内面はナデである。外面色調は明黄橙色(10YR6/6)、内面は灰黄褐色(10YR6/2)を呈する。径4 mmのチャートを少量、径1 mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多く含む。100は接地面からラッパ状に近い形で開く底部である。外面下部を左から右、上部を下から上へ削る。内面と凹み部分はナデである。底径は5.1 cm、外面色調はにぶい黄橙色(10YR7/3)、内面は暗灰色(N/3/)である。径2～4 mmのチャート・赤色粒、径1 mm以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多量に含む胎土である。

流路状遺構 3274 (101～119) (図56・57、図版18-2・19) 埋土によって上層(101～109)と下層・最下層(110～119)にわけて、取り上げを行った。101は口縁部が外反する深鉢である。口縁部外面から内面はナデ、頸部を横方向のナデ、胴部上半を右から左へ、下半を下から上へ二枚貝条痕を施す。内面の肩部に指頭圧痕が残る。口径は14.8 cmである。外面色調は

浅黄色 (2.5Y7/4) で部分的に黄褐色 (2.5Y4/1)、内面は灰色 (5Y5/1) である。胎土は径 2 mm の石英・長石・チャート・橙色粒を多量に含む。102 は 14.7 cm の深鉢である。胴部は強く張らず、頸部から口縁部が外反する。磨滅が著しいため、調整が不明瞭であるが、口縁部はナデ、頸部を意識的に横ナデ、胴部を二枚貝で調整している。口縁部内面は二枚貝条痕のあとで、なでている。外面はにぶい黄橙色 (10YR6/3)、内面はにぶい黄橙色 (10YR7/4) の色調を呈する。胎土は径 3 mm の赤色粒を少量、径 1 mm 以下の石英・長石・チャートを多量に含む。103 は張った胴部に、外反する短い口縁部が付く深鉢である。外面は二枚貝を使用してケズリ調整を行い、頸部を横ナデする。内面は磨滅しているが、ナデ調整しているようである。口径は 33.6 cm、色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) である。胎土は径 2 mm 以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多量に含む。104 は器形では胴部との境目がなく、口縁部が少し外反する深鉢である。口縁部外面の右から左へ二枚貝条痕を施し、胴部とみられる部分より下は下から上への二枚貝使用によるナデを行う。口縁端部外面は二枚貝を強く当てたために、粘土が外側へ張り出している。端部は面取りし、内面をなでる。口径は 23.1 cm である。外面色調はにぶい黄橙色 (10YR6/3)、外面の一部と内面は黒色 (2.5Y2/1) である。胎土は径 2 mm 以下の石英・長石・チャートを少量含む。105 は波頂部が 4 単位の深鉢口縁部である。全面をナデ調整する。外面に指跡が残る。口縁端部は面取り

流路状遺構3274上層



図 56 縄文時代晩期出土土器実測図 5 (1 : 4)

している。波頂部の口径 16.4 cm である。色調はにぶい黄褐色 (10YR5/3)、胎土は径 2 mm の石英と、径 1 mm 以下の石英・長石・チャートを多く含む。106・107 は黒色磨研系浅鉢の口縁部である。内外面を丁寧な横方向のミガキで調整する。106 は強く外反する口縁が端部で立ちあがる。口径は 32.4 cm、外面色調は灰黄褐色 (10YR6/2)、内面は黒褐色である。胎土は径 2 mm 以下のチャート、径 1 mm 以下の石英・長石を少量含む。107 は 106 の口縁端部の立ち上がりがまっすぐで、短く、断面かまぼこ形になっている。口径は 40.4 cm である。外面は褐灰色 (10YR4/1)、内面は黒色 (2.5Y2/1) を呈する。胎土は径 1 mm 以下の石英・長石を多く含む。108 は凹底で、深鉢の底部になるとみられる。接地面近くの外面に指跡が残るが、それ以外は磨滅が著しいため不明である。器形は底面から緩やかに立ち上がる。底径は 4.0 cm である。外面はにぶい褐色 (7.5YR5/4)、内面はにぶい黄褐色 (10YR4/3) の色調を呈する。胎土は径 5 mm 以下のチャートを多く含み、径 5 mm 以下の石英・長石・赤色粒を少量含む。109 は底面から直線的に外反する平底である。外面調整は二枚貝条痕で、内面は不明である。底径は 3.8 cm、外面色調は褐色 (10YR4/4)、内面は褐色 (7.5YR4/4) を呈する。胎土は径 3～5 mm のチャート・角閃石を少量に、径 1 mm 以下の石英・チャート・角閃石を多量に含む。

110 は張った胴部が頸部で屈曲し、短い外反する口縁部が付く深鉢である。胴部は棒状工具による条痕調整を行い、口縁部外面は工具によってなでたのち指でなで、頸部を横方向になでている。内面は磨滅しているが、ナデ調整とみられる。口径は 15.6 cm である。外面の色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3)、内面は浅黄色 (2.5Y7/4) を呈する。胎土は径 3 mm 以下の長石・チャートを多く含み、同じ大きさの石英・赤色粒を少量含む。111 は張った胴部に外反する口縁部が立ち上がる深鉢である。外面全面に右から左への二枚貝条痕をほどこし、頸部を板のような工具で横方向になでる。内面はナデである。口径は 33.8 cm であり、色調は外面でにぶい黄橙色 (10YR7/3)、内面で黒褐色 (2.5Y3/1) である。胎土は径 4.5 cm 以下のチャートを少量、径 2 mm 以下の石英・長石・チャート・赤色粒を多量に含む。112 は頸部で屈曲し、口縁が強く外反する深鉢である。口縁部外面は左から右への二枚貝条痕、胴部外面は同方向のケズリ、口縁部内面は横ナデ、胴部内面は二枚貝による右から左へのナデである。口径は 24.2 cm である。色調は外面にぶい黄褐色 (10YR6/3)、内面灰黄褐色 (10YR6/2) で口縁の一部が 5Y4/1 灰色に変色している。胎土は径 4 mm のチャートが少量、径 1 mm 以下の石英・長石・チャートが多量に含まれる。113 の深鉢は頸部の屈曲が弱い、口縁端部に向かって強く外反する。口縁部外面に横方向の二枚貝条痕を施す。胴部外面は右から左へのケズリ後に、棒状または繊維状工具によるミガキを密に施している。内面はナデとみられる。口径は 28.9 cm である。外面色調はにぶい黄橙色 (10YR7/3) と橙色 (5YR6/6)、内面はにぶい黄橙色 (10YR7/3) である。胎土は径 2 mm 以下の石英・長石と径 1～9 mm のチャート・褐色粒を多量に含む。114 は砲弾形の深鉢である。口縁付近で緩やかに内湾する。外面は下から上、右から左へのケズリで、内面はナデ、口縁端部はナデによる面取りを行う。口径は 19.7 cm で、色調は黒色 (5Y2/1) である。胎土は径 2 mm 以下の石英・チャートを多く含む。115 はビール樽形に似た深鉢で、頸部に段を持つ。磨滅が著しいため、調整は不明である。口径は 13.1 cm である。

流路状遺構3274下層・最下層

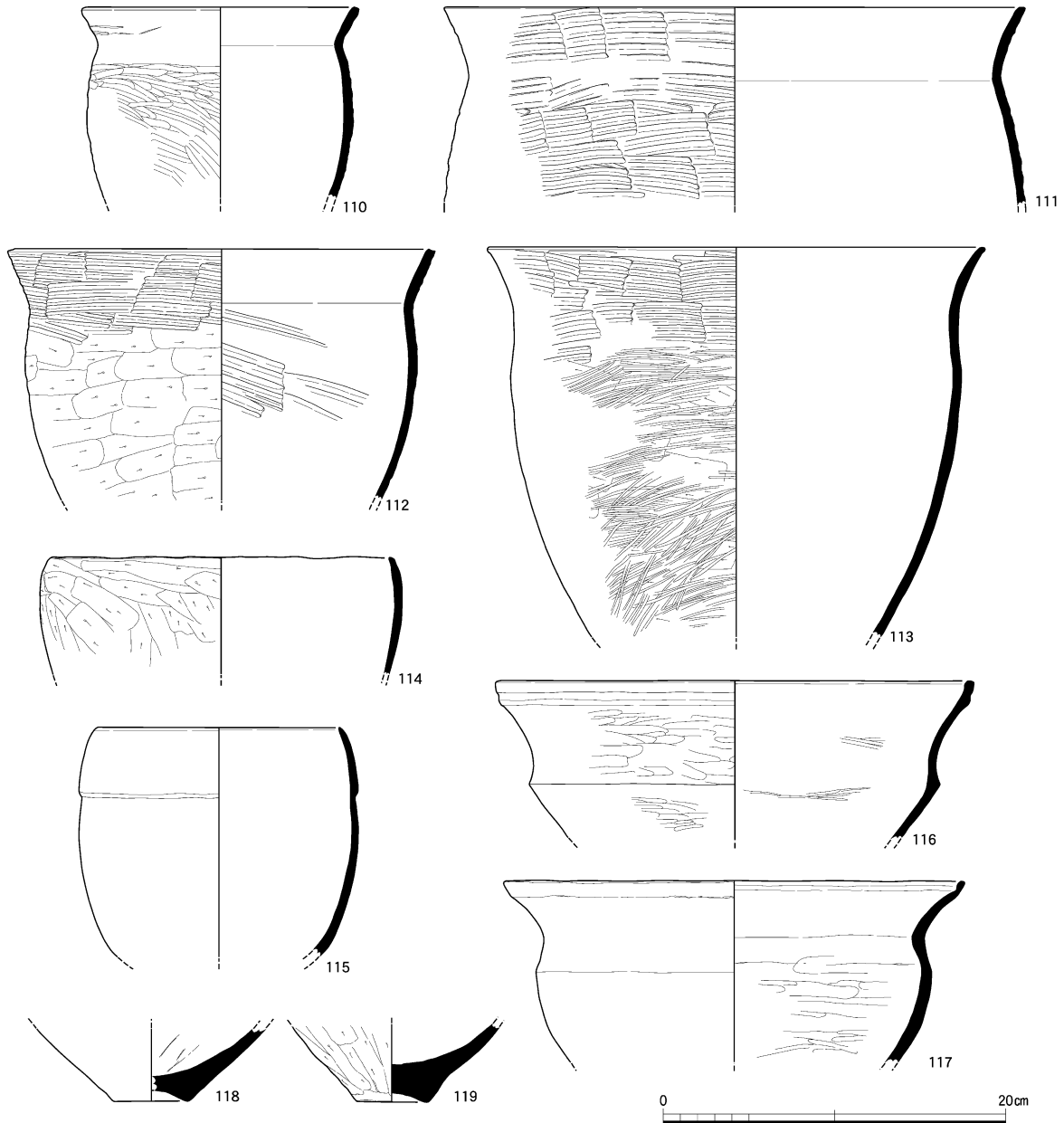


図 57 縄文時代晩期出土土器実測図6 (1:4)

外面色調はにぶい黄橙色 (10YR7/4)、内面は橙色 (7.5YR7/6) である。径1～3mmのチャート・赤色粒を多量、径1～3mmの石英・長石を少量含む胎土である。116は肩部で逆「く」字に屈曲し、頸部から外反して口縁端部でまっすぐに立ち上がる器形を呈する浅鉢である。内外面を丁寧にみがく。口縁端部外面に沈線が入る。口径は27.6cm。色調は外面が黄灰色 (2.5Y4/1)、内面が黒褐色 (2.5Y3/1) である。胎土には径2～3mmの石英・チャートが少量、径1mm以下の石英・チャートが多量に含まれる。117は丸い胴部が肩部から頸部に向かって窄まり、頸部から外反して口縁端部で立ち上がる浅鉢である。口縁部内面に沈線を引く。内面を指のような幅広のものでみがく。その他は不明である。口径は26.4cm、外面色調は暗灰黄色 (2.5Y5/2)、内面色調は黄灰色 (2.5Y4/1) である。胎土は径2～3mmの石英・長石・チャートを少量、径1mm以下の石英・

長石・チャート・赤色粒を多量に含む。118・119は底面からほぼ直線的に広がる器形の凹底である。11)は内面を板状工具でなでるが、その他は磨滅して不明である。底径4.3cm、外面色調はにぶい褐色(7.5YR5/4)、内面色調はにぶい黄褐色(10YR5/3)を呈する。径3mmのチャートが少量、径1mm以下の石英・長石・チャートを多量に含む胎土である。119は外面を下から上に向かってけずる。底径は4.0cmである。外面色調はにぶい橙色(7.5YR7/3)、内面色調は褐灰色(10YR5/1)を呈する。径4mmの石英・長石・チャートが少量、径1mm以下の石英・長石・チャート・雲母を多量に含む。

土製品(120～122)(図58、図版22-1)土製品には有孔球状土製品と半輪状土製品がある。

有孔球状土製品(120)は直径6.8～7.1cmの球状で、中央に径1cmの孔が貫通している。この孔にほぼ直交して、幅0.35～0.5cm、深さ約0.1cmの沈線が引かれている。この沈線は真っ直ぐではなく、わずかに右上がりである。全体をミガキに近いナデで調整している。孔内面の中央付近に粘土の接合痕が確認できる。色調はにぶい黄橙色(10YR6/4)～黄灰色(2.5Y6/1)、胎土は径2mm以下のチャート・石英・雲母を多量に含む。重さは334gである。Ⅲ区東の土坑3266上層から出土した。類例は奈良県大和高田市の西坊城遺跡にあるが、沈線が施文されていないものである。

半輪状土製品(121・122)は直径約2cmの粘土紐で半分の輪を作り、先端に近い部分に孔を開けたものである。121は縦10.6cm、横6.0cm、直径2.1cmで、両端に開けられた孔の径は0.3～0.4cmである。重さは69.31g。孔は縦方向に開けられているが、同じ方向の孔がより先端部に近い方にもう一つ開けられ、また上部の先端にのみこの孔に直交する孔があけられていた。後者2つは何れも貫通していない。開け損じとみられる。122は縦10.7cm、横5.9cm、直径1.9～2.1cmである。両端に開けられた孔の径は0.3～0.4cmである。重さは73.34gである。121・122の色調はにぶい黄褐色(10YR7/3)で、122の一部が黄灰色(2.5Y5/1)を呈する。胎土は径2mm以下のチャート・赤色粒を多量、径1mm以下の石英を少量含む。調整はミガキに近いナデである。流路状遺構1155西端から、図に示した輪の状態出土した。このことから、2つは両端の孔に

それぞれ紐を通して互いに結び合わせて使用されていたと考えられ、腕輪や脚輪といった輪状の装飾品であったとみられる。この土製品と同じものが、掲載したものの上層から1組半(半輪で3個)出土している。奈良県橿原市の橿原遺跡や滋賀県大津市滋賀里遺跡などの集落遺跡から、同形態のものが出土している。

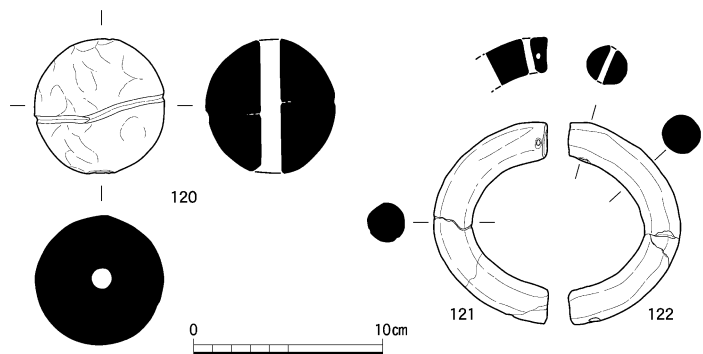


図58 縄文時代晩期出土土製品実測図(1:4)

2) 石器類 (123～186) (図版 22- 2～25)

縄文時代の石器には、生産具として石鏃、石錐、削器、石錘、石斧、磨石、凹石、敲石、石皿、台石など、祭祀用具として石刀、石棒など、装飾品の翡翠製玉などの製品の他に、石核、剥片などの素材や製作途中の未製品、土坑 3266 で大量に出土した石器製作時に廃棄された微細剥片(チップ) などがある。使用石材は、石鏃・石錐・削器などが二上山または四国の金山から産出するサヌカイト、石錘は堆積岩、石斧は泥岩や砂岩、磨石・凹石・敲石・石皿・台石は砂岩や砂岩質の岩石、石刀は頁岩を含む粘板岩、石棒は緑泥片岩や凝灰岩、玉は翡翠である。その他に、肉眼観察では大分県姫島産とみられる黒曜石剥片や、青色チャートの剥片も出土している。縄文時代の遺構や包含層から多量に出土しているが、調査区東半の遺構面上部が削平されている状態が示すように後世の遺構や包含層に混入していたものも少なくない。法量の記載方法は弥生時代の石器と同様である。

123～147 は石鏃である。146 は中茎のある凸基有茎鏃、147 は尖基鏃で、それ以外は無茎鏃である。無茎鏃には基部形態が凹基 (123～144) と平基 (145) がある。無茎鏃の形態には、正三角形に近く長さとの比率がほぼ同じくらいのもの (123～126・145)、幅が長さの倍近くある二等辺三角形のもの (127・129～133)、二等辺三角形に近いが基部両端を切断したもの (135～137)、脚部が長いもの (138～142)、いわゆる五角形鏃 (143)、側縁中央を凹ませてイカに似た形を呈するもの (144) のおおまかに 6 種類に分類することができる。全面押圧剥離のものと、側縁部にのみ押圧剥離を施し、中央部に素材剥片の剥離面を残すものがあるが、弥生時代の石器とは異なり、全面加工を施すものが大半である。基部は最後に作りだされており、有茎・無茎の作り方に差異は無いとみられる。石鏃に使用されているサヌカイトを肉眼で観察したところ、二上山産とみられるものが半分以上を占め、その他が金山産とみられる。出土遺構は、123～128・131・132・137・139～142・144・145 が I 区流路状遺構 1155、130・134・136・143 が III 区流路状遺構 3263、135・146 が III 区流路状遺構 3274、その他は柱穴や包含層である。123 は表面の側縁にのみ押圧剥離を加える。表面は石核の外面にあたり、裏は背面である。長さ 1.3 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.2 cm、重さ 0.27 g である。124 は全面押圧剥離を施す。長さ 1.6 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 0.48 g である。125 は表面 (主要剥離面) がすべて押圧剥離であるが、裏面は側縁のみ押圧剥離で、中央に素材剥片の剥離面を残す。脚部の形状は非対照である。長さ 1.9 cm、幅 1.5 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 0.83 g である。126 は平基に近い凹基である。全面を押圧剥離する。長さ 1.8 cm、幅 1.4 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 0.80 g である。127 は全面押圧剥離を施し、長さ 2.2 cm、幅 1.4 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 0.92 g である。128 は全面を押圧剥離する。側縁形態は弧を描く。側縁は鋸歯状に出入りがある剥離痕である。長さ 2.4 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 1.41 g である。129 は全面押圧剥離、脚部は非対照。長さ 2.4 cm、幅 1.8 cm、厚さ 0.5 cm、重さ 1.53 g である。130 は全面を押圧剥離する。表面の基部直上に、左上から右下への細かい筋状の擦痕が確認できる。裏面にはなく、製品になってから付いたとみられるが、使用痕であるかは不明である。長さ 2.8 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 1.15 g である。131 は側縁に細かい押圧剥離を

加える。裏面中央には当初の剥離痕が残る。長さ 2.9 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 1.40 g である。132 は全面を押圧剥離する。形態は歪で、左脚部は尖り、右脚部は丸い。長さ 2.2 cm、幅 1.2 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 0.73 g である。133 は全面押圧剥離で、裏面中央に当初の剥離痕が残存する。基部はハート形に丸く整形されている。風化が著しい。長さ 2.3 cm、幅 1.3 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 0.89 g である。134 は全面押圧剥離で、基部がハート形である。長さ 2.1 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.7 cm、重さ 1.20 g である。135 は全面に押圧剥離を施す。側縁を鋸歯状に加工する。長さ 2.4 cm、幅 1.5 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 0.87 g である。136 は凹基としたが、平基の可能性もある。両側縁中央部を凹ませるため、形態がロケット形を呈する。長さ 2.9 cm、幅 1.5 cm、厚さ 0.6 cm、重さ 1.69 g である。137 は全面押圧剥離、裏面に素材剥片の背面剥離痕がある。ロケット形である。長さ 3.0 cm、幅 1.7 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 1.51 g である。138 は側縁と基部のみ押圧剥離を施す。長さ 2.6 cm、幅 1.9 cm、厚さ 0.5 cm、重さ 1.99 g である。139 は全面を押圧剥離する。先端が丸く加工されている。長さ 2.5 cm、幅 1.6 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 1.19 g である。140 は側縁を中心に押圧剥離を施すが、裏面に素材剥片の背面痕が残る。また、裏面の押圧剥離は非常に細かい。脚部が角のように細く突出する。長さ 2.6 cm、幅 1.4 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 1.43 g である。141 は 136 のロケット形の脚部が長い形態のものである。全面に細かい剥離痕があり、裏面の一部に素材剥片の背面痕跡が残る。長さ 2.1 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 0.61 g である。142 は一部に細かい剥離痕がある。裏面の一部に剥片剥離痕がある。脚部の長さは 136 より長く、141 より短い。長さ 2.3 cm、幅 1.3 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 0.81 g である。143 は当初の剥片剥離面を中央に残すが、側縁は押圧剥離を施す。長さ 2.7 cm、幅 1.1 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 0.51 g である。144 はロケット形の側縁中央部をさらに細くしたイカの形状に似た形態を呈する。全面押圧剥離である。長さ 2.6 cm、幅 1.2 cm、厚さ 0.5 cm、重さ 1.03 g である。145 は長さ 2.5 cm、幅 2.5 cm の正三角形で、全面押圧剥離である。厚さ 0.6 cm と分厚く、先端が明瞭でないことから、未製品の可能性がある。重さ 3.17 g である。146 は側縁に押圧剥離を施すが、表裏中央に元の素材剥片剥離痕を残す。長さ 2.3 cm、幅 1.4 cm、厚さ 0.4 cm、重さ 0.98 g である。147 は全面押圧剥離で、先端部は使用時に折損したものとみられる。長さ 1.9 cm、幅 1.2 cm、厚さ 0.3 cm、重さ 0.59 g である。

148 は石錐である。二上山産出のサヌカイトで、小さめの全面押圧剥離を行う。長さ 2.4 cm、幅 1.7 cm、上部の厚さ 0.5 cm、錐部の厚さ 0.4 cm、重さ 1.35 g である。Ⅲ区の土坑 3266 から出土した。

149 は削器である。主要剥離面の側縁部を押圧剥離する。背面は石核の外表面であり、剥離面と自然面が混在する。打点にも自然面が残る。剥離の稜が丸く磨滅していることから、使用痕とみられるが、刃自体に磨滅痕はほとんど認められない。縦 6.4 cm、横 7.0 cm、厚さ 1.4 cm、重さ 69.81 g である。石材は二上山産のサヌカイトである。Ⅲ区流路状遺構 3274 最下層から出土した。

150 は打製石斧状のものまたは石核とみられる側縁部を大きな剥離で加工したものである。細かい調整が入っていないので、上部の欠損は、製作時の可能性がある。石斧状のものであれば、おそらく両刃である。サヌカイト製である。長さ 6.5 cm、幅 5.0 cm、厚さ 1.3 cm、重さ 56.83 g である。Ⅰ区流路状遺構 1155 から出土した。

151 は二上山産サヌカイトの大型剥片である。下部の側縁にのみ剥離痕が認められる。背面の一部に自然面が残る。縦 10.3 cm、横 15.5 cm、厚さ 2.7 cm、重さ 540 g である。原材として持ち込まれたとみられる。I 区の柱穴から出土した。

152 ～ 154 はサヌカイトの石核である。152 は外側を粗い剥離で形を調整しているが、背面は一回の打撃による剥離のみである。上部は石核に加工した際に、数回の剥離を行っている。縦 4.8 cm、横 9.8 cm、厚さ 3.5 cm、重さ 128.80 g である。風化が著しく、白色を呈する。Ⅲ区の流路状遺構 3274 下層から出土した。153 は外側に自然面が残るが、様々な方向から剥離を加える。下半部はある程度の大きな剥片を採ったのち、剥片を採るために割ったとみられる。打点側に細かい剥離が多く入る。縦 3.5 cm、横 5.6 cm、厚さ 3.4 cm、重さ 80.69 g である。二上山産とみられる。I 区の流路状遺構 1155 から出土した。154 は上下左右あらゆる方向から剥片を採取しており、剥片の大きさも様々とみられる。それに対して、外面には全く調整を加えておらず、全面はすべて自然面である。縦 6.7 cm、横 9.4 cm、厚さ 6.1 cm、重さ 483 g である。二上山のサヌカイトである。I 区の土坑 527 から出土した。

155 は黒曜石の剥片である。肉眼観察では白色部分が大半を占めることから、大分県姫島産とみられる。主要剥離面に加工痕はなく、背面は石核外面の調整痕が残る。打点には石核の時の剥離痕がある。長さ 4.3 cm、幅 3.1 cm、厚さ 1.2 cm、重さ 9.41 g である。Ⅲ区の弥生時代遺構面を検出中に出土した。

156・157 は丸玉である。翡翠の比重 (3.24 ～ 3.43) 内に収まることから、翡翠製であろう。156 は風化が著しく、調整は不明である。孔は片側から回転によって穿孔する。孔の断面形状は円錐形である。ほぼ円形で、径 0.8 cm、高さ 0.6 cm、孔の最大径 0.5 cm、孔の最小径 0.2 cm、重さ 0.67 g である。Ⅲ区の流路状遺構 3274 から出土した。157 は平面形態が歪んでおり、正円形ではない。断面も二等辺三角形を横倒ししたような形状である。全面を丁寧に研磨する。片側からの回転穿孔で、断面形態は播鉢状に膨らむ。最大径 1.2 cm、高さ 0.8 cm、重さ 1.7 g、孔の最大径 0.5 cm、同最小径 0.2 cm である。I 区で縄文遺構面の検出作業中に出土した。

158 は凝灰岩製の有頭石棒である。頸部が縮まり、棒の部分が下方にいくほど少しずつ太くなっており、中央付近が膨らむ形態とみられる。頭頂部は平坦になっている。全面を研磨する。半分と棒部は欠損している。長さ 14.1 cm、幅 11.8 cm、厚さ 9.3 cm、重さ 1659 g である。I 区流路状遺構 1155 から出土したが、混入の可能性が高く、時期は縄文時代中期末から後期初頭に該当するとみられる。

159 ～ 163 は石刀の破片、164 ～ 168 は石刀の未製品である。材質は粘板岩または頁岩である。160・162・166 ～ 168 は I 区流路状遺構 1155、163 は流路状遺構 3263、その他の遺物は後世の包含層などから出土した。159 は柄から刃の部分で、刃は左側に付く。表面全体に上下方向の研磨痕があり、所々に筋状の擦痕が確認できる。柄の部分には区画線間に矢羽状文と格子文を施す。区画線は右下がりりで線幅約 0.2 cm、引き始めは浅いが最終的に深く彫り込む。矢羽状文は初めに下段の左下がりの沈線を引いた後で、上段の右下がりの沈線を引く。正確な上下一対ではない。

格子文の施文順序は矢羽状文と同様で左下がりの沈線が先である。文様の沈線幅は約0.1 cmである。何れの文様も部分的に区画線からはみ出して描かれている。上下端は折損し、裏面の半分以上が節理で割れている。断面は水滴形である。長さ17.6 cm、幅2.6 cm、厚さ1.9 cm、重さ125.00 gである。160は石刀の柄部である。上端は欠損しているが、柄頭に近い部分とみられる。2本平行の区画線と無文帯、区画線と左上がりの斜線文が交互に施文されている。区画線が先で、斜線文が後続、ただし一番下の線のみ斜線より後で引かれている。斜線は上から下まで1本で引くが、途中で継ぐ箇所もある。沈線幅は約0.1 cm。研磨痕は一部で上下方向のものが確認できるが、大半が横方向の細かい筋状の沈線を伴うものである。断面形状は扁平な楕円形である。長さ13.5 cm、幅3.2 cm、厚さ2.0 cm、重さ118.29 gである。161は柄から刃の部分である。刃は左側で、上下端が欠損している。全面を研磨する。上下方向と刃を付けるための横方向の研磨は細かく見えにくい、その後に付いたとみられる背と中央付近にみられる縦方向の研磨痕が明瞭に残る。節理で割れた部分に加工痕があることから、砥ぎ直しをしたと考えられる。文様は区画線と斜線文で、前者は幅約0.2 cm、後者は幅約0.1 cmである。上部の区画線は斜線文より先、下部の区画線は先後が統一されてない。裏面は全面節理で剥離している。断面形状は扁平な水滴形とみられる。被熱しているためか、白く変色している。長さ9.6 cm、幅2.7 cm、厚さ0.8 cm、重さ38.70 gである。162は先端部分に相当し、柄部側が折損している。上下方向の研磨痕と研磨した単位幅が残る。上部近くに横方向の粗い擦痕がある。先端は丸く研磨されている。断面形状は水滴形である。長さ16.3 cm、幅2.3 cm、上部の厚さ1.2 cm、重さ79.78 gである。163は先端部片である。全面を上下方向に研磨する。所々に研磨した単位幅が残る。背部は平らに整形、先端部は平らに切断して研磨する。裏面は大半が節理によって剥離している。先端部の剥離は研磨された痕跡が残るため、一度補修されている可能性がある。断面は筍形である。長さ14.4 cm、幅2.6 cm、厚さ1.2 cm、重さ61.24 gである。164は上下端が折損し、裏面が節理で割れた未製品である。右側縁に横方向の粗い研磨、左側縁に押圧剥離や細かい敲打痕のあとで研磨された痕跡が確認できる。断面形は隅丸方形に近い。長さ7.0 cm、幅3.1 cm、厚さ1.4 cm、重さ47.52 gである。165は先端部の未製品である。細かい敲打痕と押圧剥離を行った後中央から上下方向に研磨したとみられる。先端部や裏面は節理剥離のあとで研磨を行っている。断面形状は水滴形とみられる。長さ9.1 cm、幅2.5 cm、厚さ1.6 cm、重さ40.55 gである。166は刃部近くの未製品で、上部と裏面の大半を欠損する。右側縁下と左側縁に押圧剥離を加え、表面を細かく敲く。その後、左上から右下への研磨と、縦方向の研磨を行う。長さ6.1 cm、幅2.8 cm、厚さ0.7 cm、重さ17.44 gである。167・168は刃部の未製品である。167は上端を欠損し、部分的に節理で剥離している。押圧剥離や敲打痕のような痕跡もあるが、明瞭でない。左側の背部は上下方向に研磨されている。その他は左上から右下への研磨痕がある。断面形状は水滴形とみられる。長さ10.3 cm、幅3.2 cm、厚さ1.7 cm、重さ54.82 gである。168は上部を欠損、裏面が割れている。両側縁を細かく敲打して整形する。研磨痕は確認できなかった。断面形状は扁平な水滴形。長さ9.3 cm、幅3.8 cm、厚さ1.2 cm、重さ58.26 gである。

169は石錘である。砂岩質の堆積岩で、右側縁を加工しているようである。全面を研磨する。断面は扁平である。縦9.7 cm、横5.3 cm、厚さ1.2 cm、重さ88.46 gである。I区の縄文時代遺構面上を掘削中に出土。170は石錘で、材質は砂岩質の堆積岩である。切り目状の部分は角が取れてまくなっている。明確な加工痕がないので、自然石の可能性もある。断面形状は扁平である。縦6.5 cm、横4.4 cm、厚さ1.1 cm、重さ45.43 gである。Ⅲ区流路状遺構3274から出土した。

171～176は磨製石斧である。材質は172が泥岩、それ以外は砂岩または砂岩質である。172・175はI区流路状遺構1155、173はⅢ区流路状遺構3274、174は流路状遺構3263、それ以外は他の遺構などから出土した。171は蛤刃だが、横から見ると片刃のように片側の厚みがない。また、向かって右側の刃が短くなっていることから、使用による磨滅と考えられる。全面研磨しており、基端には敲打痕が残る。刃縁に縦方向の使用痕とみられる擦痕が確認できる。断面形状は隅丸方形。長さ7.9 cm、幅4.0 cm、厚さ2.1 cm、重さ76.10 gである。172は全面を割って調整する。刃部や側縁は細かく剥離を入れる。部分的に研磨しており、磨製石斧の未製品の可能性が高い。刃は両刃で、断面形状は変形杏仁形である。長さ8.7 cm、幅5.7 cm、厚さ2.0 cm、重さ122.53 gである。173は全面を研磨し、整形を丁寧に行っている。基端に大きな剥離痕がみられる。断面形状は隅丸方形で中央部が膨らむ。刃部が欠損している。長さ8.6 cm、幅6.6 cm、厚さ3.2 cm、重さ316 gである。174は蛤刃である。刃部と基端が欠損している。全面を研磨するが、側縁は少し粗い研磨である。断面は杏仁形。長さ11.7 cm、幅5.7 cm、厚さ3.9 cm、重さ340 gである。175は刃部が欠損する。全面を研磨し、基端も平らに研磨する。所々に凹凸部分が確認でき、製作時の痕跡とみられる。断面は楕円形である。長さ14.8 cm、幅6.8 cm、厚さ4.3 cm、重さ570 gである。176は乳棒状磨製石斧の刃部が欠損したものである。丁寧に整形され、研磨されている。基端の断面は円形、先端近くは楕円形。長さ13.3 cm、幅5.1 cm、厚さ4.1 cm、重さ412 gである。

177は異形石製品である。材質は砂岩で、全面を研磨し、上下縁を丸く加工する。左側縁に6箇所、右側縁には5箇所、右側縁下部には3箇所の刻みを施す。刻み後はほとんど整形した痕跡が認められない。上部中央に径約0.5 cm程度の敲打痕があり、裏面の同位置にも同じ形状のものがある。断面は山形である。磨石としては集中的に使用した痕跡がなく、また敲石としては敲打部分の傷みがないに等しい状態である。三重県天白遺跡出土の岩偶に類似形態のものがあるが、異なる点もあるため正確な用途は不明といわざるを得ない。長さ14.8 cm、幅6.0 cm、厚さ2.2 cm、重さ295 gである。Ⅲ区流路状遺構3274から出土した。

178～180は磨石とみられる全面を丁寧に研磨された楕円形の半分欠損したものである。すべて砂岩である。178は断面が楕円形である。長さ6.2 cm、幅7.0 cm、厚さ5.2 cm、重さ267 gである。I区流路状遺構1155から出土した。179は側縁の一部に敲打痕のような細かい凹みがある。断面は楕円形である。長さ7.8 cm、幅9.5 cm、厚さ6.3 cm、重さ764 gである。Ⅲ区流路状遺構3263から出土した。180は断面が楕円形で、全面を丁寧に研磨している。縦8.4 cm、横9.3 cm、厚さ5.4 cm、重さ483 gである。Ⅲ区流路状遺構3263から出土した。

181・182は凹石である。石材は砂岩で、前者はI区流路状遺構1155、後者はⅢ区流路状遺構

3263 から出土した。181 は全面を丁寧に研磨する。表面中央に敲击痕とみられる凹みがある。凹みは径 2.3 cm、深さ 0.3 cm 程度である。断面は楕円形。長さ 10.5 cm、幅 8.3 cm、厚さ 5.6 cm、重さ 732 g である。182 は全面を研磨する。表面の中央に敲击痕があり、その周辺は平坦になっている。敲击痕は径 2.1 cm、深さ 0.8 cm の不正円形の凹みである。断面は楕円形である。長さ 13.0 cm、幅 10.8 cm、厚さ 7.2 cm、重さ 1551 g である。

183・184 は台石とみられる。前者はきめの細かい砂岩、後者は泥岩とみられる淡緑色の堆積岩が使用されている。183 は中心の一部がわずかに凹む。表面は側縁近くまで平滑で、側縁は角をとる加工がされている。側縁には剥離または割れた痕跡があるが、使用のため擦れて丸くなっている。裏面には加工痕らしき痕跡は確認できない。縦 18.0 cm、横 18.5 cm、高さ 3.0 cm、重さ 1474 g である。I 区の焼土 995 北側で調査区を拡張した際に、縄文時代遺物包含層から出土した。184 は表面が端まで平滑で、平坦になっており、全面が使用されている。特に当初中央部分であった箇所はよく磨滅している。側縁は研磨加工しているところとしていないところがあり、欠損部の角が研磨または擦れて丸くなったところがある。裏面は未加工である。縦 28.0 cm、横 21.5 cm、高さ 5.0 cm、重さ 3979 g である。III 区の土坑 3273 から出土した。

185 は台石または石皿とみられる砂岩製品である。一部を除いて側縁はすべて欠損している。表面は平滑であるが、部分的差異がある。また、端へ近くなるほど研磨痕が確認できるが、逆に平坦さがなくなる。側縁は面取りの研磨加工がおこなわれている。裏面は平坦になるように研磨されているが、使用痕はない。側縁部に被熱したような痕跡があるが、使用状況を示しているかは不明である。縦 16.5 cm、横 20.0 cm、高さ 10.5 cm、重さ 5025 g である。I 区の流路状遺構 1155 から出土した。

186 は石皿とみられるが、台石としての使用も考えられる。石材は砂岩で、表面は全面研磨する。一部が径 8.0 cm、深さ 0.5 cm 程度にわたって凹むが、凹みの底はあまり平滑ではない。側縁は簡単に研磨されたか、または使用時に擦れて角が取れたとみられる。裏面は平坦に研磨され、部分的によく研磨されている部分があり、使用痕とみられる。縦 19.0 cm、横 18.5 cm、高さ 9.8 cm、重さ 4595 g である。I 区縄文時代遺物包含層直上から出土した。

5. ま と め

(1) 本年度調査の成果

本調査は、京都市の計画しているⅠ・Ⅱ・Ⅲ伏見向日町線道路建設工事に先立ち 2001 年度から断続的に実施してきた一連の調査の最終年度の調査である。長岡京右京二条三坊一・八町とこれと重複する上里遺跡の東端部分にあっている。

これまでの調査成果により、特に下層遺跡である上里遺跡では、2006 年度以降の調査において縄文時代晩期の集落が良好に遺存していることが明らかになり、学界のみでなく、周辺住民からも注目されていた。本調査では予想通りにⅠ区・Ⅲ区において、縄文時代晩期・弥生時代前期の集落に関わる遺構が検出でき、上里遺跡は小規模な集落ではなく、いずれも広く展開していることが明らかになった。残念ながら、Ⅱ区では長岡京期以降に小畑川あるいは善峰川の大規模な氾濫によって遺構面が削り込まれ、Ⅰ区との間に約 2 m の段丘崖を形成するとともに氾濫原となったため、長岡京期以前の遺構は確認できなかった。

以下には長岡京期、弥生時代前期、縄文時代晩期の各時期の本年度調査の成果をまとめ、2006 年度調査から本年度調査の各時期の成果を概観しておく。

長岡京期

本年度のⅠ区は右京二条三坊一町の東西の中央北部および一条大路の南端部にあたる。想定通り、北から一条大路南側溝（溝 26）、築地関連の 2 条の柱穴列（柱穴列 1・2）、内溝（溝 24）および宅地内整地層（整地 3）を検出した。しかし、2007 年度と同様に宅地内には建物は検出できなかった。また、Ⅲ区は一条大路と西三坊坊間東小路の交差点南部にあっており、想定通りに一条大路南側溝（溝 3010・3012）と直交する西三坊坊間東小路の西側溝（溝 3013）、東側溝（溝 3011）を検出した。新たな知見としては、優先されると考えていた大路の南側溝が小路路面を突き抜けておらず、小路側溝と考えられるごく浅い溝が大路路面を南北に横断していることが明らかとなった。

2001 年度以降の一連の調査は、一条大路の南端部に沿って西から東へ行ってきた。その結果、一条大路の南側溝を西四坊坊間小路の東側から西三坊坊間東小路の東（本調査Ⅰ区の東端）まで、途中で途切れつつも総延長約 720m にわたり検出できた。このなかで、南北方向の路との交差点の状況が明らかにできたのは本調査Ⅲ区のみである。前述したように一条大路南側溝は小路に臨み、突き抜けることなく、南へ屈曲して小路側溝に接続することが明らかになった。

一条大路に北面する宅地の北辺の利用状況も明らかになった。三坊八町では中央に 2 間×5 間掘立柱建物 5 棟が南に開く「コ」字状に整然と配置され、東側には高床倉庫とみられる 3 間四方の総柱と 2 間四方の掘立柱建物が南北に並んで建てられていた。一条大路に面した官衙的な建物群とみられる。これに対し東隣の一町では調査範囲である町の北辺には建物が全く検出されなかった。宅地の利用の仕方が全く異なるようである。



一条大路

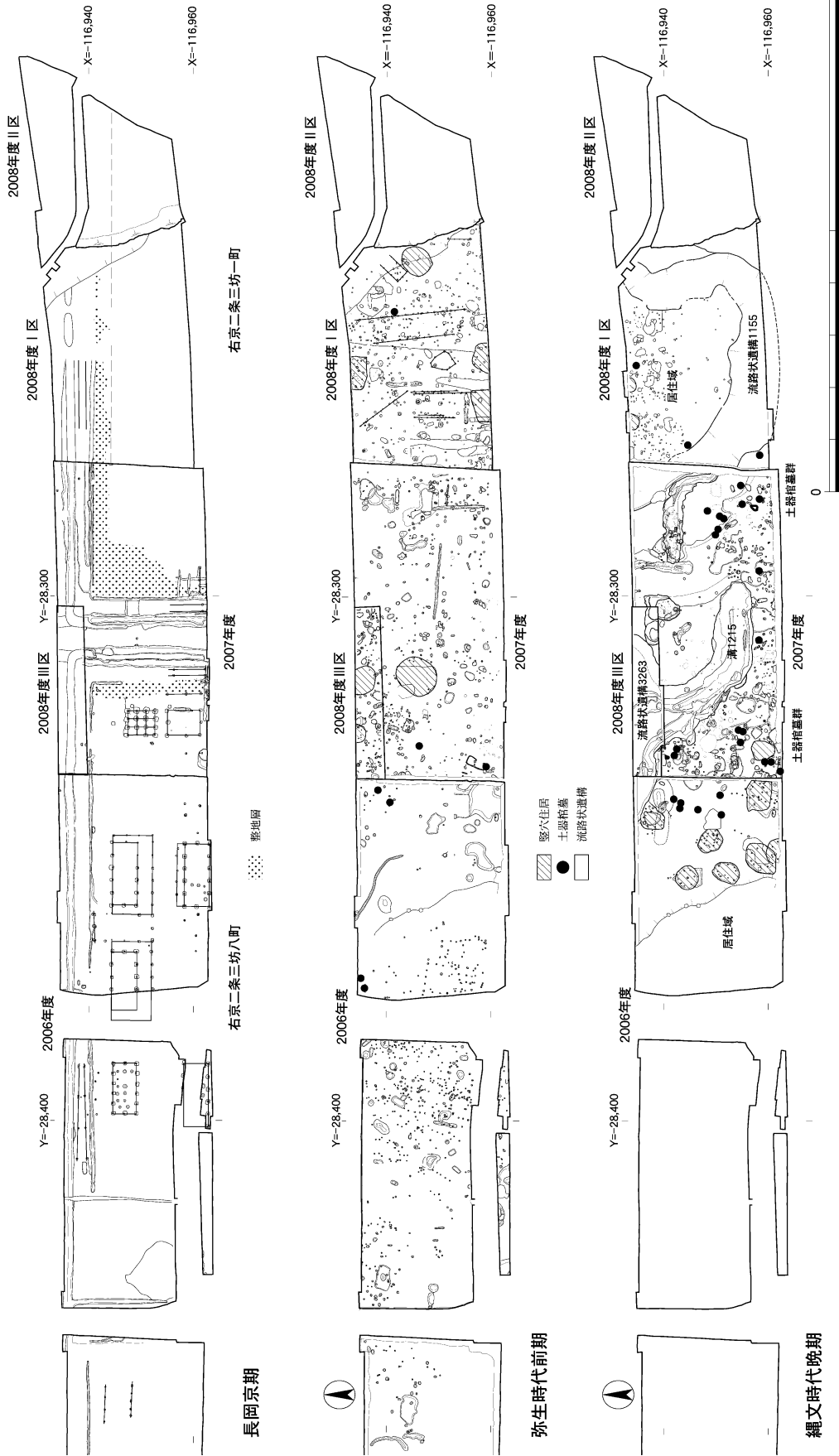


図59 長岡京期・弥生時代前期・縄文時代晚期主要遺構分布図 (1 : 1,200)

弥生時代前期

本年度Ⅰ区・Ⅲ区では共に竪穴住居・土坑のほか、柱穴など多数の遺構を検出している。Ⅰ区では焼土痕を6箇所検出しており、いずれも住居に伴わず、屋外炉の痕跡と考えられる。また、多数の柱穴があり、少なくとも小規模な建物1棟と南北方向の柱穴列が8条ほど復原できる。2条並行するものがみられ、どのように使われていたものか、検討が必要である。土器棺墓は1基検出した。

弥生時代前期の遺構は2006年度調査、2007年度調査においても検出している。2006年度調査でも多量の柱穴があり、建物としてまとめられなかったが、本調査と同様に柱穴列や円形あるいは方形の掘立柱建物になるものがあると思われる。土器棺墓も2006年度調査で4基、2007年度調査では2基検出した。本年度のものを合わせて7基がまばらに分布する状況であった。竪穴住居は2007年度調査で1棟、本年度Ⅲ区ではこれに隣接して2棟の竪穴住居があり、居住域と考えられる。また、Ⅰ区では4棟の竪穴住居を検出しており、ここにも居住域が想定される。このほかに焼土痕を数箇所確認しており、本年度同様住居に伴わない屋外炉のような施設とみられる。

この一連の調査では縄文時代晩期の遺構群が特に注目されるが、この弥生時代前期の遺構群も良好に検出されており、重要な成果である。これらの遺構群は畿内第Ⅰ様式中段階から新段階（新段階が主体的）に位置付けられ、下層の縄文時代晩期の遺構面を覆う厚さ0.2～0.4mの自然堆積層の上面を遺構面としており、層位的にも時間的にも縄文時代晩期の遺構群とは隔絶した良好な資料である。遺跡の属する乙訓地域、京都盆地における弥生文化の受容の在り方を考える上で、縄文時代晩期の遺構群とともに注目されるべき成果であろう。

縄文時代晩期

本年度Ⅲ区では、2007年度調査の北西部にあたっており、溝1215の北延長部である流路状遺構3263および関連遺構と東側で土坑3266を検出した。流路状遺構3263および関連遺構の埋土には多量の土器・石器とともに炭化物が含まれており、その分析により当時の食生活の復原が期待されている。また流路状遺構3263の東肩部土坑3266ではサヌカイト剥片が多量に出土し、石器製作址とも考えられる。Ⅰ区では竪穴住居・土坑・柱穴などの遺構は調査区の北半に集中し、南半には北西から南、そして北東へ大きく湾曲する流路状遺構1155を検出した。

一連の調査では縄文時代晩期前半の遺構群は2006年度調査の東半、2007年度調査区および本年度調査区Ⅰ・Ⅲ区で検出した。また晩期後半の遺構は約350m西の2003年度調査区で確認されている。

縄文時代晩期前半の遺構群は、溝および流路状遺構の周囲に展開していると考えられる。これら溝・流路状遺構は河川氾濫や堆積作用によって形成された自然の凹み状の地形であると考えられるが、当初は底部の深い箇所には湧水などによって滞水があり、これを生活用水とするため肩部の成形や盛土・石入れなど手入れをして利用したようである。居住域としては竪穴住居を中心とする溝1215の西側と流路状遺構1155の北側の地域があり、流路状遺構1155の遺物の出土状況などから南や東にも居住域が想定される。多く検出した土器棺墓も溝1215と西側居住域の

間と、流路状遺構 1155 の南西部の 2 箇所分布域があるようである。

溝および流路状遺構の埋没の状況から、しばらくすると洪水などによって埋まり始め、生活用水を確保できなくなると、不要物の廃棄場とされてしまうようである。大量の土器片や石器の欠片などとともに炭化物が多く廃棄され、当地での生活が放棄される。その後、大規模な堆積作用のために当地全体が 0.2 ～ 0.4m の厚さの堆積層で覆われて、起伏に富んだ地形が平坦化され、弥生時代前期の生活面が形成される。

(2) 自然科学分析について (表 4)

これまで記してきたように、2006 年度から本年度にかけての調査では縄文時代晩期の集落跡を良好に検出した。当該集落の解明のためには、遺構や土器の検討のみならず、当時の人々がどのような自然環境の下で生活をしてきたかを復原することも重要な研究課題である。このような観点から、2007 年度および本年度調査においては、主に縄文時代晩期の遺構・層位に対して自然科学分析を実施してきた。その概要は 2007 年度報告および本報告の付章に示した通りである。

同様に当時の食生活の復原も重要な課題である。幸い 2007 年度の溝 1215 や本年度の流路状遺構 1155 では埋土下層を中心に多量の土器や石器片とともに大量の炭化物が含まれていた。本遺跡では、これら溝・流路状遺構の近辺に居住域を配置して営まれた。したがって、これらの遺構から検出された種実の炭化物や動物骨片は食物残渣と考えて良いものと思われ、土層観察からも居住域と考えられる側の肩部に炭化物が多いことも廃棄の状況を示していると考えている。

実際に溝 1215 の埋土については土層記録のために各所に残したセクションより層位ごとに取り分けた埋土の水洗選別作業によって、大量の炭化物と骨片などが検出された。炭化物の大半は草木類の破片であったが、マメ・コメなどの穀物、クリ・クルミ・ドングリなどの種実が多く含まれていた。骨片はいずれも焼けて白色化した細片で、小型のものを中心とした哺乳類・鳥類・魚類のものが確認できている。さらに流路状遺構 1155 の埋土も採取して水洗選別作業を実施している。

ここで問題となるのが、出土した土器の年代観から縄文時代晩期の前半に位置付けられる溝 1215 の埋土から炭化米が検出されていることである。これは縄文時代晩期の前半に当地にすでに米がもたらされたことを示しており、近畿地方でこれまでに確認されているコメの年代を大きく遡らせるという大きな問題を含んでいた。

このため、出土した炭化米の実年代の測定が必要となり、2007 年度には国立歴史民俗博物館の西本豊弘教授に放射性炭素年代測定を依頼した。この際比較試料として同じ遺構の同じ層位から得られた炭化マメの測定も行った。その結果が、表 4 の 1 および 2 である。炭化米は紀元前 6 世紀から 4 世紀、炭化マメは紀元前 12 世紀から 11 世紀と大きく年代が開きが出た。これまでの年代観からは炭化マメの年代は遺構の年代観と一致しているが、炭化米は遺構より新しい弥生時代前期の年代を示した。

これを受けて今年度は、より正確を期すため同じ溝 1215 の同じ地点の上層 (5・6 層) と下層 (8 ～ 11 層) のそれぞれより出土した炭化米 1 個と炭化マメ 1 個の年代の測定を国立歴史民俗博物館

表4 放射性炭素年代測定および暦年較正結果（その1）

	地点名	試料名・層位	性状	測定年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				試料名	機関番号
					cal BC	相対比	中央値	最尤値		
1	07NG-EW06 溝1215	Y-316埋土 8～11層	炭化米	2,365±25	510 - 435 cal BC	40.0%	-	-	KYKZ-S1	PLD-10282
					430 - 390 cal BC	55.0%				
2	07NG-EW06 溝1215	Y-316埋土 8～11層	炭化種子 マメ	2,895±25	1,190 - 1,170 cal BC	4.15%	-	-	KYKZ-S2	PLD-10283
					1,165 - 1,140 cal BC	4.8%				
					1,130 - 1,000 cal BC	86.2%				
3	07NG-EW06 溝1215	北壁4～6層	炭化種子 オニグルミ	3,040±60	-	-	-	-	KYKZ-S3	PLD-11926
4	07NG-EW06 土坑1637	-	炭化種子 ドングリ	2,930±60	-	-	-	-	KYKZ-S4	PLD-11927
5	07NG-EW06 溝1215	84 Y-316埋土 5・6層	炭化種子 マメ	2,915±20	1,211 - 1,136 cal BC	28.1%	1,106 cal BC	1,121 cal BC	KYKZ-S5	PLD-14737
					1,136 - 1,021 cal BC	67.3%				
6	07NG-EW06 溝1215	84 Y-316埋土 5・6層	炭化米	2,445±20	751 - 686 cal BC	25.5%	526 cal BC	536 cal BC	KYKZ-S6	PLD-14738
					666 - 641 cal BC	7.4%				
					591 - 576 cal BC	2.4%				
					571 - 411 cal BC	60.0%				
7	07NG-EW06 溝1215	122 Y-316埋土 8～11層	炭化種子 マメ	2,860±20	1,116 - 971 cal BC	88.8%	1,026 cal BC	1,011 cal BC	KYKZ-S7	PLD-14739
					956 - 936 cal BC	6.6%				
8	07NG-EW06 溝1215	122 Y-316埋土 8～11層	炭化米	2,410±20	721 - 696 cal BC	5.5%	471 cal BC	476 cal BC	KYKZ-S8	PLD-14740
					541 - 401 cal BC	89.9%				

の西本豊弘教授に再度お願いした。さらに、同じ組み合わせのものを異なる測定機関で測定を行うため、パリノ・サーヴェイ株式会社にも測定を依頼した。国立歴史民俗博物館の方は（株）パレオ・ラボ（表4-5～6）、パリノ・サーヴェイ株式会社の方は（株）加速器分析研究所（表5-8～11）でそれぞれAMS法による測定を行った。

測定の結果は、炭化米は上層（5・6層）で2,445±20BPと2,520±30BP、下層（8～11層）では2,410±20BPと2,450±30BPであった。一方炭化マメは上層（5・6層）で2,915±20BPと3,000±30BP、下層（8～11層）では2,860±20BPと2,910±30BPであった。暦年較正年代では上下層間の年代差はあまり明瞭ではなく、炭化米は紀元前8～5世紀、炭化マメは紀元前13～11世紀、それぞれ前年の成果よりはやや古い年代が得られた。前年度と同様に、それぞれ同じ遺構・同じ層位の試料であるにも関わらず、炭化米は弥生時代前期、炭化マメは縄文時代晩期の年代を示した。

以上の結果およびその他の層位の試料の測定結果から、縄文時代晩期前半の年代は紀元前12世紀前後と考えられる。これに対して溝1215で検出された炭化米5個体はいずれも紀元前6世紀前後の年代が得られ、同一層のほかの試料の年代と比べても500年前後新しい値であった。溝1215から出土した土器類はいずれも滋賀里Ⅲa式から篠原式の縄文時代晩期前半のもののみで、弥生時代前期の土器類はまったく含まれない。現状では、炭化米のみが弥生時代前期の年代を示しており、上位層からの混入と考えなければならない。この点については、もう少し様々な角度からの検討を経て、結論を導きたいと考えるが、ここでは測定結果を公表しておきたい。

註

- 1) 現在、近畿地方で最古のコメの年代は、大阪府寝屋川市の讃良郡条理遺跡で、弥生時代前期古段階の土器とともに出土した「イネ胚乳」とされ、紀元前8～6世紀頃と測定されている。中尾智行ほか『寝屋川市 讃良郡条理遺跡 Ⅷ』(財)大阪府文化財センター調査報告書第187集、2009年1月。

付章 上里遺跡の自然科学分析結果の概要

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上里遺跡の発掘調査では、調査区の堆積層の形成過程およびその形成年代に関する情報を得ること、調査区および周辺の植生に関する情報を得ることを目的として、下記に示す自然科学分析を実施した。ここでは、分析調査により得られた結果の概要について報告し、発掘調査成果との複合的検討は稿を改めて報告することとしたい。

1 調査地点

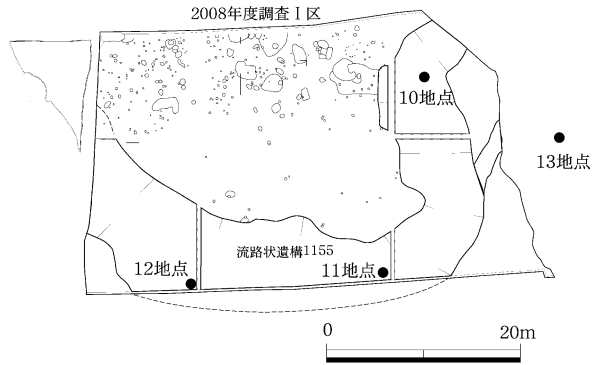
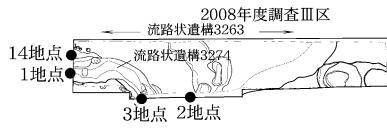
I区・III区における調査地点の堆積層の累重状況を模式柱状図として図60に示す。分析調査は、縄文時代晩期の滋賀里III a式を中心とする遺物が出土する遺構埋土および弥生時代前期の遺構埋土を中心に実施した。

2 調査区の堆積層の成因と年代について

各調査区の堆積層の成因を把握するために、現地での肉眼による層相観察、室内での不攪乱柱状試料の堆積物微細形態学的分析調査（X線写真・土壌薄片）を行った。また、堆積層の形成年代を推定するために堆積物中の炭化物・植物遺体を対象として放射性炭素年代測定を実施した。

III区では、縄文時代晩期の遺物は10層～3層下部から出土している。10層は、その下位の砂礫層上面の凹地部分を充填する、上方細粒化する、斜交・水平葉理構造をなす小礫・細礫混じり中粒砂から細粒砂からなる。侵食・堆積を繰り返しながら累重した流路充填堆積物と判断される。5層は暗褐色を呈する砂質泥からなる。著しく擾乱されており、炭化物・遺物・礫を比較的多く含む人為的に攪拌された堆積物である。本層形成期に構築された溝3274埋土は偽礫状の構造が確認される人為的堆積物（土壌）からなるが、間層として泥層を挟在している。4層は炭化物・土器が混じる砂混じり泥からなる、水底下で形成された堆積物と推定される。本層は肉眼観察では塊状を呈するが、X線写真をみると塑性変形していることが確認される。3層はIII区の広い範囲をシート状に覆う、上方粗粒化する極細粒砂～細粒砂からなる。肉眼観察では、上位方向から伸びる植物根の影響で初生の堆積構造が不明瞭となっているが、X線写真では不明瞭ながら水平葉理が確認される。氾濫堆積物と判断される。一方、10層～3層より出土した炭化物の放射性炭素年代測定値は、補正年代で $3050 \pm 50\text{yBP}$ から $2890 \pm 40\text{yBP}$ と比較的近似する値を示したことから、10層から3層が比較的短期間に形成されたことが推定される。

以上のことから、縄文時代晩期（滋賀里III a式期）の人間活動が存在した期間に、III区の堆積環境は大きく変化したことが推定される。すなわち、当初の調査区は侵食・堆積を繰り返す流路であったが、流路充填に伴い減衰し、調査区内が人間活動領域へと変化し、溝などの遺構が構築される。その後、何らかの原因により水位が上昇し、氾濫堆積物が流入する堆積環境に変化した



2007年度調査区
2008年度調査Ⅲ区

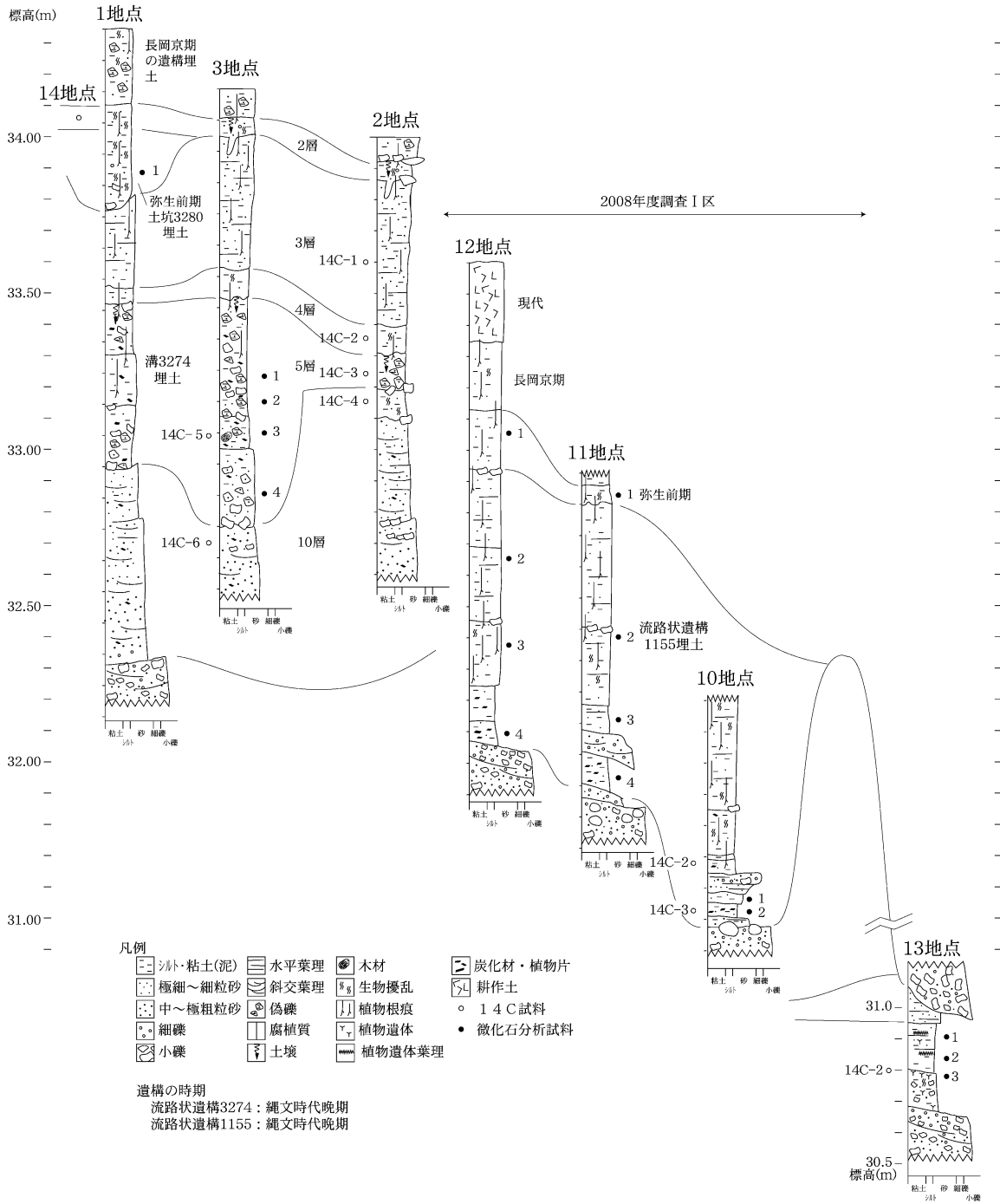


図 60 調査地点の位置および分析層準

表5 放射性炭素年代測定および暦年較正結果 (その2)

	地点名	試料名・層位	性状	測定年代 (BP)	$\delta^{13}C$ (%)	補正年代 (BP)	暦年較正年代 (cal)				Code No.
							誤差	cal.BC		calBP	
1	Ⅲ区 2地点	14C-1 3層	炭化材	2910±30	-23.92±0.42	2920±30 (2923±31)	σ	cal BC 1,193 - 1,172	cal BP 3,142 - 3,121	0.154	IAAA-90754
								cal BC 1,168 - 1,142	cal BP 3,117 - 3,091	0.200	
								cal BC 1,133 - 1,053	cal BP 3,082 - 3,002	0.646	
								cal BC 1,257 - 1,235	cal BP 3,206 - 3,184	0.048	
								cal BC 1,215 - 1,016	cal BP 3,164 - 2,965	0.952	
								cal BC 1,378 - 1,337	cal BP 3,327 - 3,286	0.433	
2	Ⅲ区 2地点	14C-2 4層	炭化材	3050±30	-25.35±0.61	3040±30 (3041±31)	σ	cal BC 1,321 - 1,266	cal BP 3,270 - 3,215	0.567	IAAA-90755
								cal BC 1,407 - 1,252	cal BP 3,356 - 3,201	0.932	
								cal BC 1,241 - 1,213	cal BP 3,190 - 3,162	0.068	
								cal BC 1,118 - 1,020	cal BP 3,067 - 2,969	1.000	
								cal BC 1,207 - 1,202	cal BP 3,156 - 3,151	0.005	IAAA-90756
								cal BC 1,195 - 1,141	cal BP 3,144 - 3,090	0.103	
3	Ⅲ区 2地点	14C-3 5層	炭化材	2900±30	-25.69±0.53	2890±30 (2890±30)	σ	cal BC 1,134 - 977	cal BP 3,083 - 2,926	0.892	
								cal BC 1,210 - 1,111	cal BP 3,159 - 3,060	0.812	
								cal BC 1,103 - 1,081	cal BP 3,052 - 3,030	0.137	IAAA-90757
								cal BC 1,065 - 1,056	cal BP 3,014 - 3,005	0.051	
								cal BC 1,260 - 1,226	cal BP 3,209 - 3,175	0.094	
								cal BC 1,222 - 1,038	cal BP 3,171 - 2,987	0.895	
								cal BC 1,034 - 1,028	cal BP 2,983 - 2,977	0.010	
								cal BC 1,248 - 1,245	cal BP 3,197 - 3,194	0.017	
4	Ⅲ区 2地点	14C-4 10層上部	炭化材	2940±30	-25.21±0.42	2930±30 (2933±31)	σ	cal BC 1,212 - 1,111	cal BP 3,161 - 3,060	0.844	IAAA-90758
								cal BC 1,102 - 1,084	cal BP 3,051 - 3,033	0.103	
								cal BC 1,064 - 1,057	cal BP 3,013 - 3,006	0.035	
								cal BC 1,262 - 1,040	cal BP 3,211 - 2,989	0.999	
								cal BC 1,032 - 1,030	cal BP 2,981 - 2,979	0.001	
								cal BC 1,257 - 1,236	cal BP 3,206 - 3,185	0.155	
6	Ⅲ区 3地点	14C-6 10層下部	炭化材	2960±30	-25.45±0.46	2950±30 (2950±31)	σ	cal BC 1,215 - 1,122	cal BP 3,164 - 3,071	0.845	IAAA-90759
								cal BC 1,288 - 1,283	cal BP 3,237 - 3,232	0.005	
								cal BC 1,269 - 1,049	cal BP 3,218 - 2,998	0.995	
								cal BC 1,009 - 928	cal BP 2,958 - 2,877	1.000	
								cal BC 1,108 - 1,105	cal BP 3,057 - 3,054	0.003	IAAA-91136
								cal BC 1,076 - 1,065	cal BP 3,025 - 3,014	0.009	
7	Ⅲ区 14地点	西壁sec. 2層	炭化材	2830±30	-25.11±0.44	2820±30 (2823±31)	σ	cal BC 1,056 - 900	cal BP 3,005 - 2,849	0.986	
								cal BC 799 - 758	cal BP 2,748 - 2,707	0.839	
								cal BC 683 - 670	cal BP 2,632 - 2,619	0.161	IAAA-91137
								cal BC 804 - 747	cal BP 2,753 - 2,696	0.649	
								cal BC 688 - 665	cal BP 2,637 - 2,614	0.152	
								cal BC 644 - 588	cal BP 2,593 - 2,537	0.153	
8	07NG-EW 6 溝1215	56 イネ Y-316 埋土5・6層	炭化 胚乳 イネ	2520±30	-25.53±0.45	2560±30 (2562±30)	σ	cal BC 583 - 554	cal BP 2,532 - 2,503	0.046	
								cal BC 1,207 - 1,204	cal BP 3,156 - 3,153	0.021	
								cal BC 1,195 - 1,140	cal BP 3,144 - 3,089	0.455	IAAA-91138
								cal BC 1,134 - 1,108	cal BP 3,083 - 3,057	0.219	
								cal BC 1,104 - 1,071	cal BP 3,053 - 3,020	0.235	
								cal BC 1,066 - 1,056	cal BP 3,015 - 3,005	0.070	
								cal BC 1,258 - 1,232	cal BP 3,207 - 3,181	0.068	
								cal BC 1,217 - 1,023	cal BP 3,166 - 2,972	0.932	
9	07NG-EW 6 溝1215	77 マメ Y-316 埋土5・6層	炭化 種子 マメ	3000±30	-29.50±0.49	2930±30 (2929±30)	σ	cal BC 751 - 686	cal BP 2,700 - 2,635	0.358	IAAA-91139
								cal BC 667 - 638	cal BP 2,616 - 2,587	0.146	
								cal BC 619 - 615	cal BP 2,568 - 2,564	0.011	
								cal BC 594 - 508	cal BP 2,543 - 2,457	0.415	
								cal BC 438 - 420	cal BP 2,387 - 2,369	0.070	
								cal BC 756 - 684	cal BP 2,705 - 2,633	0.275	
								cal BC 669 - 477	cal BP 2,618 - 2,426	0.578	
								cal BC 473 - 413	cal BP 2,422 - 2,362	0.147	
10	07NG-EW 6 溝1215	138 イネ Y-316 埋土8~11層	炭化 胚乳 イネ	2450±30	-24.44±0.57	2460±30 (2460±32)	σ	cal BC 1,254 - 1,239	cal BP 3,203 - 3,188	0.096	IAAA-91140
								cal BC 1,214 - 1,113	cal BP 3,163 - 3,062	0.844	
								cal BC 1,098 - 1,090	cal BP 3,047 - 3,039	0.050	
								cal BC 1,264 - 1,041	cal BP 3,213 - 2,990	1.000	
								cal BC 1,193 - 1,173	cal BP 3,142 - 3,122	0.174	IAAA-91723
								cal BC 1,166 - 1,142	cal BP 3,115 - 3,091	0.213	
								cal BC 1,132 - 1,108	cal BP 3,081 - 3,057	0.227	
								cal BC 1,105 - 1,056	cal BP 3,054 - 3,005	0.386	
								cal BC 1,256 - 1,236	cal BP 3,205 - 3,185	0.043	
								cal BC 1,215 - 1,026	cal BP 3,164 - 2,975	0.957	
11	07NG-EW 6 溝1215	141 マメ Y-316 埋土8~11層	炭化 種子 マメ	2910±30	-23.24±0.49	2940±30 (2940±31)	σ	cal BC 1,254 - 1,239	cal BP 3,203 - 3,188	0.122	IAAA-91724
								cal BC 1,214 - 1,113	cal BP 3,163 - 3,062	0.844	
								cal BC 1,098 - 1,090	cal BP 3,047 - 3,039	0.050	
								cal BC 1,264 - 1,041	cal BP 3,213 - 2,990	1.000	
								cal BC 1,193 - 1,173	cal BP 3,142 - 3,122	0.174	IAAA-91725
								cal BC 1,166 - 1,142	cal BP 3,115 - 3,091	0.213	
								cal BC 1,132 - 1,108	cal BP 3,081 - 3,057	0.227	
								cal BC 1,105 - 1,056	cal BP 3,054 - 3,005	0.386	
								cal BC 1,256 - 1,236	cal BP 3,205 - 3,185	0.043	
								cal BC 1,215 - 1,026	cal BP 3,164 - 2,975	0.957	
12	Ⅰ区 流路状遺構1155 南西部	集石1430 上層シルト	炭化材	3060±30	-33.06±0.46	2930±30 (2926±26)	σ	cal BC 1,254 - 1,239	cal BP 3,203 - 3,188	0.122	IAAA-91724
								cal BC 1,214 - 1,125	cal BP 3,163 - 3,074	0.878	
								cal BC 1,263 - 1,055	cal BP 3,212 - 3,004	1.000	
								cal BC 1,253 - 1,240	cal BP 3,202 - 3,189	0.101	
								cal BC 1,213 - 1,121	cal BP 3,162 - 3,070	0.899	IAAA-91725
								cal BC 1,260 - 1,055	cal BP 3,209 - 3,004	1.000	
								cal BC 1,208 - 1,139	cal BP 3,157 - 3,088	0.597	
								cal BC 1,135 - 1,111	cal BP 3,084 - 3,060	0.213	
								cal BC 1,102 - 1,083	cal BP 3,051 - 3,032	0.135	IAAA-91726
								cal BC 1,064 - 1,057	cal BP 3,013 - 3,006	0.055	
								cal BC 1,259 - 1,231	cal BP 3,208 - 3,180	0.069	
								cal BC 1,218 - 1,041	cal BP 3,167 - 2,990	0.931	
16	Ⅰ区東側(Ⅱ区) 13地点	14C-2 縄文晩期 の基盤層	トチノキ 果皮	5680±30	-30.45±0.48	5590±30 (5591±32)	σ	cal BC 4,454 - 4,439	cal BP 6,403 - 6,388	0.206	IAAA-91727
								cal BC 4,425 - 4,369	cal BP 6,374 - 6,318	0.794	
								cal BC 4,488 - 4,470	cal BP 6,437 - 6,419	0.043	
								cal BC 4,465 - 4,354	cal BP 6,414 - 6,303	0.957	
								cal BC 503 - 497	cal BP 2,452 - 2,446	0.053	IAAA-911897
								cal BC 488 - 461	cal BP 2,437 - 2,410	0.320	
								cal BC 451 - 440	cal BP 2,400 - 2,389	0.097	
								cal BC 418 - 396	cal BP 2,367 - 2,345	0.530	
								cal BC 517 - 393	cal BP 2,466 - 2,342	1.000	

1) 年代値の算出にはLibbyの半減期5568年を使用し、BP年代値は1950年を基点として何年前であるかを示す。誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

2) 暦年較正計算は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV5.02 (Copyright 1986-2005 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。計算には補正年代の括弧内の丸める前の値を使用。結果は1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

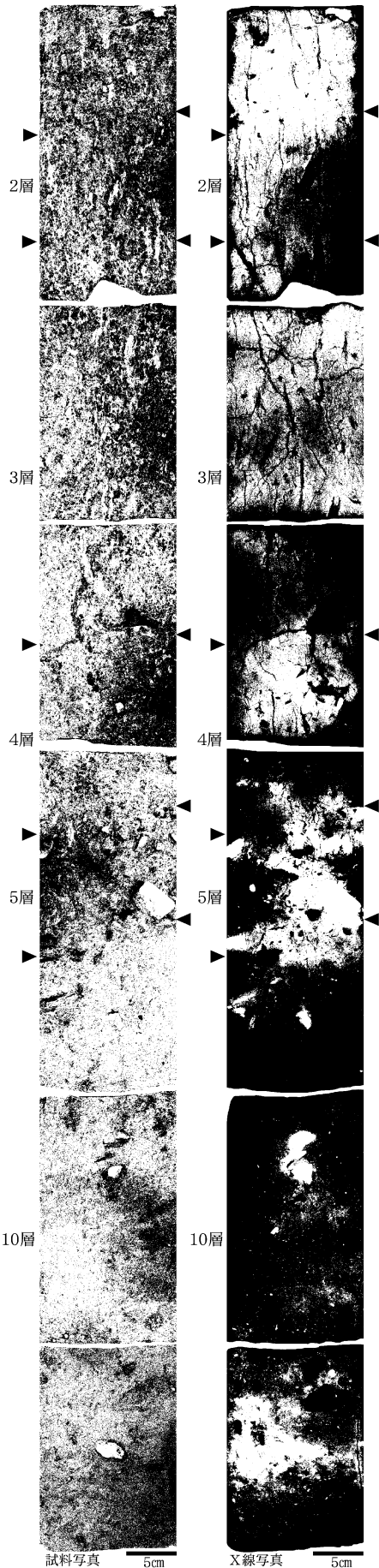
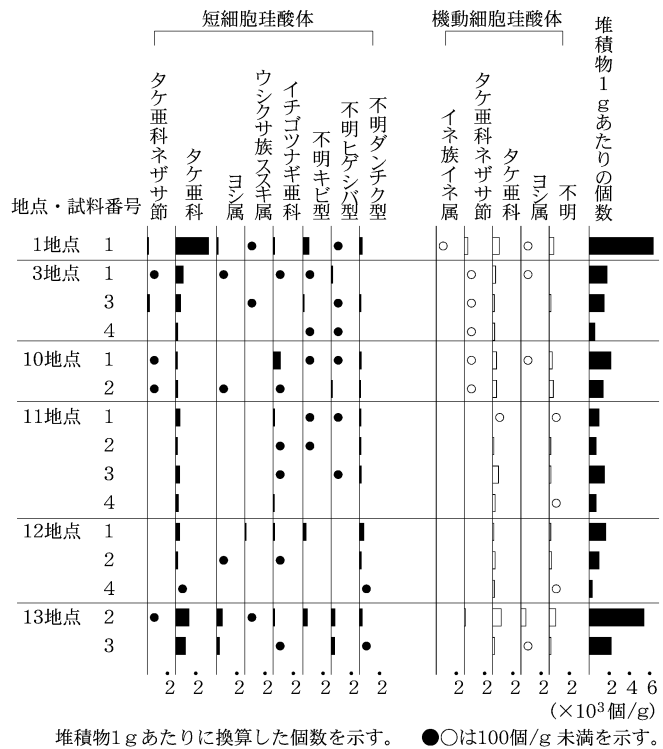


図 61 2地点の試料およびX線写真

表 6 花粉分析結果

種 類	地点・試料番号								
	1地点	3地点			10地点	11地点	13地点		
	1	1	3	4	1	2	4	2	3
木本花粉									
マキ属	-	-	-	-	-	5	-	-	-
モミ属	-	-	-	-	2	37	-	-	-
ツガ属	-	-	-	-	-	4	1	-	-
トウヒ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属	-	-	-	-	-	20	-	-	-
コヤマキ属	-	-	-	-	1	12	-	-	-
スギ属	-	-	-	-	-	2	-	-	-
クルミ属	-	-	-	-	-	11	-	-	-
クマシデ属-アサダ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ブナ属	-	-	-	-	-	4	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	4	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	5	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	-	-	-	2	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	-	-	2	-	-	-
フウ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
コクサギ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
カエデ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ミズキ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
草本花粉									
イネ科	-	-	-	-	-	1	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	1	3	-	-	-
アカザ科	-	-	-	-	-	2	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
キク亜科	-	-	-	-	1	-	1	-	-
シダ類孢子									
ヒカゲノカズラ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-
イノモトソウ属	3	-	-	-	-	3	2	15	-
他のシダ類孢子	7	-	-	2	41	403	36	60	5
合 計									
木本花粉	0	0	0	0	3	114	1	0	0
草本花粉	0	0	0	0	2	7	1	0	0
シダ類孢子	10	0	0	2	41	407	38	75	5
総計 (不明を除く)	10	0	0	2	46	528	40	75	5



堆積物1gあたりに換算した個数を示す。●○は100個/g未滿を示す。

図 62 各地点の植物珪酸体含量密度

ことが推定される。I区でも、流路状遺構 1155 を充填する堆積物の層相および年代値から、調査区内で縄文時代晩期の人間活動が確認される時期以降の堆積環境の変化は、基本的にはⅢ区と類似する。ただし、I区東側では調査区東側から流入した氾濫堆積物も確認される。また、縄文時代晩期の遺構の基盤をなす砂礫層は、その下位層準の泥～砂質泥層中の植物遺体の年代値から、縄文時代前期から縄文時代晩期までの間の時期に形成されたことが窺える。

今回の調査では、縄文時代晩期滋賀里Ⅲ a 式の遺物が出土する堆積層中の炭化物に多数の年代値が得られており、補正年代値で 2900 ～ 3000 年前に集中していることが窺える。縄文時代後期から晩期の土器付着物の年代値は、周辺地域では京都盆地北部の北白川追分遺跡で滋賀里Ⅲ b 式で $2760 \pm 40\text{BP}$ (calBC 1000-825 年)、滋賀里Ⅲ b ～Ⅳ式で $2640 \pm 50\text{BP}$ (calBC 915-755 年)、湖東地域（滋賀県安土町の竜ヶ崎 A 遺跡、滋賀県守山市の赤野井浜遺跡）の滋賀里Ⅱ式で $2905 \pm 25\text{BP}$ (calBC 1135-1010 年) から $2990 \pm 25\text{BP}$ (calBC 1315-1125 年)、滋賀里Ⅲ a 式で $2985 \pm 25\text{BP}$ (calBC 1310-1125 年) ・ $3085 \pm 25\text{BP}$ (calBC 1420-1295 年)、滋賀里Ⅲ b 式で $2710 \pm 25\text{BP}$ (calBC 905-810 年) から $2860 \pm 25\text{BP}$ (calBC 1120-970 年)、滋賀里Ⅳ式で $2650 \pm 25\text{BP}$ (calBC 840-790 年) の年代値が得られている（西本編,2006・2007）。これらの土器付着物の年代値からみて、今回の年代値は同調的な結果とみなせる。ただし、2007 年度調査区の溝 1215 から出土した炭化したイネの胚乳は、これらより 400 ～ 500 年程度新しい年代値を示している。縄文時代晩期の遺構埋土を覆う氾濫堆積物には上位方向から伸びる、粘土により充填されているものを含む、幅 5 ～ 1 mm 程度の植物根痕跡が密に分布している。また、後述するように植物珪酸体分析結果では縄文時代晩期の遺構埋土を覆う氾濫堆積物から栽培植物のイネ属が全く検出されていない。これらのことを踏まえると、炭化したイネは上位の弥生時代前期層準からの落ち込みの可能性がある。ただし、昨年度実施されている炭化イネの年代値は、補正年代値で $2365 \pm 25\text{yBP}$ を示しており（高橋,2008）、今回の結果を含めるとバラツキが生じていることがうかがえる。縄文時代晩期の遺構埋土から出土したイネの評価については、今回のⅢ・I 区の遺構埋土における栽培植物の産状も含め、慎重な評価が必要と考える。

3 調査区および周辺の古植生

各調査地点における花粉・植物珪酸体分析結果を表 6 ・ 図 62 に示す。花粉化石は、I 区の流路状遺構 1155 埋土のうち、10 地点の最下部のみから産出したが、それ以外の層準からはほとんど産出しなかった。一方、植物珪酸体は、いずれの地点・層準からも産出するが、その含量密度は少なく、特に縄文時代晩期の遺構を埋積する氾濫堆積物で著しく少なかった。このように花粉・植物珪酸体が少なかった原因としては、堆積速度や堆積後の風化作用の影響に起因する可能性がある。

10 地点の流路状遺構 1155 埋土最下部の花粉化石群集をみると、モミ属・マツ属・コウヤマキ属といった針葉樹が比較的多産し、クルミ属・コナラ属・エノキ属・ムクノキ属・コクサギ属などの落葉広葉樹や常緑広葉樹のアカガシ亜属などを伴う組成を示している。産出した花粉化石の

保存状態が悪く、風化に対する抵抗性が強い針葉樹花粉やシダ類孢子（徳永・山内,1971）が多産していることを踏まえると、偏った組成になっている可能性があるものの、縄文時代晩期の植物相を考える上で重要な情報である。産出種類のうち、針葉樹は、いわゆる温帯針葉樹に由来するものと判断される。温帯針葉樹は斜面崩壊地や地滑りなどにより鉱質土壌が露出する攪乱地が生育適地とされる（中静,2004）。また、クルミ属やコクサギ属、エノキ属－ムクノキ属などの落葉広葉樹は河畔林や溪谷林の構成要素でもある。これらのことと、2007年度調査区の縄文時代晩期の溝1215埋土から針葉樹のモミ属、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ近似種・エノキ属などの炭化材が産出していることを踏まえると、縄文時代晩期には調査区を流下していた流路沿いなど、河川攪乱等の影響を受ける領域には、クルミ属やコクサギ属、エノキ属－ムクノキ属などからなる落葉広葉樹林が水文条件に応じて分布しており、これらの分布域より土地的に安定した場所や山地斜面などに常緑広葉樹のアカガシ亜属などが分布していたものと思われる。また、温帯針葉樹も攪乱地を中心に分布していた可能性がある。

一方、縄文時代晩期の調査区は、上記した堆積環境、および局地的な植生を反映する可能性が高い草本花粉や植物珪酸体の産状を複合的に捉えると、植生が発達していた可能性は低い。すなわち、縄文時代晩期の調査区は、繰り返される河川氾濫、水位変動、人為的攪乱といった、複数の植生攪乱の影響を頻繁に受ける領域であったことが関係しているものと思われる。

弥生時代の土坑埋土では、縄文時代晩期の層準に比較して、植物珪酸体含量密度が高くなる。遺構を埋積する堆積物は遺構周囲から再堆積した土壌の可能性が高く、弥生時代前期頃には調査区近辺にネザサ節などのササ類などが生育する時期が存在したことが推定される。また、本堆積物中からは低密度ながらも栽培植物のイネ属由来の植物珪酸体が産出した。上位層準から落ち込みの可能性も否めないが、弥生時代前期における稲作を考える上で重要であり、今後、複数の弥生時代前期の遺構埋土の分析を行い、イネ属の産状について評価検討する必要がある。

引用文献

- 中静 透,2004,日本の森林 / 多様性の生物学シリーズ① 森のスケッチ東海大学出版会,236p.
西本豊弘 編,2006,新弥生時代のはじまり 第1巻 弥生時代の新年代 雄山閣,143p.
西本豊弘 編,2007,新弥生時代のはじまり 第2巻 縄文時代から弥生時代へ 雄山閣,185p.
高橋 潔,2008,上里遺跡で見つかった炭化米と豆,リーフレット京都No.236,(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館
徳永重元・山内輝子,1971,花粉・孢子.化石の研究法 共立出版株式会社,50-73p.

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうきょうにじょうさんぼういち・はっちょうあと、かみさといせき							
書名	長岡京右京二条三坊一・八町、上里遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-9							
編著者名	高橋 潔・近藤奈央・大立目 一・津々池惣一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年2月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 かみさといせき 上里遺跡	きょうとしにしきょうく 京都市西京区 おおはらのかみさとみなみ 大原野上里南 のちょうちない ノ町地内	26100	3 1047	34度 56分 44秒	135度 41分 26秒	2009年3月 18日～2009 年11月5日	2,323㎡	道路建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
長岡京跡	都城跡	長岡京期	一条大路および南側溝、西三坊坊間東小路および東西両側溝、右京二条三坊一町北辺の整地層など	土師器、須恵器、土製品	一町の北辺では建物他の施設は設けられなかった。一条大路と東小路との交差点南部の構造判明。			
上里遺跡	集落跡	縄文時代晩期	竪穴住居、炉、土器棺墓、土坑、柱穴、流路状遺構、配石遺構、集石遺構など	縄文土器、石器、玉類	集落範囲広がり、流路状遺構の周辺に居住域・土器棺墓群が展開する状況が判明。			
		弥生時代前期	竪穴住居、掘立柱建物、土器棺墓、溝、土坑、柱穴、炉、柱穴列など	弥生土器、石器	2007年度調査区の東にも遺構が濃密に広がることが判明。			
		奈良時代以前	溝など	土師器、須恵器				
		長岡京期以降 (中世か)	掘立柱建物、耕作に伴う整地層・溝、河川氾濫原・段丘崖					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-9
長岡京右京二条三坊一・八町跡、上里遺跡

発行日 2010年2月26日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961